製塩土器観察表

No	出土地区	出土遺構	部位	特徴	登録	写真図版	No	出土地区	出土遺構	部位	特徴	登録	写真図版
1	北1西3区	SE502掘り方	口縁部	外面：ナデ、マメツ 内面：ヨコナデ	R9	40－3	27	東西大路	SX10Ⅰ東	底部	外面：オサエ、もみ痕 内面：ナデ	R4	40－21
2	北1西3区	SE502抜き	口縁部	外面：ナデ　内面：ナデ	R36	40－4	28	東西大路	SX10Ⅰ東	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R47	
3	北1西3区	SE502抜き	口縁部	外面：オサエ→かるいナデ 内面：ヨコナデ	R32	40－1	29	南1道路	SX1360路1	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R2	
4	北1西3区	SE502抜き	口縁部	外面：剥落　内面：ナデ	R33		30	北1西3区	遺構確認	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R49	
5	北1西3区	SE502抜き	口縁部	外面：ナデ　内面：ナデ	R34	40－8	31	北1西3区	遺構確認	底部	外面：オサエ　内面：剥落	R30	
6	北1西3区	SE502抜き	口縁部	外面：ナデ　内面：ナデ	R31	40－9	32	北1西3区	SB860	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R50	
7	北1西3区	SE502抜き	口縁部	外面：ナデ　内面：ナデ	R35	40－11	33	北1西3区	SI531	底部	外面：オサエ、もみ痕 内面：ナデ	R10	40－19
8	北1西3区	SE502掘り方	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R8		34	北1西3区	SI552	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R65	
9	北1西3区	SE502掘り方	底部	外面：オサエ→ナデ 内面：剥落	R7	40－16	35	北1西3区	SI531	底部	外面：オサエ、下端ヨコナデ、 もみ痕　内面：ナデ	R25	40-20,31
10	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R40		36	北1西3区	SI552	底部	外面：オサエ、下端ヨコナデ、 もみ痕　内面：ナデ	R26	40－25
11	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：オサエ→ナデ、下端ヨコ ナデ　内面：剥落	R22	40－17	37	北1西3区	SK505	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R14	
12	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：オサエ　内面：剥落	R38	40－15	38	北1西3区	SK513	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R43	
13	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R39		39	北1西3区	SK530	底部	外面：オサエ、もみ痕 内面：ナデ	R17	40-18,30
14	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R41		40	北1西3区	SK530	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R19	40－27
15	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R42		41	北1西3区	SK530	底部	外面：ナデ　内面：剥落	R54	40－23
16	北1西3区	SE502抜き	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R61		42	北1西3区	SK530	底部	外面：ナデ　内面：剥落	R20	
17	東西大路	SX10Ⅰ東	口縁部	外面：ナデ　内面：ヨコナデ	R48		43	北1西3区	SK532	底部	外面：オサエ→ナデ 内面：ナデ	R11	40－14
18	東西大路	SX10Ⅰ東	口縁部	外面：ナデ　内面：ナデ	R6	40－7	44	北1西3区	SK551	底部	外面：オサエ→ナデ 内面：ナデ	R24	40－12
19	西2道路	SX30E・F東	口縁部	外面：ナデ　内面：ナデ	R51	40－2	45	北1西3区	SD501	底部	外面：オサエ、もみ痕 内面：ナデ	R21	
20	北1西3区	SK505	口縁部	外面：オサエ→ナデ 内面：ナデ	R13	40－5	46	南1西2区	SK2019	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R45	
21	北1西3区	SK532	口縁部	外面：オサエ　内面：マメツ	R12	40－6	47	南1西2区	SD1111	底部	外面：オサエ→ナデ 内面：ナデ	R27	40－22
22	北1西3区	SK568	口縁部	外面：オサエ　内面：ナデ	R44	40－10	48	南1西2区	SD1020C機能	底部	外面：オサエ 内面：ナデ　底部にもみ痕	R53	
23	東西大路	SX10	底部	外面：オサエ　内面：剥落	R16		49	南1西2区	SD1020C廃棄	底部	外面：不明　内面：ナデ	R77	
24	西2道路	SX20	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R15	40－13	50	河川	SD2000	底部	外面：ナデ　内面：ナデ	R1	40－26
25	東西大路	SX10Ⅰ東	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R3		51	北1西3区	SK503	底部	外面：オサエ　内面：ナデ 底径27.6cm	R83	40－28
26	東西大路	SX10Ⅰ東	底部	外面：オサエ　内面：ナデ	R5		52	西2道路	SX20Ⅰ東	完脚	外面：オサエ→かるいナデ 内面：オサエ→ナデ口径9.4cm	R23	40－29

2　瓦

瓦は土器に次いで出土量が多く、平箱にして約90箱出土している。そのほとんどが丸瓦と平瓦の破片資料であるが、軒丸瓦や軒平瓦、刻印文字瓦、ヘラ書き瓦も少量みられた。ここでは、ある程度年代の特定が可能な軒瓦や、文字・記号瓦類について、多賀城跡における分類をもとに説明を加える。

①軒丸瓦（第115図1～7）

軒丸瓦は15点出土している。瓦当文様でみると重弁蓮華文(5点)、細弁蓮華文(4点)、宝相花文（1点）、重圏文（5点）の4種類のものがある。いずれも欠損部分が多く、瓦当面の大きさや文様の細部にわたる特徴が明らかなものは少ない。特徴が分かるものとしては、重弁蓮華文では多賀城分類の軒丸瓦112（1）、細弁蓮華文では軒丸瓦310A（4）、重圏文では軒丸瓦242（3）がある。なお、重弁蓮華文軒丸瓦の中には、瓦当裏面を硯として利用したものもみられる（第118図12）。

②軒平瓦（第115図8～15、補遺）

軒平瓦は15点出土している。瓦当文様でみると単弧文、二重弧文、単波文、均整唐草文の4種類のものがある。多賀城分類によれば、単弧文では軒平瓦640(11・12)が5点、二重弧文では軒平瓦511(8・補遺)が4点、軒平瓦512（9）が1点、単波文では軒平瓦921（13）が1点、均整唐草文では軒平瓦660（10）が1点、軒平瓦721B（14・15）が2点ある。

③刻印文字瓦（第115図16～21）

丸瓦および平瓦に押印されたものが、それぞれ10点出土している。文字には「田」（16）、「丸」（17・18）、「占」（19）、「矢」（20）、「物」（21）、「伊」（図版41－22）などがあり、政庁第Ⅱ期の刻印文字瓦と印の形態や押印場所など同様の特徴を有する。文字と押印される瓦および部位の関係についてみてみると、「田」は丸瓦に、「丸」は平瓦に限ってみられ、押印される部位は丸瓦がすべて凸面であるのに対して、平瓦は凸・凹面の両者があり、「丸」のように同じ文字であっても押印される部位の異なる

ものも認められた。なお、多賀城跡で出土している刻印文字瓦の中には、同一文字で印の異なるものがみられ、今回出土した中では「田」「丸」「物」「矢」に3〜4種類あることが明らかになっている。多賀城分類によれば、本地区出土のものは「田」A、「丸」A、「物」C、「矢」Aにそれぞれ比定される。

④ヘラ書き瓦（第115図22〜24、補遺）

ヘラ書き瓦には文字瓦と記号瓦があり、4 点出土している。これらはすべて平瓦の凹面に細いヘラによって記されている。ヘラ書きされた文字には「九」(22)、「元？」(23)、「七」(24)、「新田」(補遺)がみられる。一方、記号瓦は、小破片ということもあり内容については不明である。

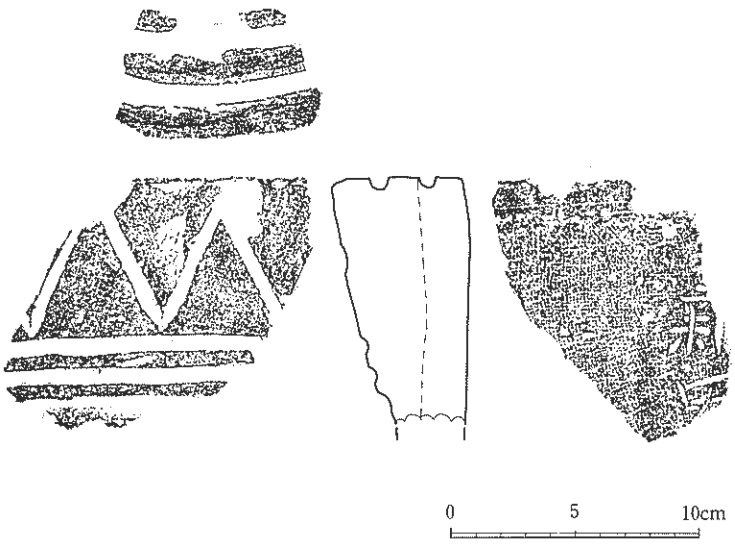
ところで、瓦は道路跡や各区面内の柱穴、土壙、溝跡などから出土し、小破片のものが多い傾向にある。量的には道路跡周辺で多くみられ、全体の約50%を占めている。道路跡での瓦の出土状況については『山王遺跡Ⅱ』第Ⅴ章Ｂ‐1で述べたとおり、路面上の軟弱な部分の整地にバラスの一部として須恵器甕などとともに瓦が用いられており、中でもＳＸ10東西大路からは全体の30%強が出土している。一方、区画ごとの出土状況については、南1西2区、北1西3区からの出土が多く、それぞれ20%、15%を占め、他の区画では 5%未満と少ないといった状況にあるが、調査面積や全体の遺物量を考慮すれば、区画相互で瓦の出土状況に有意な違いは認められない。

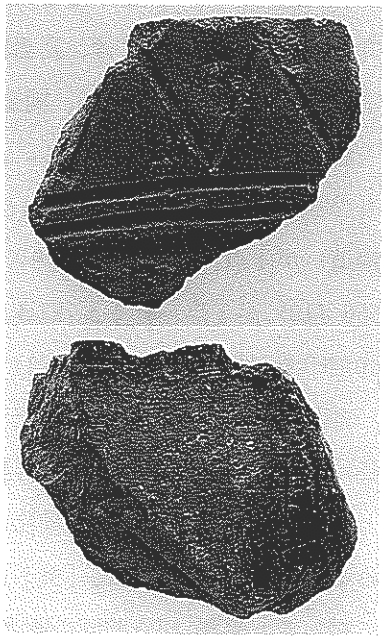
なお、本遺跡で出土した瓦は、言うまでもなく、多賀城内において葺き換えや補修に伴って廃棄された古い瓦が運び込まれたと考えられるものである。しかも、瓦の性格上、多賀城内においても製作年代の古い瓦が長期にわたって使用され続けることも考慮しなければならない。よって、本遺跡においては瓦の製作年代をもって遺構の年代を厳密に特定することはできないが、遺構の上限年代として捉えることは可能かと思われる。

〈参考文献〉

宮城県多賀城跡調査研究所　1980『多賀城跡－政庁跡図録編－』

宮城県多賀城跡調査研究所　1982『多賀城跡－政庁跡本文編－』





補遺 軒平瓦（ヘラ書き「新田」）

区画／遺構名		種類	分　類	時期(政庁)	登録 No	No	図版
西３道路(SX4014)	C 西側溝	軒丸瓦	重弁蓮花文(？)	Ⅰ～Ⅲ期	瓦25	115-２	41-２
東西大路(SX10)	路３層	軒平瓦	二重弧文(511)	Ⅰ期	瓦46	115-８	41-８
	路３層	軒平瓦	単弧文(640)	Ⅱ期	瓦50	115-12	41-12
	遺構	軒平瓦	単弧文(640)	Ⅱ期	瓦39		
西２道路(SX20)	Ⅰ東側溝	軒平瓦	二重弧文(511)、ヘラ書き「新田」(凹面)	Ⅰ期	瓦55	補遺	
	Ⅰ西側溝	軒丸瓦	細弁蓮花文(310？)	Ⅲ or Ⅳ期	瓦32		
	路２層	軒丸瓦	細弁蓮花文(310？)	Ⅲ or Ⅳ期	瓦54		
	路２層	軒平瓦	二重弧文(511)	Ⅰ期	瓦51		
南１道路(SX1300)	D 南側溝	軒平瓦	単弧文(640)	Ⅱ期	瓦53	115-11	41-11
N1W3	SB586	軒丸瓦	重圏文(？)	Ⅱ期	瓦26		
	SK410	軒丸瓦	重弁蓮花文	Ⅰ～Ⅲ期	瓦37	115-６	41-６
	SK530	軒丸瓦	重弁蓮花文 →転用硯	Ⅰ～Ⅲ期	硯20	118-12	43-６
	SK840	軒丸瓦	重弁蓮花文	Ⅰ～Ⅲ期	瓦36		
	SD530	軒平瓦	二重弧文(511)	Ⅰ期	瓦47		
	SD827・SX850	軒丸瓦	重圏文(242)	Ⅱ期	瓦38	115-３	41-３
	SD4046	軒丸瓦	細弁蓮花文(310A)	Ⅲ期	瓦27	115-４	41-４
	表土	軒平瓦	均整唐草文(660)	Ⅰ期	瓦43	115-10	41-10
		軒丸瓦	重圏文？(？)	Ⅱ期	瓦34		
	遺構確認	軒平瓦	単弧文(640)	Ⅱ期	瓦45		
		軒丸瓦	細弁蓮花文(310？)	Ⅲ or Ⅳ期	瓦30	115-７	41-７
		軒丸瓦	宝相花文(422)	Ⅳ期	瓦29	115-５	41-５
S1W2	SE6　１層	軒平瓦	単波文(921)	Ⅳ期	瓦41	115-13	41-13
	SD1020A	軒丸瓦	重圏文？(？)	Ⅱ期	瓦33		
	SD1020B	軒平瓦	均整唐草文(721B)	Ⅳ期	瓦49	115-15	41-15
	SD1020C	軒丸瓦	重圏文？(？)	Ⅱ期	瓦35		
	表土	軒平瓦	二重弧文(512)	Ⅰ期	瓦42	115-９	41-９
	遺構確認	軒平瓦	単弧文(640)	Ⅱ期	瓦40		
	撹乱	軒平瓦			瓦52		
S2W1	SD2000　７層	軒平瓦	均整唐草文(721B)	Ⅳ期	瓦48	115-14	41-14
	遺構確認	軒丸瓦	重弁蓮花文(112)	Ⅰ期	瓦28	115-１	41-１

第26表　軒瓦の遺構別一覧

区画／遺構名		種類	分　類	時期(政庁)	登録 No	No	図版
北１道路(SX4012)	B 北側溝	平瓦	刻印瓦「丸」A(凹面)	Ⅱ期	瓦16	115-18	41-18
	路３層	平瓦	刻印瓦「占」(凸面)	Ⅱ期	瓦13		
(SX4013)	路２層	丸瓦	刻印瓦「田」A(凸面)	Ⅱ期	瓦７	115-16	41-16
西３道路(SX4014)	F 西側溝	平瓦	刻印瓦「丸」A(凹面)	Ⅱ期	瓦15		
東西大路(SX10)	C 側溝	平瓦	刻印瓦「丸」A(凸面)	Ⅱ期	瓦６		41-22
	Ⅰ北側溝	平瓦	刻印瓦「矢」A(凹面)	Ⅱ期	瓦23	115-20	41-20
	路２層	平瓦	ヘラ書き瓦「七」		瓦２	115-24	41-26
西２道路(SX20)	遺構	丸瓦	刻印瓦「伊」(凸面)	Ⅱ期	瓦22		41-23
南１道路(SX1300)	D 南側溝	平瓦	ヘラ書き瓦「元」		瓦１	115-23	41-25
N1W3	SB586	丸瓦	刻印瓦「田」A(凸面)	Ⅱ期	瓦14		
	SB755	丸瓦	刻印瓦「占」(凸面)	Ⅱ期	瓦24		
	SE892	丸瓦	刻印瓦「占」(凸面)	Ⅱ期	瓦11	115-19	41-19
		丸瓦	刻印瓦「田」A(凸面)	Ⅱ期	瓦８		
	SK836	平瓦	刻印瓦「物」C(凹面)	Ⅱ期	瓦18		
	SK867	平瓦？	刻印瓦「矢？」(凹面)	Ⅱ期	瓦20		
	SD563	平瓦	刻印瓦「丸」A(凹面)	Ⅱ期	瓦９	115-17	41-17
	SD614	丸瓦	ヘラ書き瓦「九」		瓦３	115-22	41-24
	P2028	丸瓦	刻印瓦「伊」(凸面)	Ⅱ期	瓦21		
	表土	平瓦	ヘラ書き瓦(記号)		瓦４		
S1W2	SK1218	丸瓦	刻印瓦「占」(凸面)	Ⅱ期	瓦19		
	SK2019	丸瓦	刻印瓦「田」A(凸面)	Ⅱ期	瓦17		
	表土	丸瓦	刻印瓦「田」A(凸面)	Ⅱ期	瓦10		
S2W1	SD1602B	平瓦？	刻印瓦「伊？」(凸面)	Ⅱ期	瓦５		
	SD2000　10層	平瓦	刻印瓦「物」C(凹面)	Ⅱ期	瓦12	115-21	41-21

第27表　文字・記号瓦の遺構別一覧

No	種類	区画	遺構名	特　徴	登録No	図版	No	種類	区画	遺構名	特　徴	登録No	図版
1	軒丸瓦	S2W1	遺構確認	重弁蓮華文(112)、政庁Ⅰ期	瓦28	41-1	13	軒平瓦	S1W2	SE6・1層	単波文(921)、政庁Ⅳ期	瓦41	41-13
2	軒丸瓦	西1道路SX4014C西側溝	重弁蓮華文(?)		瓦25	41-2	14	軒平瓦	S2W1	SD2000・7層	均整唐草文(721B)、政庁Ⅳ期	瓦48	41-14
3	軒丸瓦	N1W3	SD827・SX850	重圏文(242)、政庁Ⅱ期	瓦38	41-3	15	軒平瓦	S1W2	SD1020B	均整唐草文(721B)、政庁Ⅳ期	瓦49	41-15
4	軒丸瓦	N1W3	SD4046	細弁蓮華文(310A)、政庁Ⅲ期	瓦27	41-4	16	丸瓦	北1道路SX4013路2層		凸面に刻印「田」A、政庁Ⅱ期	瓦7	41-16
5	軒丸瓦	N1W3	遺構確認	宝相花文(422)、政庁Ⅳ期	瓦29	41-5	17	平瓦	N1W3	SD563	凹面に刻印「丸」A、政庁Ⅱ期	瓦9	41-17
6	軒丸瓦	N1W3	SK410	重弁蓮華文	瓦37	41-6	18	平瓦	北1道路SX4012B北側溝		凹面に刻印「丸」A、政庁Ⅱ期	瓦16	41-18
7	軒丸瓦	N1W3	遺構確認	細弁蓮華文(310?)	瓦30	41-7	19	丸瓦	N1W3	SE892	凸面に刻印「占」、政庁Ⅱ期	瓦11	41-19
8	軒平瓦	東西大路SX10路3層		二重弧文(511)、政庁Ⅰ期	瓦46	41-8	20	平瓦	東西大路SX10北側溝		凹面に刻印「矢」、政庁Ⅱ期	瓦23	41-20
9	軒平瓦	S1W2	表土	二重弧文(512)、政庁Ⅰ期	瓦42	41-9	21	平瓦	S2W1	SD2000・10層	凹面に刻印「物」、政庁Ⅱ期	瓦12	41-21
10	軒平瓦	N1W3	表土	均整唐草文(660)、政庁Ⅰ期	瓦43	41-10	22	丸瓦	N1W3	SD614	ヘラ書き「丸」	瓦3	41-24
11	軒平瓦	南1道路SX1300D南側溝		単弧文(640)、政庁Ⅱ期	瓦53	41-11	23	平瓦	南1道路SX1300D南側溝		ヘラ書き「元」	瓦1	41-25
12	軒平瓦	東西大路SX10路3層		単弧文(640)、政庁Ⅱ期	瓦50	41-12	24	平瓦	東西大路SX10路2層		ヘラ書き「七」	瓦2	41-26

(※刻印部分の縮尺は1/3)

第115図　瓦

3 硯

硯は78点出土した。陶製の円面硯や風字硯、土器や瓦を転用した転用硯、自然石を利用した石製硯がある。これらは道路跡や掘立柱建物跡の柱穴や土壙、溝跡・河川跡、堆積土などから出土しているが、破片資料が多く、全体的な形態や法量などが明らかなものは少ない。以下、各種類別に説明していくが、分類の基準や部位名称等については『陶硯関係文献目録』(山中：1983)および『多賀城跡―政庁跡本文編』（宮城県多賀城跡調査研究所：1982）に従って述べることとする。

①円面硯（第117図）

円面硯は27点出土した(註1)。いずれも円形の硯面に輪状の台脚を有する「圏足硯」の一部とみられる。うちわけは硯部破片が15点(このうち同一個体が1点)、圏足部が11点(同1点)、硯部～圏足部が1点で、ほとんどのものが小破片のため全体の形態の分かるものはない。そこでここでは各部位ごとに形態を概観していくこととする。

硯部には、A)陸の周縁に堤を設けて陸と海を区画する有堤式のものと、B)堤を設けない無堤式のものがあり、さらに後者には1)溝状の海を有するものと、2)陸から緩やかに下降して海となるものがある。量的にはAが4点、B1が3点、B2が8点であるが、Aの堤は低いものが多く、またB1の海はいずれも痕跡的な溝状をなしていることなど、概して陸と海との境が不明瞭なものが多い傾向にある。また、これらの中には硯部と脚部の境に突帯を張り付け巡らせたものも4点ある。

圏足部には、方形、円形、十字形といった透かしや、ヘラ書きによる平行線文および斜格子文が施されているものが多くみられる。端部の形態の分かるものは少ないが、a)端部が緩やかに開き、外面に隆帯が巡るもの（4点）と、b）「く」字状に外反するもの（6点）があり、後者には外反し下方に挽き出されるものや上方に挽き出されるものがある。

製作時の痕跡としては、ほとんどのものが硯面および脚部ともロクロナデによって仕上げられているが、1は硯部外面が回転ヘラケズリによって調整されている。

硯面に残された使用痕としては、摩耗痕および墨の付着が認められる。小破片が多く、硯面全体の状況は明らかではないが、摩耗痕の顕著なものは5点（10・11・12・13・15）あり、このうちの3点（11・12・16）には墨の付着が認められる。

②風字硯（第116図）

風字硯は15点出土した。これらは硯面を区画する堤の有無によって、区画をもたない「定形硯」と区画をもつ「二面硯」に分類される。うちわけは前者が10点（このうち同一個体が3点）で、後者が7点（同1点）である。二面硯の中には、縦に二分割するもの（5・6・7）のほかに、方形に区画するもの（8）や弧状を呈する硯頭～側辺に沿って堤を巡らし、分割するもの（7）もみられる。

ほとんどのものが硯尻および側辺～硯面の破片資料であり、全形の知れるものはないが、2の「二面円頭風字硯」を除けば、硯尻は直線的で、両側辺が平行するものが多い。また、陸の裏面の硯尻には短脚を貼付し、陸を傾斜させているものが多い。脚の平面形には①長方形のもの（2・5・6）、②円柱状のもの（4・9）、③多角錘状のもの（3）がある。脚の接合に際しては、ほとんどのものが裏に貼り付けるだけのものであるが、3は裏面に円形の孔をあけて、脚を差し込んで接合している。

製作に際しては、内外面ともヘラケズリによって成形および調整を施しているものが大部分であるが、3 は全体をヘラケズリによって成形した後、内面を刷毛目調整し、さらにナデを施し調整している。

硯面に残された使用痕としては、摩耗痕および墨や朱の付着が認められる。硯面全体の状況が分かるものは少ないが、残存するほとんどのものには硯尻から海にかけてのほぼ全面に磨った痕跡が認められる。とくに陸の中央付近から海にかけての部分については側辺の内側まで摩耗がおよんでいるものが多くみられる。3 にいたっては、摩耗が著しく、硯面の調整段階の刷毛目が露呈するほど使用されている。墨は4点（2・3・4・5）に、朱は1点（9）にみられる。ただし、硯両全体に自然釉が厚く掛かり、硯として使用された痕跡の認められないものもある（6）。

③転用硯（第117図1～15）

須恵器の坏類・蓋・瓶類・甕類、灰釉陶器椀皿類、瓦の中には、使用痕と思われる摩耗痕や墨・朱の付着しているものがある。これらのうち摩耗痕と墨や朱が付着しているものは硯に転用されたものであることは明らかであるが、摩耗痕は判然としないが付着物が認められるものや、逆に摩耗痕は認められるが付着物がみられないものもある。これらについては、厳密に転用硯か否かを判別することは難しいが、それぞれの付着物や摩耗痕のあり方が類似していることや、一方でこれらの使用痕跡が使用の頻度や付着物の残存状況によっても異なる可能性が考えられることから、ここではこれらについても転用硯として一括して扱うことにする。

坏類　坏類を転用したものとしては須恵器坏が 2 点、高台付坏が 6 点、灰釉陶器椀皿類が 2 点ある。これらの多くは底部内面を利用したものであるが、高台付坏には高台の内側部分を利用したものが 3 点あり、3 のように坏部を打ち欠いて整形し、使用したものもある。使用痕跡としてはいずれも摩耗痕が顕著で、墨や朱の付着したものが多くみられる。なお、灰釉陶器椀皿類の中には、墨とともに金粉の付着したものがある。小破片のため詳細は不明であり、また化学的な分析を行っていないため具体的な用途は明らかではないが、金泥として用いられた可能性が考えられる。

蓋　須恵器蓋を利用したものは5点ある。つまみを除去した上で、内面中央部を中心に使用したものが多いが、墨痕のみが認められ摩耗していないものも1点みられる。

瓶・甕類　須恵器瓶を転用したものが1点、甕を転用したものが18点ある。頸～肩部の内面を利用した1点を除くと、すべて胴部の破片であり、いずれも内面を利用している。使用痕跡をみると、ａ：摩耗痕と墨の付着が認められるのは10点で、ｂ：墨痕のみが2点、ｃ：摩耗痕のみが7点である。また、ａについては、程度の違いがあるもののほとんどのものが外面も摩滅しているのに対して、ｂおよびｃについては外面が摩滅していないものが多くみられる。なお、瓶・甕類の転用硯は整形せずに利用したものが多いが、胴部破片を敲打調整によって方形に整えたとみられるものもある。

瓦　軒丸瓦を利用したものが1点ある。重弁蓮華文軒丸瓦の1葉分のみ残存し、瓦当裏面には顕著な摩耗痕と墨の付着が認められる。

④石製の硯（第117図6）

偏平な砂岩の一面を利用したもので、特別な整形はみられないが、顕著な摩耗痕と墨の付着が認め

られることから、硯として使用されたものとみられる。また、硯面の周辺にある径3㎝程の自然の窪みにも墨の付着が認められ、一時的な墨溜めとして利用されたことが窺える。

以上、出土した硯の概要を述べてきたが、破片資料が多く、全形の知れるものが少ないことはすでに述べた通りである。ここで、各区画ごとに出土状況をみてみると、東西大路およびこれに面した北1西3区と南1西2区からの出土量が多く、しかも円面硯や風字硯といった定形的な陶硯の占める割合が高い傾向が認められる。とりわけ、南1西2区ではＳＤ1020溝跡周辺の区画中央部付近に集中してみられ、円面硯（8点）と風字硯（6点）、転用硯（7点）がそれぞれ同程度出土している。一方、南2西1区では転用硯の占める割合が高く、風字硯が2点に対して、転用硯が12点で、大路に面した区画とは明らかに異なった出土状況にある。

ところで、転用硯については、今回の出土資料をみる限り、整形を施さないものが多いことや、定形的な硯に比べて使用の頻度も低いものが多い傾向にあることなど、実用本位で簡易的かつ一時的に利用されたものである可能性が高い。実際に、多賀城政庁跡では円面硯が66個体分・風字硯が19個体分に対して、転用硯が200点と約7割を占めており(宮城県多賀城跡調査研究所：1982)、大宰府官衙地区でも硯の約8～9割が転用硯（うち約8割が坏蓋の転用硯）であることが知られている（横田：1983）。また、郡衙や一般集落においても転用硯の占める割合が圧倒的に高いことなどからみて、古代においては転用硯がごく一般的に使用されていたものと考えられている（綾村：1993）。すなわち、定形的な陶硯と転用硯は格式や使用の頻度などによって使い分けられていたものと考えられ、今回の調査における北1西3区および南1西3区と南2西1区での定形的な陶硯と転用硯の比率の違いは、区画の性格や所有者の階層の違いを反映したものと思われる。

（註1）これらの中には硯部と脚部で接合するものも含まれている可能性があり、個体数としてはこれよりも少なくなるものと思われる。

〈引用・参考文献〉

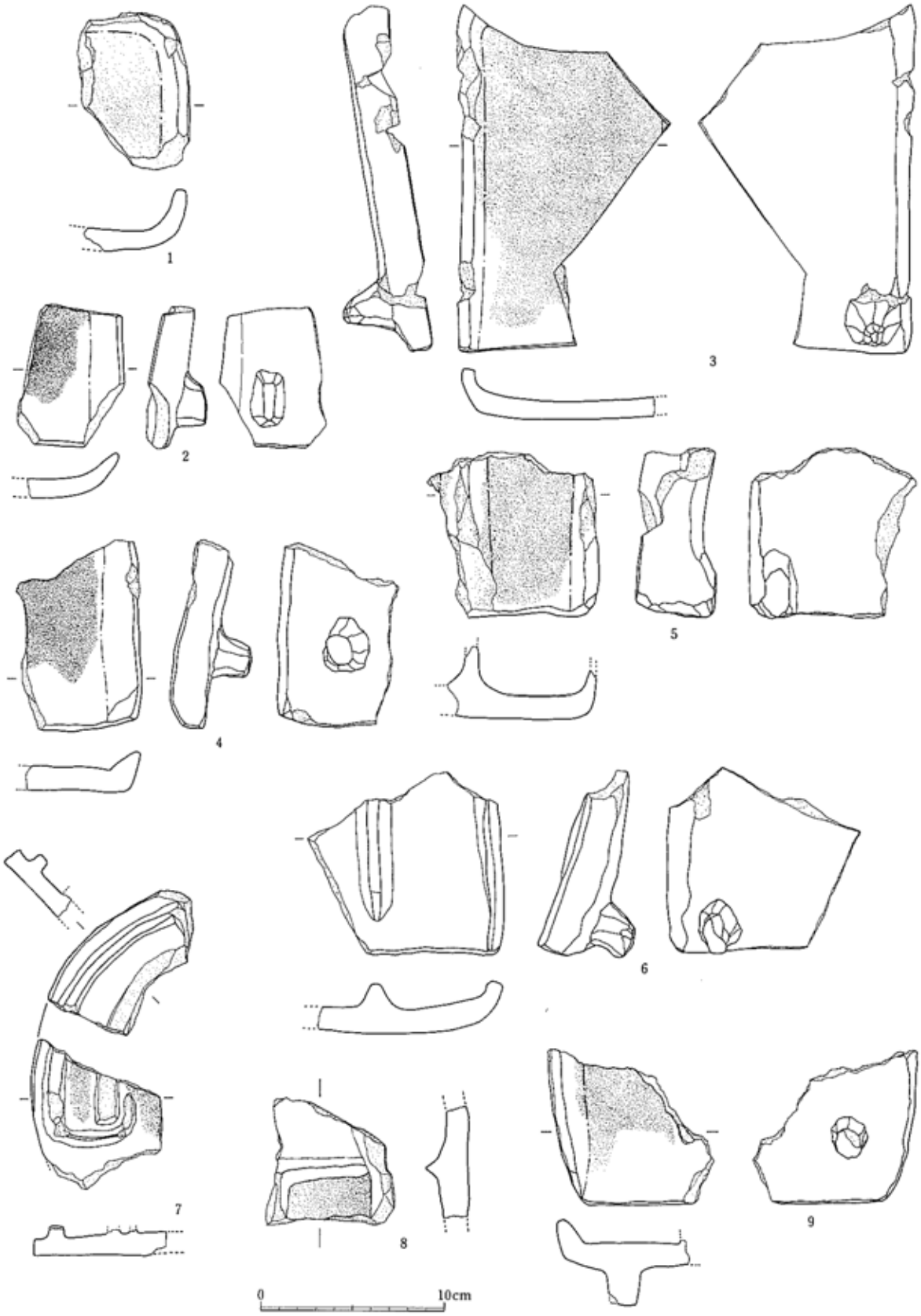
綾村宏　1993「筆、墨と硯」『月刊文化財』362号

宮城県多賀城跡調査研究所　1980『多賀城跡－政庁跡図録編－』

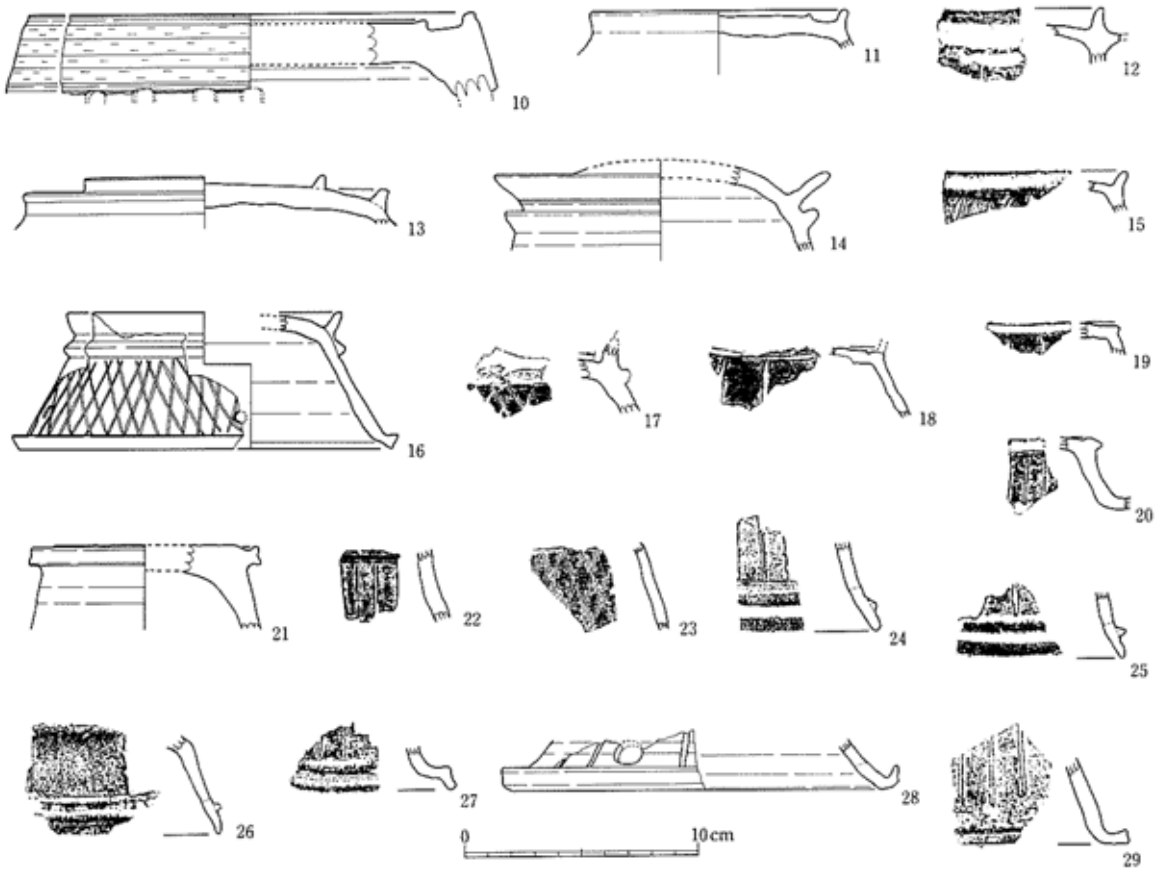
宮城県多賀城跡調査研究所　1982『多賀城跡－政庁跡本文編－』

山中敏史　1983「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

横田賢次郎　1983「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館　研究論集』9

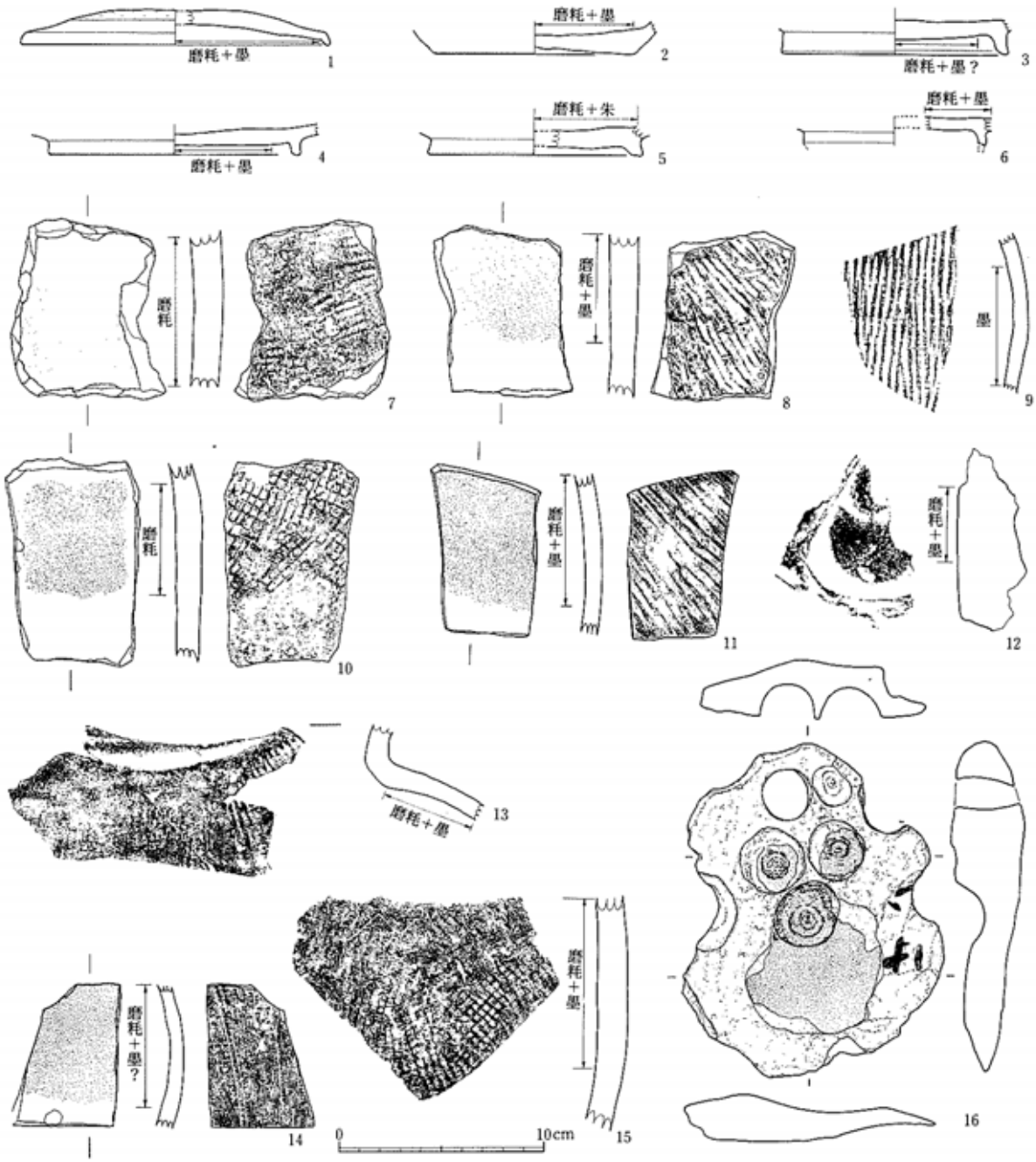


第116図　硯（1）－風字硯



№	種類	部位	区画／遺構名		備考	登録№	図版
1	風字硯	硯面～側辺	S1W2	SD1020C	内外面：ヘラケズリ（雑）、摩耗著しい	硯 3	42-2
2	風字硯	硯沉～側辺	N1W3	SD4004	内外面：ヘラケズリ（丁寧）、墨付着	硯56	42-3
3	風字硯	硯沉～側辺	S1W2	SD1020A・SD2005	内面：刷毛目→ナデ、外面：ヘラケズリ（丁寧）、摩耗著しい・墨付着	硯17・55	42-1
4	風字硯	硯沉～側辺	S2W1	SD1602B	内外面：ヘラケズリ（雑）、摩耗著しい・墨付着	硯 4	42-4
5	二面硯	硯沉～側辺	S2W1	SD2000 7層	内外面：ヘラケズリ、摩耗著しい・墨付着	硯34	42-5
6	二面硯	硯沉～側辺	S1W2	撹乱	内外面：ヘラケズリ、未使用	硯46	42-7
7	二面硯	硯面～側辺	S1W2	SD1111・SK1021	内面：ナデ、外面：ヘラケズリ、摩耗著しい	硯38・77	42-8
8	二面硯	側辺～硯部	西1道路 SX1250 西側溝		内外面：ヘラケズリ、摩耗著しい	硯16	42-9
9	二面硯	硯沉～側辺	南1-2間道路 SX3461D 南側溝		内外面：ヘラケズリ、摩耗著しい・朱付着	硯 7	42-6
10	円面硯	硯部	南1道路 SX1300F 北側溝		硯部径(19.0)cm、内面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ、透かし：方形、摩耗著しい	硯48	42-10
11	円面硯	硯部	西2道路 SX20B 東側溝		硯部径11.0cm、内外面：ロクロナデ、摩耗著しい・墨付着	硯18	42-12
12	円面硯	硯部	N1W3	遺構確認	内外面：ロクロナデ、線刻：平行線、墨付着	硯62	42-17
13	円面硯	硯部	N1W3	SX855	内外面：ロクロナデ、摩耗著しい	硯41	42-13
14	円面硯	硯部	S1W2	遺構確認	硯部径14.2cm、外縁・突帯張り付け→内外面ロクロナデ	硯53	42-14
15	円面硯	硯～脚足	東西大路(SX10)C 北側溝		内外面：ロクロナデ、透かし：方形、線刻：平行線	硯65	42-20
16	円面硯	硯～脚足	S1W2	SB1176	硯部径(11.8)、脚足部径(16.4)、器高(5.8)cm、 内外面：ロクロナデ、透かし：円形(4)、線刻：斜格子	硯10	42-11
17	円面硯	硯部	S1W2	撹乱	線刻：斜格子、墨付着	硯31	42-19
18	円面硯	硯部	N1W3	SK541	内外面：ロクロナデ、硯面：ケズリ、線刻：平行線	硯32	42-18
19			N1W3	SD629		硯66	42-21
20	円面硯	硯部	南2道路 SX1900 第1層		内外面：ロクロナデ、線刻：平行線	硯49	42-16
21	円面硯	硯～脚足	N1W3	SD653	硯部径(9.6)m、内外面：ロクロナデ	硯28	42-15
22	円面硯	脚足部	N1W3	SK531	内外面：ロクロナデ、透かし：方形、線刻：平行線	硯68	42-23
23	円面硯	脚足部	S1W2	SD1020B	内外面：ロクロナデ、線刻：斜格子	硯30	42-22
24	円面硯	脚足部	N1W3	SK829	内外面：ロクロナデ、透かし：長方形、線刻：平行線	硯75	42-24
25	円面硯	脚足部	N1W3	SK532	内外面：ロクロナデ、透かし：方形、線刻：平行線	硯64	42-25
26	円面硯	脚足部	N1W3	SK560	内外面：ロクロナデ、透かし：方形、線刻：平行線	硯27	42-26
27	円面硯	脚足部	N1W3	SB585	内外面：ロクロナデ、透かし：十字形、線刻：平行線	硯69	42-27
28	円面硯	脚足部	N1W3	SD131・SK78	脚足部径(16.6)cm、内外面：ロクロナデ、透かし：円形、線刻：平行線、大戸窯？	硯54・67	42-28
29	円面硯	脚足部	S1W2	遺構確認	内外面：ロクロナデ、線刻：平行線	硯23	42-29

第117図　硯（2）ー円面硯



No	種類	部位	区画／遺構名		備考	登録No	写真番号
1	転用硯	須恵器蓋内面	S2W1	SD2000 12層	口径(15.0)cm、内面：摩耗著しい・墨付着	硯52	42-31
2	転用硯	須恵器坏底内面	S2W1	SD2000 11層	底径(9.8)cm、底部：ヘラ切り無調整、墨付着	硯54	42-30
3	転用硯	須恵器高台坏底外面	西2道路 SX201 西側溝		高台径(11.0)cm、形態整形、内面：摩耗著しい	硯37	42-35
4	転用硯	須恵器高台坏底外面	N1W3	SK952	高台径(12.2)cm、底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ調整、内面：摩耗著しい・墨付着	硯59	42-32
5	転用硯	須恵器高台坏底内面	東西大路 SX10 路2・3層		底径10.5cm、底部：ヘラ切り無調整、朱付着	硯72・73	42-34
6	転用硯	灰釉陶器類底内面	S1W2	基本層位II層	高台径(8.8)cm、三日月高台(馬蹄90号窯式)、内面：摩耗著しい・墨付着	硯 2	42-36
7	転用硯	須恵器甕内面	東西大路 SX10 路2層		形態整形、内外面：摩耗顕著	硯24	43-1
8	転用硯	須恵器甕内面	S2W1	SD2000 7層	形態整形？ 内面：墨付着、外面：摩耗	硯50	43-2
9	転用硯	須恵器甕内面	S2W1	SD1602B	内面：墨付着	硯60	43-3
10	転用硯	須恵器甕内面	S1W2	SD1240	形態整形？ 内外面：摩耗著しい	硯43	43-4
11	転用硯	須恵器甕内面	南1-2間道路 SX3461D 南側溝		形態整形？ 内面：墨付着	硯14	43-5
12	転用硯	軒丸瓦瓦頭裏面	N1W3	SX530	重弁蓮華文軒丸瓦の転用、瓦頭裏面：摩耗著しい・墨付着	硯20	43-6
13	転用硯	須恵器甕内面	S2W1	SD1602B	内面：墨付着	硯78	43-7
14	転用硯	須恵器甕内面	S2W1	SD2000 2層	形態整形？ 内面：摩耗著しい・墨付着、大戸窯？	硯84	43-8
15	転用硯	須恵器甕内面	N1W3	基本層位II層	内面：摩耗著しい・墨付着、外面：摩耗	硯47	43-9
16	石製硯	砂岩	N1W3	SD581	摩耗著しい・墨付着	硯85	43-13

第118図　硯（3）－転用硯・石製硯

区画／遺構名		種類	部位	円面硯の特徴					風字硯の特徴					転用硯の特徴		使用痕		登録No	図No	図版
				硯部	突帯	脚足	透かし	線刻	硯縁	側辺	硯尻	区画	脚部	素材	形態	摩耗	付着物			
東西大路(SX10)	B 南側溝	転用硯												甕内面		◎	墨	硯36		
	C 北側溝	円面硯	硯～脚足	B2?	×	b	方形	平行線								×	×	硯65	117-15	42-20
	路2層	転用硯												甕内面	整形	◎	×	硯24	118-7	43-1
	路2・3層	転用硯												高台坏底内面		○	朱	硯72・73	118-5	42-34
西2道路(SX20)	B 東側溝	円面硯	硯部	A												◎	墨	硯18	117-11	42-12
	I 西側溝	転用硯												高台坏底外面	整形	◎	墨？	硯37	118-3	42-35
	I 東側溝	転用硯												甕内面		○	×	硯15	118-15	43-11
	東側溝	転用硯												灰釉底内面		○	墨+金粉	硯1		42-37
南1道路(SX1300)	F 北側溝	円面硯	硯～脚足	A	×	－	方形									◎	×	硯48	117-10	42-10
西1道路(SX1250)	西側溝	風字硯	側辺部							－						－	－	硯33		
	西側溝	二面硯	側辺～硯部							－		方形				◎	墨？	硯16	116-8	42-9
南1・2間道路 (SX3461)	A 北側溝	転用硯												蓋内面		○	墨	硯60		
	D 南側溝	二面硯	硯尻～側辺							平行	直線	縦二分割？	②			◎	朱	硯7	116-9	42-6
	D 南側溝	転用硯												甕内面		○	墨	硯11		43-12
	D 南側溝	転用硯												甕内面	整形？	○	墨	硯14	118-11	43-5
南2道路(SX1900)	路1層	円面硯	硯～脚足	A?	×	－		平行線								×	×	硯49	117-20	42-16
N1W3	SB585	円面硯	脚足部	－	－	b①	十字形	平行線								－	－	硯69	117-27	42-27
	SI634	円面硯	硯縁部	－	×		方形									－	－	硯25		
	SX855	円面硯	硯部	A	－											◎	×	硯41	117-13	42-13
	SK530	転用硯												軒丸瓦瓦裏面		◎	墨	硯20	118-12	43-6
	SK531	円面硯	脚足部			－	方形	平行線								－	－	硯68	117-22	42-23
	SK532	円面硯	脚足部			a	方形	平行線								－	－	硯64	117-25	42-25
	SK541	円面硯	硯部	B1	×			平行線								×	×	硯32	117-18	42-18
	SD629																	硯66	117-19	42-21
	SK560	円面硯	脚足部			a	方形	平行線								－	－	硯27	117-26	42-26
	SK820	円面硯	硯部	B2												○	×	硯76		
		円面硯	脚足部			a	長方形	平行線								－	－	硯75	117-24	42-24
	SK841	円面硯	硯部	B2												○	×	硯71		
	SK952	転用硯												高台坏底外面		◎	墨	硯59	118-4	42-32
	SD653	円面硯	硯～脚足	B1	－	－										○	×	硯28	117-21	42-5
	SD581	石製硯												砂岩		◎	墨	硯85	118-16	43-13
	SD610	転用硯												甕内面		×	墨	硯58		
	SD6004	風字硯	硯尻～側辺							開く	直線		①			○	墨	硯56	116-2	42-3
	遺構確認	円面硯	硯部	B2	○			平行線								○	墨	硯62	117-12	42-17
	基本層位II層	転用硯												甕内面		◎	墨	硯47	118-15	43-9
		転用硯												甕内面		○	×	硯57		
S1W2	SB1176	円面硯	硯～脚足部	B2	○	a?	円形	斜格子								○	墨？	硯10	117-16	42-11
	SK78・SD131	円面硯	脚足部			b	円形	平行線								－	－	硯54・67	117-28	42-28
	SK410	転用硯												高台坏底外面		○	墨	硯61		
	SK2220	転用硯												坏底内面		○	墨？	硯83		
	SA2237	転用硯												甕内面		○	墨	硯26		
	SD1020	円面硯	硯部	B2	○		円形									○	墨？	硯39		
	SD1020A・SD2005	風字硯	硯尻～側辺							平行	直線		③			◎	墨	硯17・55	116-3	42-1
	SD1020A	風字硯	側辺部							－						－	墨	硯19		
		転用硯												高台坏底内面		○	×	硯21		42-33
	SD1020B	円面硯	脚足部					斜格子								－	－	硯30	117-23	42-22
	SD1020B	風字硯	硯部													○	墨？	硯6		
	SD1020C	風字硯	硯縁～側辺						直線	平行						◎	×	硯3	116-1	42-2
	SK1021・SD1111	二面硯	硯縁～側辺						弧状	弧状		辺に沿った縦三分割？	－			○	×	硯38	116-7	42-8
			側辺～硯部													◎	×	硯77		
	SD1111	円面硯	脚足部					斜格子								－	－	硯29		
	SD1240	転用硯												甕内面	整形？	◎	×	硯43	118-10	43-4
	SD1260	転用硯												甕内面		◎	×	硯12		
	遺構確認	円面硯	脚足部			b②		平行線								－	－	硯23	117-29	42-29
		円面硯	硯部	B2	○											○	×	硯63	117-14	42-14
	基本層位II層	転用硯												灰釉底内面		◎	墨	硯2	118-6	42-35
	攪乱	円面硯	硯部	B2	○			斜格子								○	墨	硯31	117-17	42-19
		二面硯	硯尻～側辺							平行	直線	縦二分割	①			未使用		硯46	116-6	42-7
S2W1	SD1602B	風字硯	硯尻～側辺							平行	直線		②			◎	墨	硯4	116-4	42-4
		転用硯												甕内面		○	墨？	硯9		
		転用硯												甕内面		○	×	硯79		
		転用硯	縁～胴部											甕内面		○	墨	硯78	118-13	43-7
		転用硯												甕内面		◎	墨	硯5		43-10
		転用硯												甕内面		◎	墨	硯8		
		転用硯												甕内面		×	墨	硯80	118-9	43-3
	SD2000 2層	転用硯												瓶内面	整形？	◎	墨？	硯84	118-14	43-8
	7層	二面硯	硯尻～側辺							平行	直線	縦二分割	①			◎	墨	硯34	116-5	42-5
		転用硯												甕内面	整形？	○	墨	硯50	118-8	43-2
	8層	転用硯												蓋内面		○	墨	硯13		
	10層	転用硯												蓋内面		○	墨	硯22		
	11層	円面硯	脚足部			b①	方形？									－	－	硯70		
		転用硯												坏底内面		○	墨	硯51	118-2	42-30
	12層	転用硯												蓋内面		◎	墨	硯52	118-1	42-31
	溝掘	転用硯												蓋内面		×	墨	硯53		

＊1　円面硯の硯部　A：有蓋式、B1：無蓋式有溝、B2：無蓋式無溝
突帯　○：有、×：無、－：不明
脚足　a：端部が開き、踏帯が巡るもの、b：「く」字状に外反し、下方に挽き出されるもの
b：上方に挽き出されるもの
＊2　風字硯の脚部　①：長方形のもの、②：円柱状のもの、③：多角錐状のもの、－：不明
＊3　使用痕の摩耗　◎：摩耗著しい、○：摩耗あり、×：摩耗なし

第28表　硯の遺構別・種類別一覧

4　木製品

奈良・平安時代の木製品には、容器、祭祀具、食膳具、発火具、服飾具、農具、工具、武具、器財、建築材、井戸枠材など多種多様なものがある。これらは同時代の道路跡の側溝や各地割内の井戸跡や建物跡の柱穴、河川跡などから出土したものである。以下、種別ごとにその概要をみていく。なお、文章中の(　)付きの数字は登録番号である。

Ａ　木製品の概要

(1) 容器

容器類は井戸跡や土壙から出土し、通路側溝や河川跡からもその破片が出土している。

容器としたものにはロクロで挽き出した挽物、板を組み合わせた組物、底板に側板を結合した曲げ物、容器の蓋として用いられたとみられる蓋板などがある。挽物にはさらに白木のものと漆器とがある。組物は板材を組んで箱を作り、仕上げに漆が塗られた漆器である。この他、内部をえぐり取って容器としたくり物や、容器の注ぎ口部を塞ぐ栓なども容器の付属品としてここに含める。

以下、各種の容器については基本的に法量の小さいものから順に記述を進めることにするが、曲げ物は側板の残るものを優先した。

①挽物白木

皿、椀、鉢、蓋などの器種がある。図示したのは皿 30、椀 9、鉢 1、蓋 1 の計 41 点である。なお、器種や器形を特定できない破片資料は図示しなかった。破片を含め樹種同定した 23 点の資料中、21 点はケヤキである。他にカツラ、サワラが各 1 点ある。

・白木　皿：第 122 図

平らな底部から短い口縁部が緩やかに立ち上がる器形である。器壁は 2 ㎜前後と薄く、底部と体部の境は不明瞭でロクロ目は顕著でない。口径 15～20㎝、器高 1～2㎝ で器形・法量ともに斉一性が高い。

底面中央にロクロに固定した際の爪の跡が残るものが 3 点ある。爪痕は長さ約 1㎝ の溝状で、いずれも中央に一つとその周囲四ケ所に十字に放射状に配置されたものである。

木取りはいずれも柾目取りで、ロクロ爪跡は木目に対して約 45 度で打ち込まれている。

2～4 は底部外面、5 は底部内面に刃物傷がみられる。

・白木　高台付皿：第 123～126 図

口縁部が水平に開く偏平な器形と緩やかに立ち上がる器形とがある。外面の底部と体部の境は強く屈曲する。底部はいずれも厚みのある高台で、中央がわずかにくぼむものと偏平ないわゆるベタ高台とがある。上面のロクロ目は顕著でないが、底部高台内のロクロ目はやや粗い仕上げのものが多く、手斧の痕跡が残るもの第 123 図 6（14）もある。

口縁部が水平に開く偏平な器形のものは口径 15～20㎝、器高 2㎝ 前後で器形・法量ともに斉一性が高い。口縁部が緩やかに立ち上がるものは口径 15～40㎝ と、器高 2～4㎝ 前後で大小の差がある。

底面中央にロクロに固定した際の爪の跡が残るものは 3 点ある。爪痕は長さ約 1㎝ の溝状で、中央

に一つとその周囲四ケ所に十字に放射状に配置されたもの第 125 図 6(26)と向かい合うものが平行になるもの第 124 図 2(17)・第 125 図 5(25)とがある。

第 124 図 4（19）の底部外面に「田」、第 126 図 3(29)の底部外面に「上」の刻書がある。第 124 図 1・3・5（16・18・20）、第 126 図 3(29)の底部外面には刃物傷がみられる。(29)は周縁部が削り取られ、底部中央に穴が開けられていることから何らかの用途で転用されたものとみられる。

木取りは(14)が板目取り、(23)が斜めであるが、その他はいずれも柾目取りである。ロクロ爪跡は木目に対して約 45 度で打ち込まれている。(14)は板目取りで底部高台内に手斧の痕跡が残るなど特殊な製作方法がみられるものである。

・白木　椀：第 127 図・128 図 1～4（31～39）

口縁部が緩やかに立ち上がる器形で、外面底部と体部の境は強く屈曲する。底部はいずれも高台が付く。高台部は削り出しのもの第 127 図 1（31）1 点を除き、いずれも偏平ないわゆるベタ高台である。上面のロクロ目は皿、高台付皿類に比べ顕著である。

全体形のわかるものは少ないが口径は 18㎝ 前後、器高 6㎝ 前後と推定されるものが多い。(31)は底部外面にロクロに固定した際の爪の跡が重複して残ることから 3 回以上打ち直したものと推定される。爪痕は長さ約 1㎝ の溝状で、中央に一つとその周囲四ケ所に十字に放射状に配置されたものである。第 127 図 2（32）は底部中央と外周よりの 2 ケ所に穴が開けられている。

木取りはいずれも柾目取りで、ロクロ爪跡は木目に対して約 45 度で打ち込まれている。

・白木　鉢：第 128 図 5（40）

大きな底部から体部が直立する器形である。外面のロクロ目は顕著でないが底面には螺旋状のロクロ目が残る。

体部上半が失われており全体形は不明であるが、径が 18㎝ の円筒形になると推定される。(40)は底面中央にロクロに固定した際の爪の跡が残る。爪痕は長さ約 1㎝ の溝状で、中央に一つとその周囲四ケ所に配置されている。

木取りはいずれも柾目取りで、ロクロ爪跡は木目に対して約 45 度で打ち込まれている。

・白木　蓋：第 128 図 6（41）

半分が欠損しておりつまみの有無は不明である。丸みのある底部が容器内に収まる落し蓋と推定される。外面のロクロ目は顕著で螺旋状のロクロ目が残る。

径 15㎝、厚さ 2㎝。木取りは柾目取りである。

②漆器

挽物の皿、椀、鉢と組物の箱がある。図示したのは挽物の皿 4、椀 1、鉢 2 の計 7 点である。器種や器形を特定できない破片資料は図示しなかった。破片を含め、樹種同定した 22 点の資料は、ケヤキ 5 点、ニレ属 2 点、サワラ 1 点で他の 14 点は木質の遺存が悪く不明である。この他、近世の漆器椀が 3 点出土しているがこれらはいずれもブナ属である。

漆塗　皿：第 129 図 1～4（42～45）

平らな底部から短い口縁部が緩やかに立ち上がる器形である。器壁は 2 ㎜前後と薄い。口径 9

～22㎝、器高1～3㎝で、器形・法量とも多様である。木取りはいずれも柾目取りである。

・漆塗　椀：第129図5（46）

体部は丸みをもって緩やかに立ち上がる器形である。底部は薄く、底部と体部の境には削り出しによって段が形成されている。口径は15㎝前後と推定される。木取りは不明。

漆塗　鉢：第128図7・第129図7（49・48）

いずれも破片資料で全体形は不明である。(48)は口径28㎝前後で、口縁部に段が付くもので蓋を受けるものかもしれない。木取りは柾目取りである。(49)は口径55㎝以上の大型品で器壁は体部下半が薄く上半が厚いもので口縁部は外反している。木取りは不明である。

③組物　第129図6（47）

八角形の底板と八枚の側板を組合せた黒漆塗りの八角形の箱物である。一辺730㎜の八角形で、高さは3.3㎝である。側板は長さ730㎜、幅330㎜、厚さ約5㎜の薄い柾目板で、底板は一辺730㎜の八角形で同じく厚さ約4㎜の薄い柾目板である。板と板の繋目を合い欠きにし、漆により接合している。

仕上げに塗られた漆の厚さは2㎜前後と厚い。底面には刃物傷がみられる。樹種は木質の遺存が悪く不明である。

④曲げ物

円形の曲げ物と長方形、楕円形の曲げ物がある。側板の破片は多数出土しているが、ここでは曲げ物の径や大きさを推定できる資料だけを図示した。

板と側板を結合する方法として樺の木の皮帯で綴じ合わせたものと、径2㎜前後の先端を尖らせた木もしくは竹製の釘を打ち込んで結合したものとがある。釘結合は板と側板の結合強度が高く主に器の身として使用されたと考えられ、樺皮結合は板の結合強度が低く主に蓋として使用されたと推定されるものである。以下ではこれらについて前者を樺皮結合曲げ物、後者を釘結合曲げ物と呼び分けることにする。両種の方法を組み合わせて結合した例は大型の長方形曲げ物に唯一例あるが、他に両種の結合方法を混用したものはみられない。

いずれの結合方法をとる曲げ物にも器高の高いもの低いものがみられ、結合方法や器形から身なのか蓋なのか判別しがたいものも少なくない。しかし以下では便宜的に釘結合曲げ物については器の身とみなし、樺皮結合曲げ物については蓋として記述することにする。なお、井戸枠下部の側板として底板を取り去った状態で使用された大型の曲げ物も曲げ物として扱うことにする。

曲げ物で、樹種同定した資料は、底もしくは天板が111点で、うちわけはヒノキもしくはヒノキ属が多く35点、ついでスギ30点、モミ属25点、サワラ14点、アスナロ2点で、他にカヤ、イヌガヤ、アカマツ、マツ属、コウヤマキが各1点である。曲け物側板は10点で、ヒノキ5点、モミ属2点で、サワラ、スギ、アカマツが各1点である。

・釘結合円形曲げ物：第130～134図・第142図1（50～90・136）

底板となる円板に側板を木もしくは竹製の釘で結合した曲げ物である。釘は第131図1(54)が断面方形であるが他はいずれも円形である。側板が残り全体形のわかるものは6点第130・131図(50～55)あ

る。この他、底板のみの破片で周縁部が残り、底径の推定できる35点(56〜90)についても図示した。

側板が残っているものについてみると、側板の高さが1〜3㎝の低いもの（50〜52）と、10㎝以上の高いもの(53〜55)とがある。このうち側板の低い(51・52)の底板の外面には刃物傷がみられる。側板の高いものはいずれも側板内面に斜め方向の「けびき」がみられる。また、(54・55)の側板の基底部外部には幅3㎝前後の補強帯が巡らされている。

底板のみの破片についてみると、底径は12〜36㎝と大小の差がある。底板は厚さ5〜10㎜で、周縁はわずかに斜めにそぎ落とされ、下端を薄くそいだ側板と密着するようになっている。底板の木取りは柾目と板目の両方があり、側板は(54)が板目であるが、その他はいずれも柾目である。(60・64・72・84・87)の底板の底面には刃物傷がみられる。また、(70・81・82)の底板内面には製作時の加工痕が残る。

さらに(53・57・58・67・71・82・86)の内面には漆もしくはなんらかの樹脂と推定される黒褐色の物が塗付されている。

・棒皮結合円形曲げ物：第135〜141図（91〜117）

縁に段を削り出した円板に側板を樺の木の皮紐で綴じ合わせて結合した曲げ物である。棒皮を綴じるために開けられた穴の形態はくさび状の細長いものが主であるが、錐状工具によって開けられた円形の穴もある(91・101・106・107・116)。円形の穴の中には針状の木が打ち込まれている。側板が残っているものは5点(91〜95)ある。この他、底板のみの破片でも底径の推定できるもの23点(96〜117)についても図示した。

側板が残っているものについてみると、いずれも底板の周縁に明瞭な段を削り出し、段の外側に側板を密着するようにしている。側板の高さは8㎝の高いもの（91）が1点あるが、他はいずれも2〜4㎝の低いもの(92〜95)で、側板の低い(92・95)の底板の外面には刃物傷がみられる。側板の高い(91)の側板内面には斜め方向の「けびき」がみられる。(92・95)の内面には製作時の加工痕が残る。

底板のみの破片についてみると、底径は13〜45㎝のものがあり大小の差がある。底板は厚さ3〜8㎜で、底板の周縁にはいずれも明瞭な段を削り出している。

底板の木取りは柾目と板目の両方がある。側板はいずれも板目である。(107・111・114・116)の底板の底面には刃物傷がみられる。

・樺皮結合長方形曲げ物：第143図（128〜130）

縁に段を削り出した隅丸長方形の板に側板を樺の木の皮紐で綴じ合わせて結合した曲げ物で、「折敷(おしき)」とも呼ばれるものである。樺皮を綴じるために開けられた穴の形態はくさび状の細長いものである。側板が残っているものが1点(129)、底板だけのものが2点(128・130)ある。

（129）は底板の長さ27㎝×幅20㎝、側板の高さ4㎝である。底板は厚さ6㎜で、周縁に高さ3㎜の段を削り出し、段の外側に側板を密着し樺皮で綴じ合わせて結合したものである。底板および側板の木取りは板目取りである。底板の内面には製作時の加工の痕跡が残り、外面には刃物像がみられる。側板内面の四隅には垂直方向の「けびき」がみられる。

（130）は底板の長さ45㎝×幅40㎝、厚さ130㎜で、周縁に高さ5㎜の段を削り出したもので、

一方の短辺の中央に幅 2㎝、奥行 2㎝ の切り欠きがある。底板の木取りは板目取りで外面に刃物傷がみられる。この板はほぼ中央で 2 枚に折られ、井戸枠の裏込めとして転用されていたものである。

・樺皮結合惰形曲げ物：第 144・145 図（131～134）

縁に没を削り出した楕円形の板に側板を樺の木の皮紐で綴じ合わせて結合した曲げ物である。ただし、側板の残存しているものはなく、いずれも底板の破片である。樺皮を綴じるために開けられた穴の形態は錘状工具によって開けられた円形の穴が主であるが、くさび状の細長いものもある。円形の穴の中には釘状の木が打ち込まれていたとみられるが大半は脱落して失われている。

(131)は推定される底板の長さ 75㎝ 前後、幅 55㎝ 前後、厚さ 150 ㎜で、周縁に高さ 5 ㎜の段を削り出したものである。この底板には棒皮を綴じるための穴が新旧 2 ケ所づつあり、また、板の約三分の一の位置で折れた部分に補修のための綴じ穴がある。当初の綴じ穴は円形であるが、補修後の綴じ穴は細長いものである。底板の木取りは板目取りである。

(132)は綴じ穴の位置関係から推定すると長さ 110㎝ 前後、幅 60㎝ 前後の大型の曲げ物である。底板の厚さは 100 ㎜で、周縁の段は摩耗して不明瞭である。底板の木取りは板目取りである。両端が火を受け炭化している。

(133)は全体形が復元できないが長さ 1m以上、幅 60㎝ 以上の大型の曲げ物である。底板の厚さは 150 ㎜前後で、周縁に高さ 5 ㎜の段を削り出したものである。底板の木取りは板目取りである。

(134)は綴じ穴の位置関係から推定すると長さ 110㎝ 前後、幅 70㎝ 前後の大型の曲げ物である。底板の厚さは 100 ㎜で、周縁に高さ 5 ㎜の段を削り出したものである。長辺の中央に幅 3㎝、奥行 1㎝ の切り欠きがある。底板の木取りは板目取りである。底板外面には製作時の加工の痕跡が残る。

・井戸枠材：第 142・146 図（135・136・137）

第 142 図 1(136)は直径約 50㎝、高さ 22㎝ の円形の曲げ物である。底板が結合されていた痕跡はみられない。基上下両端には幅 3㎝ 前後の補強帯が巡らされている。上下の補強帯の側面にはさらに縦方向の枠板が綴じ付けられていた綴じ穴がある。側板、補強帯の木取りはいずれも柾目取りである。

第 142 図 2(137)は直径約 50㎝、高さ 25㎝ の円形の曲げ物である。底板が結合されていた痕跡はみられない。井戸枠下部の側板として使用されたものである。側板の木取りは柾目取りである。

第 146 図(135)は縦 72㎝、横 42㎝、高さ 34㎝ の釘と樺皮を併用して底板を結合した長方形曲げ物で、底板を取り去り、井戸枠下部の側板として転用されたものである。側板の四隅には斜め方向の「けびき」がみられる。下部に底板を結合していた釘が残存し、さらにその一部と重複して樺皮も残存している。側板の木取りは柾目取りである。

⑤蓋板　第 147 図（119～127）

円形の薄い板で、曲げ物の側板を結合した形跡がみられないものや中央付近に穴のあるものを容器の蓋板として一括した。

10 点ある。径 11㎝～20㎝、厚さ 5 ㎜前後の円形の薄い板である。周辺は釘結合曲げ物の底板のように斜めに面取りされたものが多いが、斜めに薄くそがれたもの(122・134)や、樺皮結合曲げ物のように段を削り出したもの(121)などもある。円板の中央付近に穴のあるものも 6 点ある。木取りは柾

目が多いが、斜目と板目も１点づつある。

このうち樹種同定した資料は、8 点で、モミ属、サワラが各 3 点、ケヤキ、スギが各 1 点である。曲げ物に多いヒノキがない点が注目される。

⑥くり物　第 148 図 1（170）

内部をくりぬいて作られた容器の一部とみられる破片である。底部から体部にかけての破片で、全体形は不明であるが、平坦な底面から体部が直立する。内外面とも手斧で削り取っただけのきわめて粗い加工の痕跡をそのまま残している。樹種はヒノキで木取りは斜目である。

⑦栓　第 148 図 2～5（171～174）

一端がすぼむ紡錘形もしくは棒状の製品で、容器の栓と考えられるものである。頭部が円錐形のもの(171・172)、平坦なもの(173)、緒通しの穴があるもの(174)などがある。樹種は 171～173 がコナラ属コナラ節、(174)がヒノキである。木取りは(172・173)が芯持ち丸木、(174・175)が柾目である。

（2）食膳具・発火具

食膳具としたものには箸がある。発火具としたものには火きり杵、火きり臼がある。また、反りのある棒状の木製品については、箸もしくは火きり弓いずれかの可能性が考えられるのでここに含めた。この他、長さ 10㎝ 前後、太さ 2㎝ 前後に粗割りされた不定形の材で、端部が焦げ炭化した木片が多量に出土している。ここではこれらについて、一時的な明り取りや火種の移動に使用された消耗品と考え「付木（つけぎ）」という呼称を用いることにする。

①箸　第 148 図 6～9（175～178）

横断面が四角形の角箸(175・176)と円形の丸箸(177・178)とがある。角箸は全体形のわかるものがないが、(176)の頭部は丸く加工されている。丸箸は長さ 29㎝ と 26.5㎝ のものがあり、いずれも両端が尖っている。また尖った両端には黒褐色の付着物がある。樹種はムラサキシキブ、スギ、サワラなどである。木取りはいずれも板目取りである。

②反りのある棒状木製品　第 148 図 10（179）

長さ約 55㎝、直径約 1㎝ で僅かに反りのある棒状の木製品である。両端を削り込み尖らせている。箸もしくは火きり弓いずれかの可能性が考えられる。樹種はスギで、木取りは板目取りである。

③火きり杵　第 148 図 11～13（180～182）

直径 1㎝ 前後の棒状の木製品で、いずれも折損していて全長は不明である。端部は(180)が年輪に垂直に切断した面がそのまま残されているが、(181)は周縁部が摩耗して丸みを帯びている。樹種はスギ、ヒノキで、木取りはいずれも柾目取りである。

④火きり臼　第 148 図 14（183）

厚さが 1.7㎝、幅が 1.8㎝ に加工された板で、末端は年輪方向に対して垂直に切り落とされている。残存長は 3.6㎝ で、上面の 2 ケ所に漏斗状の火きり穴があいている。火きり穴の間隔は心々で 2.5㎝ で、対向する側辺に寄った位置にある。火きり穴内部はいずれも使用により焦げつき黒く炭化している。樹種はサワラである。

⑤付木　第149図（184～199）

長さ10㎝前後、太さ2㎝前後の不定形の材で、一端もしくは両端が焦げ炭化した木片である（184～199）。一時的な明り取りや火種の移動に使用された消耗品で、民俗例における「付け木」もしくは「手火（てび）」にあたるものと考えられる。ここでは「付け木」という呼称をとる。多量に出土しており、図示しなかったものも多い。遺構によって同じ様な木で同じ様な大きさの材が出土しているものも多い。樹種同定をした28点はアカマツ14点、クロマツ10点、マツ属5点で、いずれもマツ属の材を縦方向に粗割りしているのが特徴である。

（3）祭祀具

祭祀具としたものには側辺に刻みや切れ目を入れた板状の斎串（いぐし）と、人、動物、器財などを象った形代（かたしろ）とがある。

①斎串　第150図（138～160）

長さ12㎝～25㎝、幅1㎝～4㎝、厚さ2～4㎜の薄い板材の下半部を剣先状にとがらせ、上端部を尖頭形もしくは台形に加工したものである。側辺に斜めに切れ目を入れたもの（138～149）と刻み目を入れたもの（150～155）とがある。切れ目を入れたものには、上方からだけ切れ目を入れたもの（138～146）と、下方からも切れ目を入れたもの（147～149）とがある。刻み目を入れたものでは刻み目が1つだけのもの（150・151）と、複数のもの（152～155）とがある。刻み目が1つだけのものについては木簡の可能性もあるが、墨痕がみとめられず、下端部が欠損していて判然としないので斎串として扱った。

樹種同定をしたのは25点で、うちわけはヒノキ9点、スギ7点、サワラ4点、モミ属4点、クリ1点である。

木取りは柾目と板目とがある。（140・150・152）は「けびき」がみられることから、曲け物の側板を再加工したものと考えられる。また、（147・148）は表面に部分的に漆膜が残ることから、漆器の断片を再加工したものと考えられる。

②形代　第151図

主に、厚さ5㎜前後の薄い板材を用いて、人、鳥、馬、ヘビなどを象ったものである。

樹種は、薄い板状の人、鳥、馬は斎串同様ヒノキもしくはスギであるが、ヘビはヤナギである。

・人形：1・2

2点ある。いずれも正面形である。

1は全長99㎝、幅9㎝で、丁寧な加工によって頭部、胴部、腹部、脚部を作り出し、足まで表現したものである。木取りは板目である。

2は全長約15㎝、幅3㎝で、肩、腕、脚に粗い切込みをいれ、頭部、胴部、腕部、臓部を表現したものである。さらに墨書により眉、目、口髭を表現している。木取りは板目である。

・鳥形：3

全長約8㎝、幅1.5㎝で、頸、肩。頚、尾に切り欠きをいれ、頭部、口端、胴部、尾部を表現した

ものである。木取りは板目である。

・馬形：4

全長約 10㎝、幅 2㎝ で、肩、頚、尻に切り欠きをいれ、頭部、胴部、尾部を表現したものである。さらに墨書により前髪、目などを表現している。木取りは板目である。

蛇形：5

残存長約 22㎝、直径約 4㎝ で、丸木の表皮を削り、材の屈曲部分を利用して頚を持ち上げた状態の蛇の頭部を巧みに表現している。墨書により目、鼻、舌、鱗などを表現している。尾部側は欠損している。木取りは芯持ちの丸木で、節のある部分の膨らみを利用して頭部を作りだしている。

（4）服飾具

服飾具としたものには下駄、桧扇、櫛、烏帽子がある。

①下駄　第 152・153 図（200～205）

図示した 6 点はいずれも足が乗る台と接地する歯を一木で作った連歯下駄である。図示しなかった歯のみの破片資料 2 点も連歯下駄である。

台の大きさは長さが 22㎝ 前後、9㎝ 前後で大きなばらつきはないが、歯の高さは 2～7㎝ と差がある。台の平面形態をみると、爪先側はいずれも丸みがあるが、かかと側は丸みのあるもの（202、203）と内側によった尖頭形のも（200・204・205）の 2 形態がある。これに相関して前緒の孔の位置が異なり、前者ではほぼ中央に位置するが、後者では左右いずれかに寄っている。緒孔と歯の位置関係はいずれも前緒孔が前歯の前に、後緒孔が後の歯の前に位置している。緒孔の形態は隅丸長方形のものが 1 点（204）あるが、他はいずれも円形である。

歯の立面形態は、いずれも基部よりも接地面側が開く台形である。ただし接地面が使用により片減りしており、どの下駄も歯を下にして置くと台の上面は水平にならない。

樹種同定をした 5 点はクリ 3 点、ニレ属 1 点、ウコギ科 1 点である。木取りは柾目のもの、板目のもの、材の芯が歯の中央にくるように木取りしたものなどがある。

なお、台の上面が摩耗し足裏の痕跡がみえるものがある。前緒が中央にあるものでは左右の区別なく使用された痕跡が残るもの(201)と、左足の痕跡のみが明瞭にみえるもの(203)がある。一方、前緒が右に寄っている(200・204)はいずれも左足の痕跡のみが明瞭にみえる。

②櫛　第 154 図 1～11（206～216）

出土した櫛はいずれも破片で全体形のわかるものはない。形態はほぼ同じものと推定され、平面形は、櫛の背の部分がいずれも直線的に延び、肩部分が丸みをもつ形で、歯先は直線的に揃っている。断面は背側が 8 ㎜前後の厚さで、歯先に向かって次第にせばまる細長い柳葉形を呈している。背および肩の角はそぎ落されている。歯の厚さ 1 ㎜前後、長さは 3～5㎝ で、歯の刻出しの位置を決める「切通し線」が背のラインに並行してみられる。

樹種同定をしたのは 1 点のみでツゲとみられる。

③桧扇　第 154 図 12～18（217～220）

分解した桧扇の「骨」の破片が 4 点ある(217～220)。いずれも長さは不明であるが、幅 1.5～2㎝、厚さ 2 ㎜前後の薄板で、基部を留めるための要孔（かなめあな）が開いている。基部端の形態は、角を落し丸みをもたせたもの(217～219)と、角が付くもの(220)がある。要孔はおおむね基部端から 2㎝以内にあり、孔の径は 2 ㎜以下と小さい。木取りは柾目と板目の両者がある。

この他、桧扇の「骨」の破片に類似し、端部に孔の開いた薄い板状の木製品が 3 点ある(221～223)。これらは板の厚みが 5 ㎜前後と厚手で、幅が広く、孔の径が 3 ㎜以上と大きい。木取りはいずれも板目である。孔が基部以外にさらに 2 つあるもの（221）、孔の位置が基部から 5㎝と離れ過ぎているもの（223）などの特徴からみると桧扇以外の製品の一部である可能性も考えられる。

樹種同定をしたのは 7 点でヒノキ 3 点、モミ属 2 点、スギ、サワラ各 1 点である。

④烏帽子　第 154 図 19

布を芯とし、表面に黒漆を塗った乾漆の烏帽子の破片である。布を 2 枚重ねにして袋部分を作り、縁の部分はさらに帯状の布を表裏に重ね、覆い包むようにして漆で固めている。

（5）農具

農具としたものには鍬、鋤、横槌がある。

①鍬　第 155 図（225・226）

柄が着柄された状態のもの（225）と鍬の身だけのもの（226）がある。

(225)は身が長さ 34㎝、幅 17㎝で、鉄製の刃先をはめる着装部は「U」字状をなし、両側辺に段がつく。肩は撫で肩で、頭部は角柱状に突出している。頭部の突出部から肩部にまたがって縦 6.5×横 2.5㎝の長方形の柄孔があいている。身の断面形は頭部が 5㎝と厚く、刃先に向かうにつれ薄くなり、柄の側にわずかに反っている。木取りは柾目取りである。

柄は長さ 82㎝、握り部は太さ径 3㎝の丸棒状であるが、柄頭で短く屈曲し、鍬身に接続する部分では断面が 8×2㎝の長方形で、柄孔に挿入される部分は突出している。木取りは柾目取りである。

(226)は身が長さ 36㎝、幅 16㎝で、身の形態、柄孔の位置や形状、断面形など諸々の点で(225)とほぼ同様である。ただ、(225)のように着装部の両側辺に明瞭な段はみられないが側辺がわずかに屈曲する部分がある。木取りは板目取りで、全面に加工の痕跡が残る。

②鋤　第 156 図 1（227）

組合せの鋤の身と考えられる。刃先の形状や細部の加工は腐朽が著しく不明確で、残存長は 27㎝、幅 7㎝である。身は細身で撫で肩、柄受け棒が延び、その末端部には柄を結縛するための「コ」字状のえぐりが入る。身の断面は身の中央部がもっとも厚く 2㎝あり、刃先に向かって薄くなる。木取りは柾目取りで、後面は平坦面を残し、前面にだけ加工を加えている。

③横槌　第 156 図 2（228）

丸棒状の柄と、円柱形の身からなる。柄は長さ約 10㎝、径 2.5㎝、身は径 5.5㎝、長さは頭部が焼失し不明である。身と柄の境は撫で肩である。芯持ち丸材を用いている。

（6）工具・武具

工具としたものには屋根針、木錘、編台目盛板、斧柄、刷毛、箆、木釘などがあり、武具としたものには弓がある。

①屋根針　第156図3（229）

棒の先端を鋭く加工し、先端より9㎝の位置に径約1㎝の孔をあけた木製品である。先端部と孔の周縁部が著しく摩耗している。わずかに反りのある芯持ちの丸材を使用している。萱、藁などで屋根を葺く際に、孔に縄を通して屋根に突き刺し、屋根裏と表で縄を交互にやり取りしながら屋板材を固定していくのに用いられた道具で、発掘資料としてはきわめて珍しい。

②木錘　第156図5・6（231・232）

長さ20㎝前後、太さ5㎝前後の丸棒の周囲にえぐりや刻みを入れくびれ部を作りだした木製品である。(231)は芯持ちの丸木の両端を裁断し、その中央にくびれ部を作りだしたもので製作および加工の際の工具痕が粗雑に残る。(232)は柾目取りの多角柱の両端を垂直に切断し、一方の端部よりに一周する刻み目が加えられたものである。くびれ部に紐を結び、これをおもしとしてむしろや菰を編むのに使用されたものである。

③編台目盛板　第156図3（230）

菰などを編む際に、経糸を懸けるための目盛を刻んだ目盛板であるが、井戸枠材として転用されていたものである。側辺に20㎝前後の間隔で6ヶ所に刻み目が加えられている。両端の切り口は粗雑で、端にある刻み目が切断の加工痕跡によって切られている。また、両端から約20㎝の所に一対の方形の孔があるが、これも加工が粗く、刻み目との位置関係が均等でない。これらのことから、この製品は本来、左右に長かったものを、井戸枠材として転用する際、適当な長さに切断したものと推定される。

残存長は135㎝、幅16㎝、厚さ5㎝で、刻み目のある側辺の角は斜めにそぎ落とされている。側辺の刻み目は断面が逆台形で、刻み目部分は摩耗している。木取りは板目取りである。

④柄　第157図1～6（233～238）

金属製の刃をもつ工具の柄、もしくはそれに類似した木製品を一括した。

(233)は木の幹と枝の股の部分を利用し、刃を装着するための台部を幹側から、握り部を枝側からそれぞれ作りだしたものである。握り部は太さ径2.2㎝で、握り部は基部を残して折損しているためその形状や長さは不明である。台部は長さ9.5㎝、最大幅3.5㎝で、台部の上面は平坦に加工し、着装部側は細長い角柱状に、基端側は短く、角を取り丸く仕上げている。角柱状の部分の先端から4㎝の位置にわずかな段がみられ、こちら側に鉄製の刃が装着されたものと推定される。台部の形態だけをみれば袋状鉄斧の横斧の柄に類似しているが、刃部と柄の角度が鈍角である点で通常の袋状鉄斧の柄とは異なる。

(234)は板目の断面楕円形の棒で、長軸方向に幅約8㎜の浅い溝を彫ったものである。一端は尖り、もう一端は欠損している。径2㎝、残存長26㎝てほぼ全面が著しく摩耗している。溝の部分に金属製の工具の茎（なかご）を落し込み、蔓巻や紐巻にして使用したものと推定される。

(235)は芯持ち丸木を用いた断面楕円形の棒で、わずかに反りがある。両端とも長軸方向にほぼ垂直に切断しており、一端の軸の中央部には厚さ2㎜、幅4㎜の茎孔がみられるもので刀子の柄とみられる。

(236～238)は芯持ちの丸木を加工した断面円形の棒で、いずれもわずかに反りがある。(236)は樹皮が残る丸木で、一端を尖らせ、もう一端は切断し縁を丸く削っている。(237・238)は樹皮を削り取った丸木で、(237)は(236)と同様、一端を切断し、縁を丸く削り成形している。

⑤刷毛　第157図8・9（240・241）

いずれも偏平な板状の柄の先端に裂け目を入れ、毛を挟んだ平刷毛である。(240)は白木であるが、(241)は黒漆塗りの製品で木取りは斜め取りである。

(240)は長さ16㎝、厚さ5㎜の完形品である。握りの頭部が山形にそぎ落とされ尖っている。幅9㎜の細身の握り部から幅190㎜の広い柄元へ撫で肩で移行する。柄元の両側辺には切り欠きが入れられ細紐で結縛した痕跡が残る。先端の裂け目に毛は残っていないが、端部に漆がわずかに付着残存している。（241）は握り基部を欠損している。残存長11㎝、厚さ5㎜である。幅12㎜の握り部から幅230㎜の広い柄元へ撫で肩で移行する。柄元の両側辺に切り欠きが入れられ細紐で結縛している。先端の裂け目に漆で固化した毛が残っている。

⑥箆　第157図10（242）

角をそぎ落とした薄板で一端がやや幅広になる箆状のものである。両端が欠損しているため全体形は不明であるが先端側とみられる幅の広い方は薄く、握り部とみられる狭い方は厚みがある。残存長15.5㎝で、先端側は幅2㎝、厚さ2㎜で、握り部は幅1.5㎝、厚さ5㎜である。全面に黒褐色の漆もしくはなんらかの樹脂とみられるものが浸透し固化している。

⑦木釘　第157図11（194）

角棒の一端を尖らせた釘形のものである。頭部は斜めに切り落とし、側面および先端部は粗い削りにより仕上げている。長さ24㎝、太さは最大で一辺2㎝である。

⑧弓　第157図7（239）

一端にゆはずを残す丸木弓の破片である。切断されていて全長は不明である。残存長は31㎝、太さ2㎝で、ゆはず部分は両側面から削り込まれ断面が隅丸長方形に成形されゆはず周辺には漆が付着している。木取りは斜目で、角棒を削って丸木に仕上げた丁寧な作りの弓である。

（7）部材

いくつかの部材を組み合わせて器材を構成していたとみられる木製品がある。結合方法として、ほぞなどの仕口による組み物結合の部材と、くびれ部を作り、紐などで結縛したとみられる紐結合部材がある。前者では机・棚などの脚や天板、燈台の受け皿、台などがある。

①支脚　第159図1～4（243～244）

角棒もしくは板状のもので、机などの天板を支える脚部と考えられるものである。

(243)は長さ20㎝、断面2×2.5㎝の方形の角棒である。下端はわずかに斜めに切り落とされ、上

端は側辺を削り出し出ほぞが作り出されている。出ほぞの頭部にはくさびが打ち込まれている。机の天板への固定を強化するためのものとみられる。木取りは柾目取りである。

(244・245)はずれも下端がほぼ垂直に切り落とされた角棒で、上端が欠損している。太さや下端部の形態などから支脚とみられるものである。(244)は下部が断面長方形で、上に行くと一辺2㎝の正方形となる。上端は粗く切断されている。木取りは板目取りである。(245)は断面一辺2.5㎝の方形で下端の一側辺が外方に反り出る形態である。上部は火を受け炭化している。木取りは柾目取りである。

(246)は長さ13.5㎝、厚さ1.2㎝の板で、下端は幅5㎝と広く、上部に行くにつれ幅が減する。中央部には1×2.1㎝の長方形のほぞ孔が開いている。上端には側辺を切り取って出ほぞが作り出されている。出ほぞの断面は1×2.3㎝の長方形でその頭部には木釘が打ち込まれている。机の天板への固定を強化するためのものとみられる。木取りは柾目取りである。

②天板　第158図5・6（269・270）

四隅に脚部を入れるほぞ孔が開いている長方形の薄い板である。机、案などの天板と考えられるが、いずれも井戸枠材として転用されていたものである。

(269)は横73㎝、縦46㎝、厚さ4㎝で、四隅の孔は大きさにばらつきがあり、3つは一辺3.5㎝前後のほぼ方形であるが、1つは縦横4.5×3㎝の長方形である。表裏ともにおびただしい刃物傷がみられる。木取りは斜目である。

(270)は横58㎝、縦32㎝、厚さ4㎝であるが、板の両端の面は粗雑であり、転用の際に切断されたものと考えられる。四隅の孔は一辺2㎝前後のほぼ方形である。この他、片隅に縦横1×2.5㎝の長方形の孔が1対あいているが、これも転用の際の加工の可能性がある。表裏ともに手斧の刃とみられる加工痕跡が残り、さらににこれらを切るおびただしい刃物傷がみられる。木取りは板目である。

③燈台　第159図1（247）

上面の径が23.5㎝の逆円錐形の木製品で、燈台の受け皿と考えられるものである。受け皿部の上面は平滑に仕上げられ、中央寄りには長方形のくり込みが2つある。また、周辺部寄りの同心円周上に、風除けの紙を貼る軸棒を立てたとみられる径2㎜前後の細い貫通孔が2つあいている。末端部は垂直に落とされ、下面には加工痕跡が残る。なお、半月形に欠損しているが、割れ口の端部の相対する2ケ所に径5㎜の補修用とみられる孔があることから使用中に破損したものとみられる。

④方形台状木製品　第159図2（248）

一辺が23.5㎝の正方形で、断面は高さ8㎝の台形で中央に一辺4㎝、深さ4㎝の方孔をもつ。方孔は貫通せず台の下面中央にえぐりをいれている。側縁の角は粗い加工により斜めに削り落とされている。

⑤くびれ部のある部材　第160図（249～256）

細長い板もしくは棒の端部近くにえぐりや刻みを入れ、くびれ部を作りだした木製品である。(231)は中央から端部に向かって両側辺を次第に削り込み、両端にくびれ部を作り出したもので、長さ37㎝、厚さ1㎝前後、中央部の最大幅2.2㎝、くびれ部幅1.5㎝である。木取りは板目取りである。

これと同形態とみられる破片が(250～256)である。いずれも端部の一方が失われているが一端にくび

れ部が作り出された部材である。長さや幅に大小の差がみられ、木取りも板目取りの他に丸木のものもみられる。これらはくびれ部に紐を結び、他の部材と結合し使用されたものとみられる。

（8）不明品　第161図（258～268）

(258)は長さ約15㎝の板状の一側辺に浅いえぐりをいれたものである。容器の把手の可能性がある。

(259)は断面八角形の棒状の製品である。一端が切断されており本来の長さは不明。柄もしくは杖の一部の可能性がある。

(260)は枝がはりだした幹を加工したものである。幹の両端と枝の基部に加工がみられる。幹の半分が欠損し枝は焼失している。タモ網の枠木もしくは衣笠など、幹を軸とし枝を腕木とした製品の可能性が考えられる。

(261)は板状の破片で直線的な一側辺が残る破片である。下駄の可能性もあるが明確でない。

(262)は薄い板状で表面に削りの痕跡が残る。題箋木簡の可能性もあるが明確でない。

(263)は丁寧な仕上げによる一辺5㎝の方形の製品である。一部焦げ目がある。

(264)は径3㎝の円筒形で径1㎝の緒通し孔があり、網の浮子の可能性がある。

(265)は径6㎝の円盤で、中央に針孔、周縁に弧状の傷がみられる。

(262・267・268)はいずれも径3㎜の孔があり、これに細い軸木を通して結合したものである。

(266)は径8.8㎝の円盤で中央に孔がありその中に軸木が残存している。

(267・268)は長さ35㎝、幅1.5㎝の板状の製品で両端の角をそぎ落とし細くしたものである。端から12.5㎝のところに孔があり(268)の孔には軸木が残存している。これらは円盤を基部とし軸木を中心として回転する腕木と考えられるが、具体的な機能や使用方法は不明である。

（9）建築部材

掘立柱建物跡の柱穴から出土した礎板の中に、建築部材の断片が含まれていた。これらは建物が解体され不用となった建築部材を適当な大きさに切断し礎板として転用したものである。部位がわかるものとして鼠返しと扉構え（扉板、方立、辺付、眉庇、蹴放）がある（第119図参照）。

①鼠返し　第162図・第163図1（271・272）

2枚出土している。いずれも円盤状のもので中央にほぞ孔が貫通している。

(271)は径82㎝、厚さ12㎝の円盤状の板で、中央に径8㎝の隅丸方形のほぞ孔がある。上面は平坦で、そのほぼ中央には上部の柱が乗っていた痕跡が、径30㎝ほどの円形に変色した部分として残っている。下面の中央には下部の柱を受ける径37㎝の平坦面があり、その周辺は斜めに面取りされている。上面に加工の際の工具の痕跡が残っている。木取りは柾目取りである。

(272)は径72㎝、厚さ10㎝の円盤状の板で、中央に径8㎝の円形のほぞ孔がある。上面は平坦で、下面は径53㎝の平坦面があり、その周辺は斜めに面取りされ、縁辺は垂直に落とされている。上下面に加工の際の工具の痕跡が残っている。木取りは斜目である。

②扉構え　第163図2～第165図

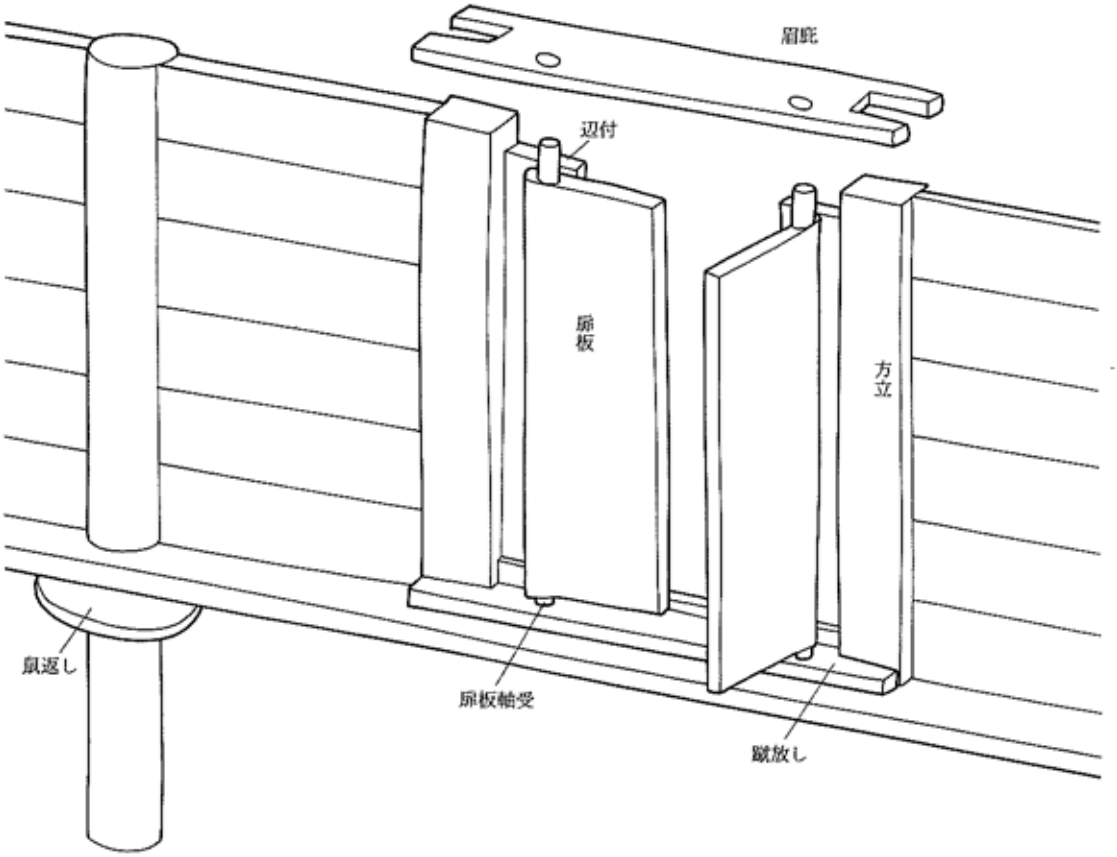
建築部材のうち、扉周囲の特徴的な加工がみられる部材で「扉構え」と総称されるものが確認できる。具体的には、扉板、方立、辺付き、眉庇、蹴放などである。これらは礎板として転用された際、適当な長さに切断されている。

第165図5･6は扉板もしくは蔀戸とみられるものである。いずれも板状の材の一端に扉板の回転の軸となる棒状の軸を削り出したものである。板の大きさは切断されていて不明であるが厚さは約5㎝、軸は長さ5㎝、4㎝の円柱である。

なお第165図5･6はいずれもＳＢ750掘立柱建物跡出土のものであるが、この掘立柱建物跡からは他に断面形が厚い板状の部材が出土しておりこれらは方立、辺付きなどの部材を切断したものと推定される。

第163図2、第164図(273～275)、第165図1～3(279～281)は眉庇、蹴放とみられるものである。いずれも端部に辺付もしくは方立をはめ込む方形の切込みがあり、その脇に扉板の軸棒を受けるとみられる孔がうがたれた板材である。切断され本来の形状をとどめるものはない。扉板の軸受け孔が貫通するもの(273、274、279)と、貫通せずくぼみとなるもの(280、281)があり前者が眉庇、後者が蹴放とみられる。

(273～275)はＳＢ862掘立柱建物跡出土のもので、いずれも幅が24㎝前後、厚さ5㎝で、同一材で



第119図　建築部材部位名称模式図

ある。眉庇板を切断したものとみられる。(273)は端部に辺付もしくは方立をはめ込む方形の切込みがあるもの。(274)はそれに加えて孔があるもので眉庇板の両端部の破片とみられる。(275)は一辺によった位置に孔径約2㎝の貫通孔があるもので、眉庇板の中央部分と推定される。中央の貫通孔は扉板の閉じた状態でこれを抑えるための仕掛を受ける穴とみられる。

(279)は残存長60㎝、残存幅17㎝、厚さ10㎝の板材で、周縁はすべて転用の際の粗い切断面であるが、切込みとほぞ孔の一部が確認できる。いずれも板目材を使用している。

(279～281)はＳＢ756掘立柱建物跡出土のもので、材の幅は不明であるが、いずれも厚さ6㎝である。(279)は辺付もしくは方立をはめ込む方形の孔と扉軸受け孔があるもので眉庇板の端部の破片とみられる。(280・281)は同一材とみられるものでいずれも径3㎝のくぼみ状の孔があることから蹴放の両端部の破片とみられる。孔は摩耗しているが、これは扉板の軸を受けたことによるものであろう。

③その他の建築部材　第166・167図（276～278、282～286）

いずれも建築部材とみられるものであるが、端部が粗く切断されるなどして本来の個々の具体的な部位、性格については不明である。

(276)は芯持ちの角材で、一端に半円形の複雑な仕口が設けられ、他端は粗く切断され失われている。仕口から約10㎝の位置に小さな斜め方向の潜穴がうがたれている。表面には手斧の加工痕が残る。

(282)は手斧の加工痕が残る薄い板状の材で両端辺が粗く切断されている。

(277・278)はいずれも材を縦方向に割烈したままの状態の粗い仕上げの板材である。一側辺に粗い加工によるえぐりがみられ、両端辺は粗く切断されている。

(283・284)はいずれも一端の隅がそぎ落とされ丸みをもち、他端はほぼ垂直に切り落とされた厚さ8㎝前後の材である。隅に丸みのある方の辺寄りに一辺4㎝の隅丸方形の穴がうがたれている。

(285)は一端が細く削り込まれたくさび状のものであるが、他端は粗く切断されていて本来の形状は明確でない。表面には手斧の加工痕が残る。

(286)は四辺がほぼ垂直に切り落とされた厚さ10㎝前後の芯持ち材である。一端辺寄りの両隅に一辺1㎝の隅丸方形の小さな穴がうがたれている。表面には手斧の加工痕が残る。

（10）籠　第168図

いずれも断片で本来の形状がわかるものはない。編み方をみると体部は笹目編み、底部は二本越し、二本潜りの網代編みである。

（11）井戸枠材

発見された古代の井戸跡15基(第29表)からは、井戸の枠材として使用されたとみられる木材が例外なく出土している。石組や、素掘りの井戸跡は確認されていないことから、山王遺跡多賀前地区における古代の井戸跡は、基本的に井戸内壁の崩落を防ぐため、何らかの木材を使用していたとみられる。ただし、廃絶時に井戸枠材が抜取られ、破壊された井戸跡も少なくない。

井戸跡出土の材は井戸の構造や使用部位によって多種多様な材が使われている。これら井戸跡出土

の木材については転用材以外は図示しなかった。個々の井戸跡の構造については遺構編の井戸跡の項で既に記述してあるので、ここでは、井戸の構造模式図を示しながら使用されていた個別の材の形態とその使用方法を概観することにする。なお、井戸各部の呼称については宇野隆夫氏の論考(宇野1982)を参考にした。

材が遺存していた井戸跡は8基ある。これらは井戸側を構成する材の特徴などから大きく三種に分けられる。

Ⅰ類：くり抜き井戸：（ＳＥ1434・2267）第120図上段

太い丸太材を「U」字状にくり抜き、これを埋め込んで井戸側としたもの。

くり抜いて開放した側が南側にくるように配置し、この部分はくり抜いた木の一部、もしくは別の板材数枚を立てかけて閉塞している。また、これらの板材が内部に倒れ込まないように横に丸太材を渡し、板材を支持している。井戸側下部に掘り込みはない。

Ⅱ類：縦板組み井戸：（ＳＥ659・821・864・2265）第120図中段・下段

板材を縦方向にして立て並べ、方形に組んで井戸側としたもの。井戸側下部に水溜部の掘り込みがある。水溜部が素掘りのもの（ａ）と、曲げ物を埋め込んだもの（ｂ）とがある。

ａ：水溜部が素掘りのもの（ＳＥ821）

井戸側の板材が内部に倒れ込まないよう、中程に方形に組んだ横桟がはめ込まれている。横桟はほぞを切り組まれている。

ｂ：水溜部に曲げ物が埋め込まれたもの（ＳＥ659・864・2265）

井戸側の板材が内部に倒れ込まないよう、四隅に抗が打ち込まれたもの(ＳＥ659・864)、横に丸木や板材が渡されたもの(ＳＥ2265)などがある。

Ⅲ類：横板組み井戸：（ＳＥ50・660・3026）第121図

板材を横位にして積み重ね、方形に組んで井戸側としたもの。井戸側下部に水溜部の掘り込みがある。

井戸側の組み方として、板材の両端に切り込みを入れ井篭組みにして積み上げたもの（ａ）と、四隅に隅柱を立て、これに縦方向に溝を切り、そこに横木を落とし込んで積み上げたもの（ｂ）とがある。

ａ：井篭組みのもの（ＳＥ50・3026）

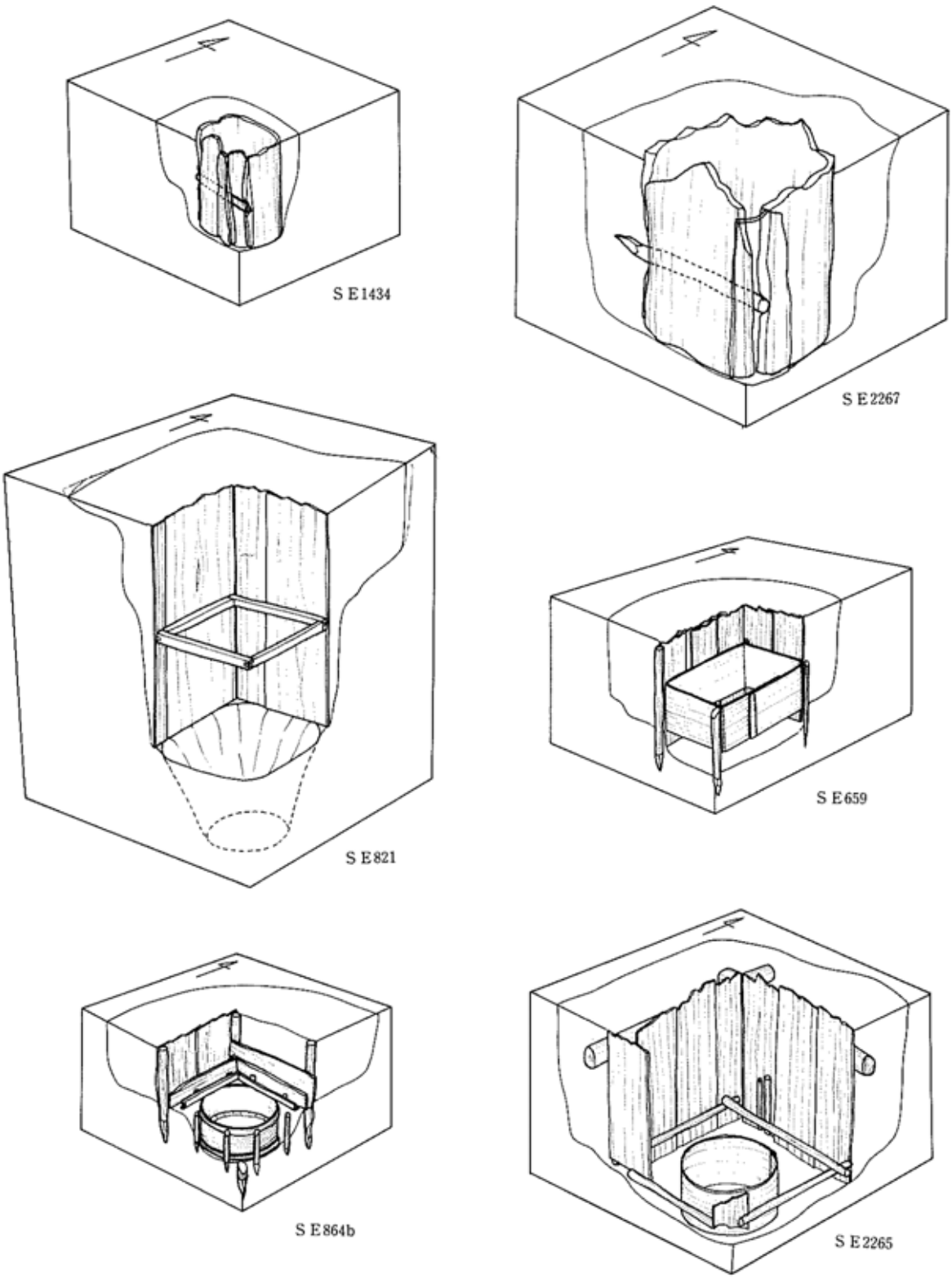
両端の切り込みが上下一方向からのもの(ＳＥ50)と、上下双方向からのもの(ＳＥ3026)とがある。

ｂ：隅柱を立てたもの（ＳＥ660）

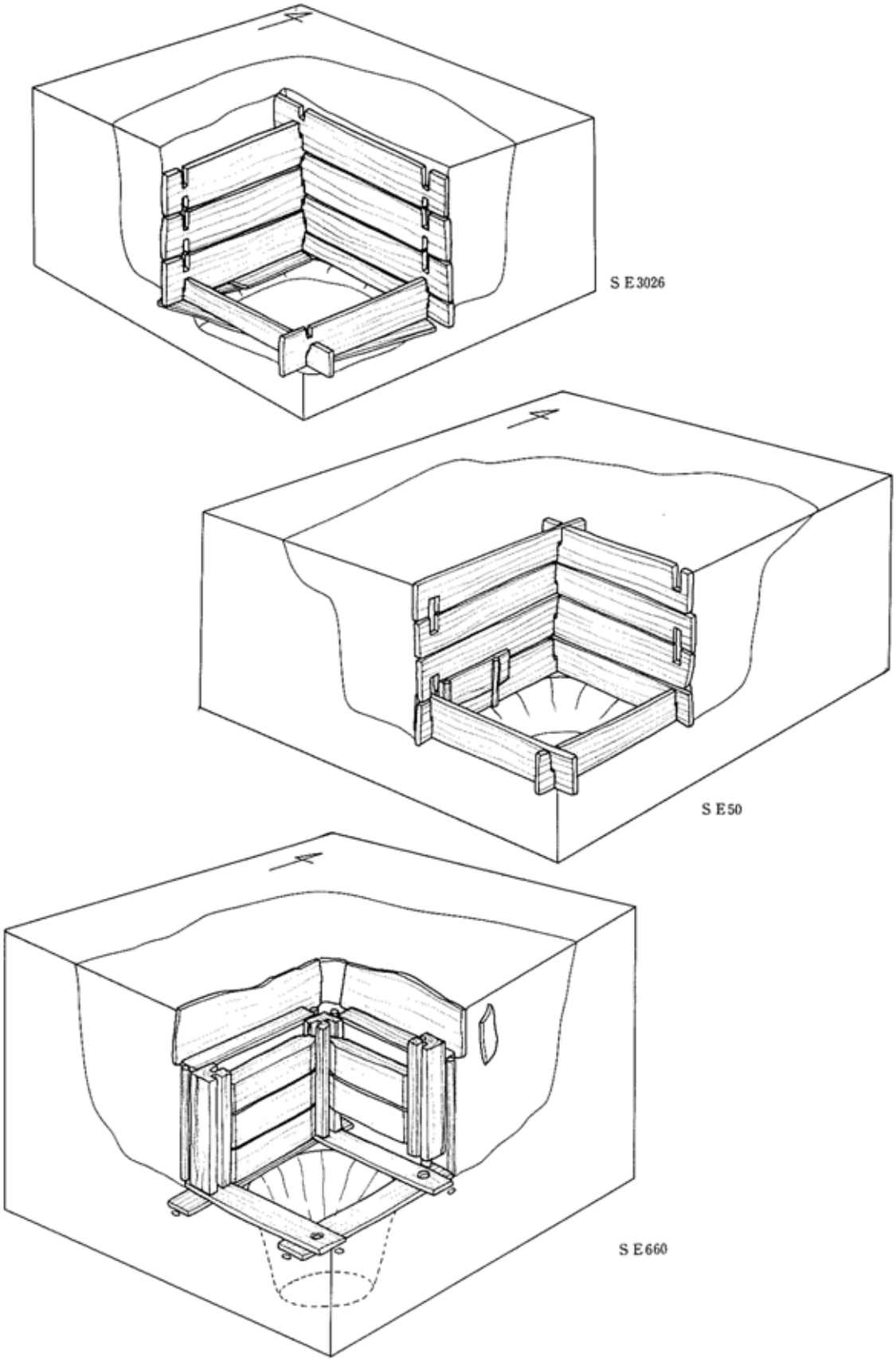
両端にほぞ穴を開けた板を基底部に井桁状に組み、その四隅に隅柱を立てたものである。井戸側となる板材は厚手の板材であるが、両端は隅柱の溝に落し込むようにそぎ落とされている。

地区	井戸番号	井戸の構造	類　型	年代	材の概要	枠木の主な樹種
北1西3区	SE502	不明（抜取り）			モミ属	
	SE659	縦板組み	Ⅱｂ類	9世紀前半	クリ、モミ属	モミ属
	SE660	横板組み	Ⅲｂ類	9世紀前半	ケヤキ、モミ属	ケヤキ
	SE821	縦板組み	Ⅱａ類	9世紀前半	クリ、コナラ層コナラ節、モミ属	モミ属
	SE864b	縦板組み	Ⅱｂ類	8世紀後半？	クリ、カエデ属、モミ属、ヒノキ	モミ属
	SE892	不明（抜取り）			クリ、ブナ属、カヤ、モミ属	
南1西2区	SE50	横板組み	Ⅲａ類	10世紀前葉	クリ、モミ属	クリ
	SE1434	くり抜き	Ⅰ類	9世紀中葉		
	SE2265	縦板組み	Ⅱｂ類	9世紀後葉	クリ、コナラ層、ブナ属、モミ属、アカマツ	
	SE2267	くり抜き	Ⅰ類	9世紀中葉		
	SE3026	横板組み	Ⅲａ類	10世紀前半	クリ、ニレ属、モミ属	クリ
南2西1区	SE1606	不明（抜取り）				
	SE1739	不明（抜取り）				
	SE1898	不明（抜取り）				
	SE3207	不明（抜取り）				

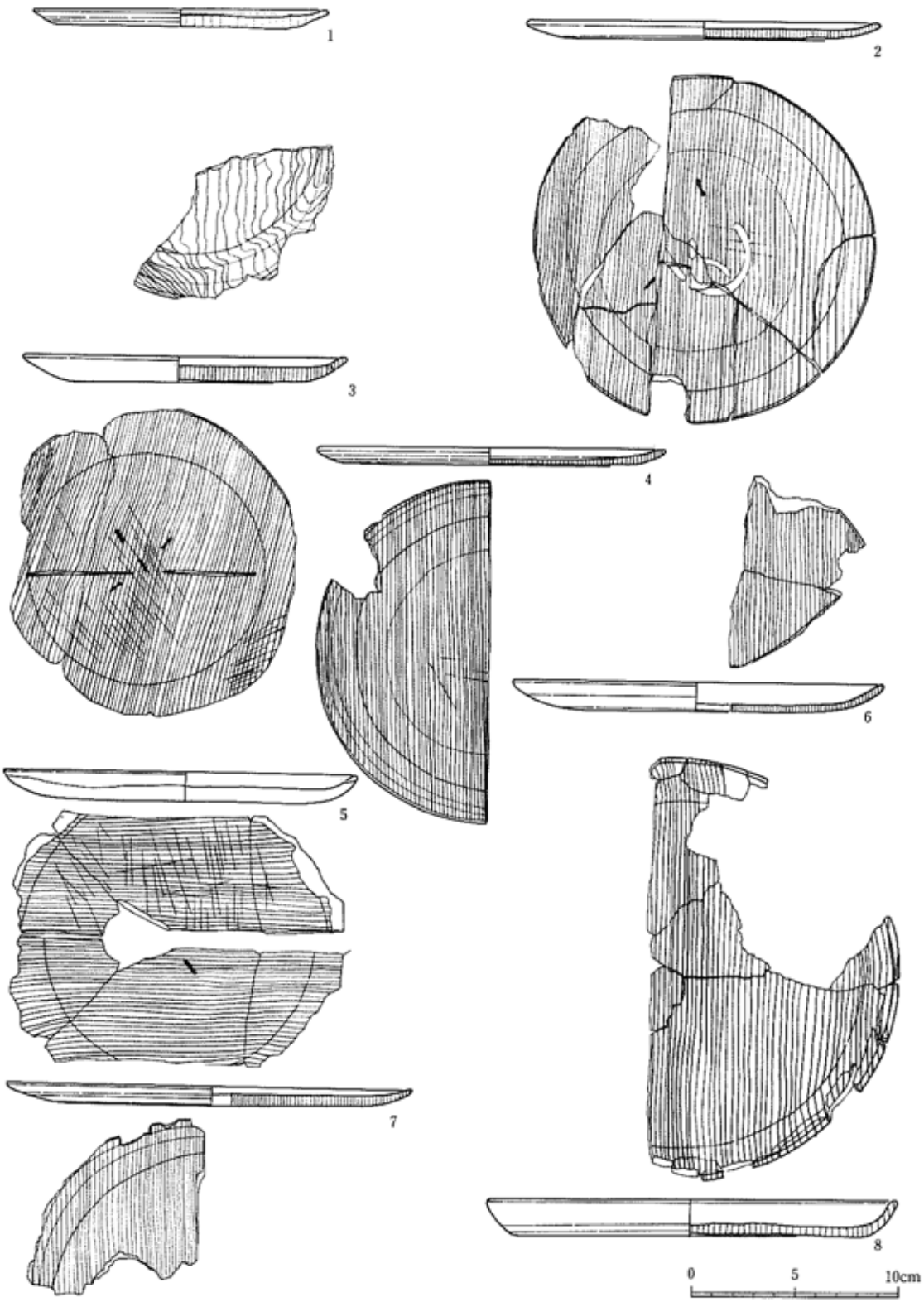
第29表　井戸の構造と材の樹種



第120図　井戸枠模式図1S＝1/20

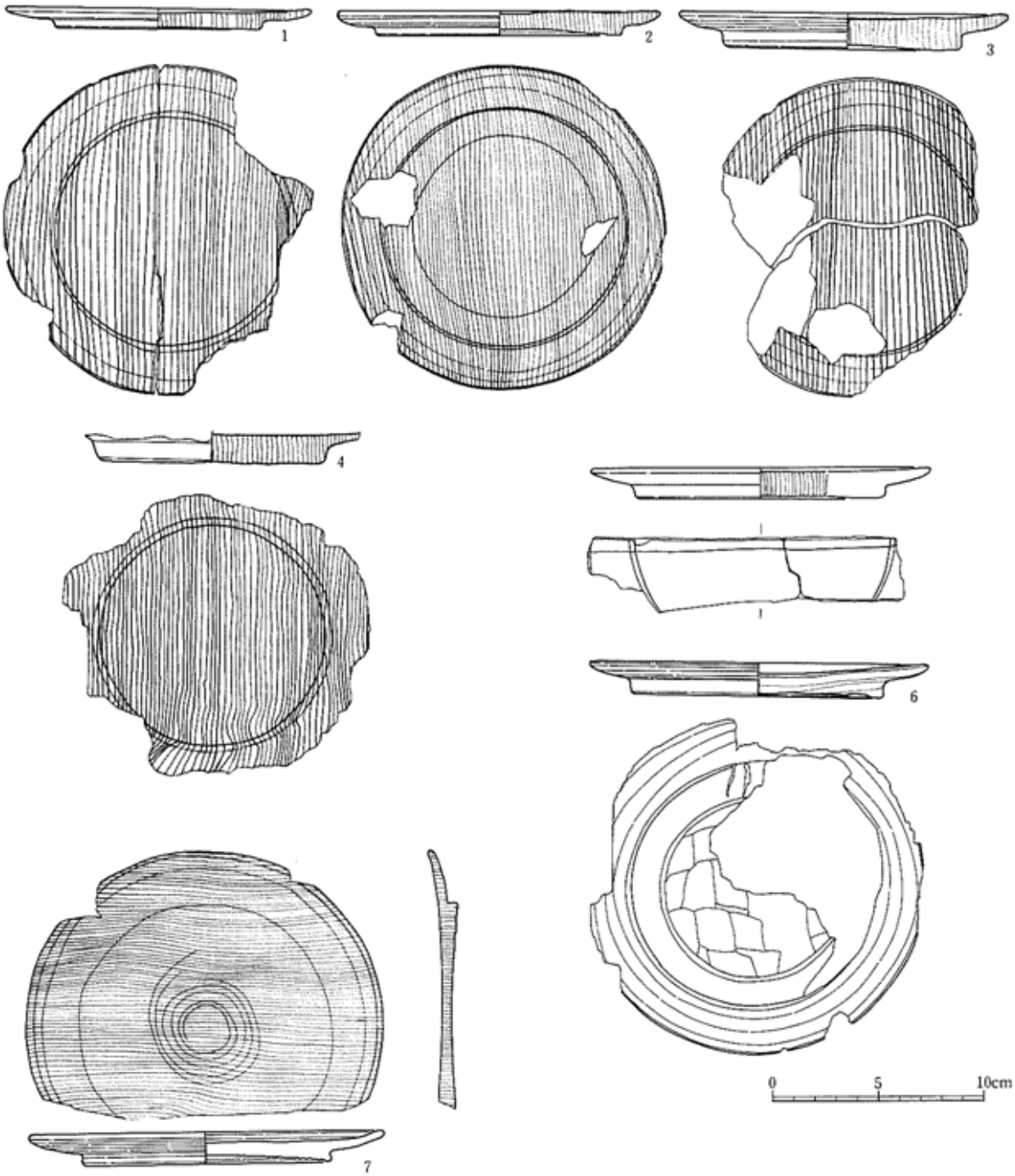


第121図　井戸枠模式図2S＝1/20



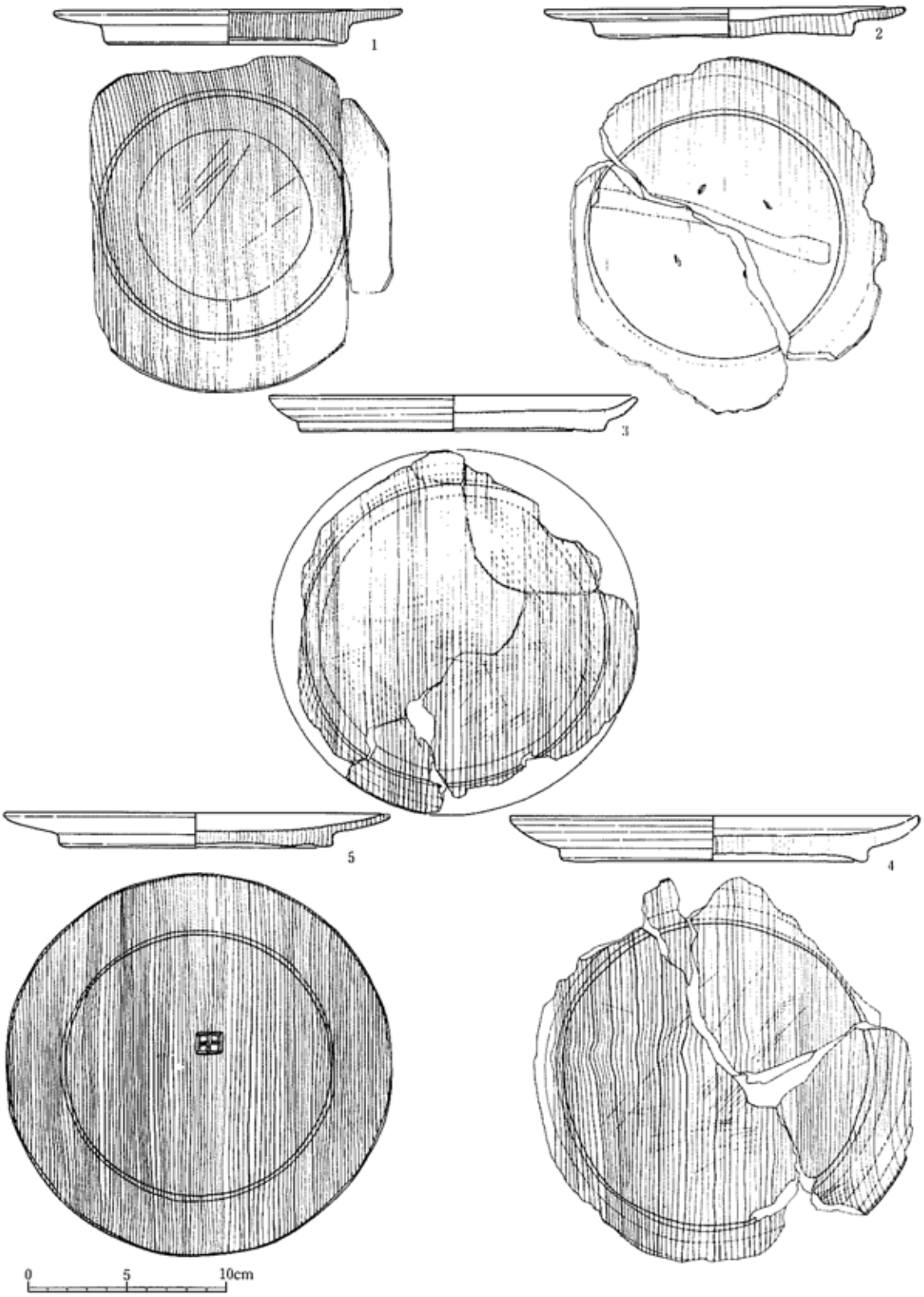
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	01	挽物　皿	南1西2区	SK3023　3層	1/4	径15×1	ケヤキ		Ⅲ期9世紀中葉？
2	02	挽物　皿	河川跡	SD2000　9層	1/1	径16×1.5		底部外面にロクロ爪痕　刃物傷	9世紀中葉？
3	03	挽物　皿	河川跡	SD2000　9層	1/1	径17.5×1		底部外面にロクロ爪痕	9世紀中葉？
4	04	挽物　皿	南1西2区	SK3023　3層	1/2	径17×1			Ⅲ期9世紀中葉？
5	05	挽物　皿	南3東1区	SD3702　1層	3/4	径17.5×1.5	ケヤキ	底部外ロクロ爪痕　内面に刃物傷	8世紀中葉
6	06	挽物　皿	南1西2区	SK3023　3層	1/4	径18×1.5	ケヤキ		Ⅲ期9世紀中葉？
7	07	挽物　皿	河川跡	SD2000　7～12層	1/4	径20×2	ケヤキ		9世紀代
8	08	挽物　皿	東西大路	SX10南側溝C期	2/3	径21×2.0	ケヤキ		9世紀前葉

第122図　挽物白木皿



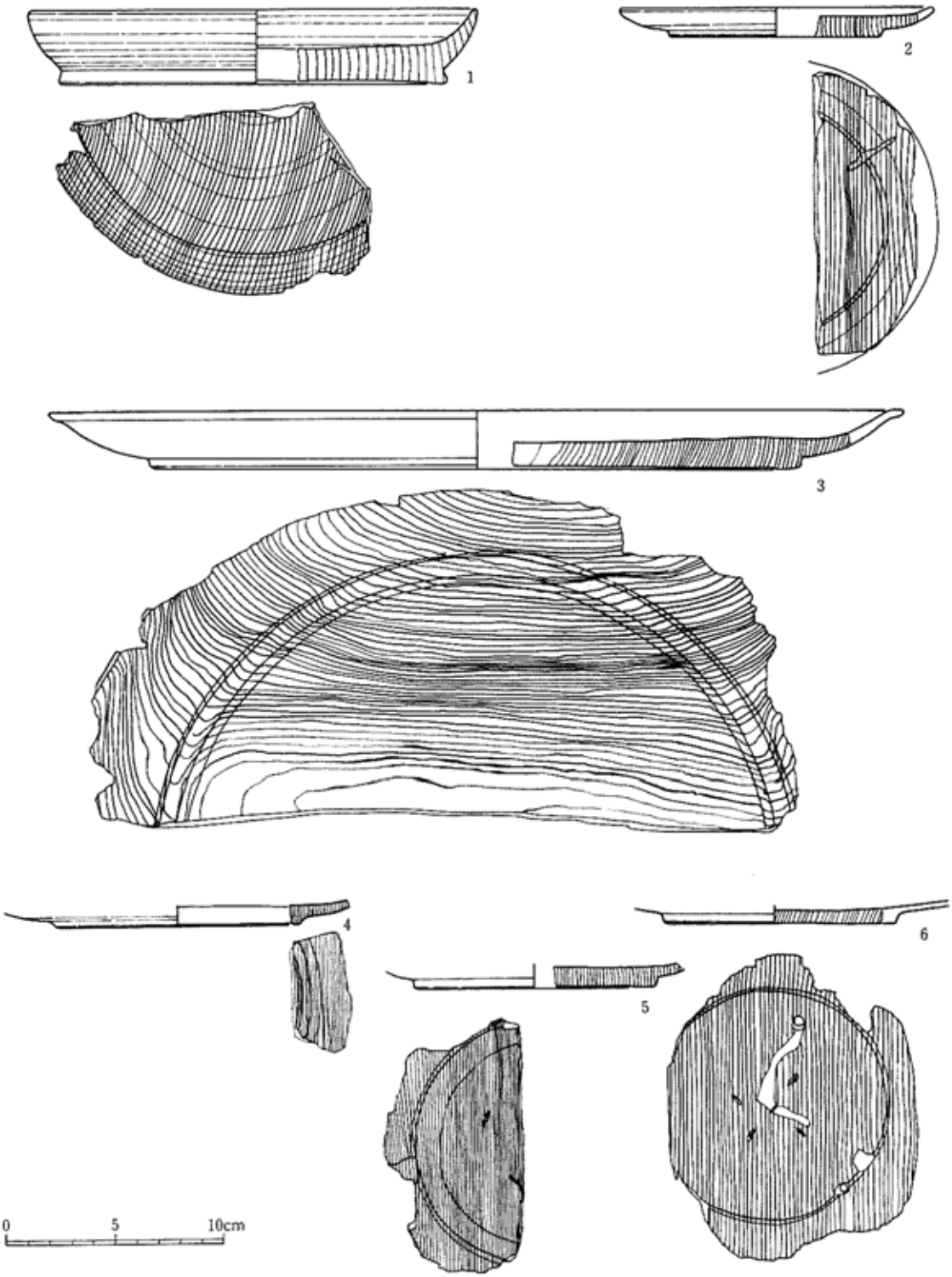
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	09	挽物　高台付皿	北1西3区	SK579	3/4	径15×1			4群10世紀前葉
2	10	挽物　高台付皿	南1西2区	SD1020A　畔	1/1	径15.5×1.5	ケヤキ	底部外面に墨痕	2群9世紀前葉
3	11	挽物　高台付皿	河川跡	SD2000　6層	3/4	径16×2			10世紀前葉以前
4	12	挽物　高台付皿	北1西3区	SK166	1/2	径16		一部焦げ	不明
5	13	挽物　高台付皿	東西大路	SX10 北側溝D期	1/4	径16.5×1.5	ケヤキ		9世紀前葉？
6	14	挽物　高台付皿	河川跡	SD2000　9層	3/4	径16.5×1.5		底部外面に手斧加工の痕跡	9世紀中葉？
7	20	挽物　高台付皿	北1西3区		3/4	径21×2.5		底部外面に刃物傷	不明

第123図　挽物白木高台付皿（1）



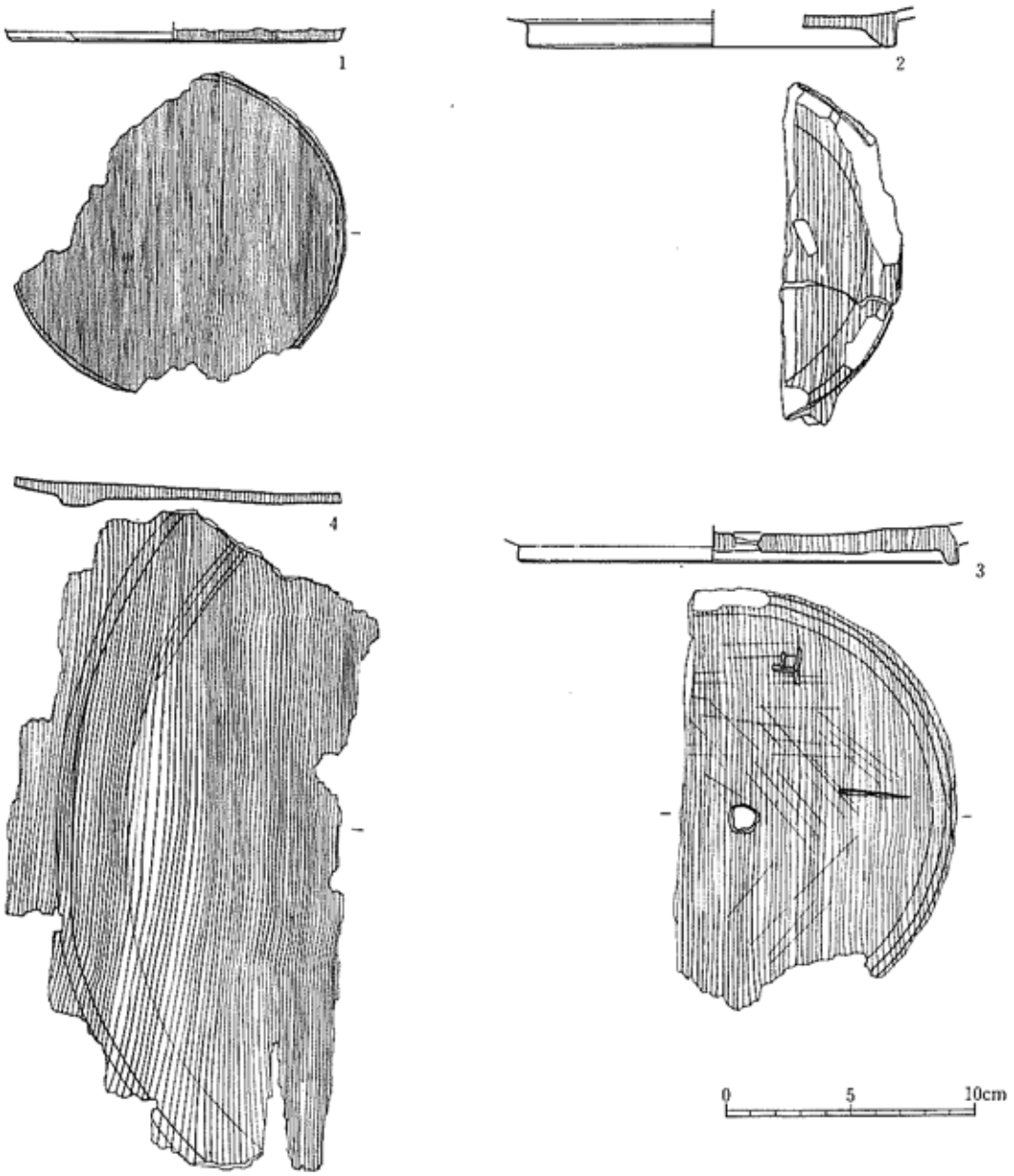
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	15	挽物　高台付皿	南1西2区	SD1020A　柝	3/4	径17.5×1.5			2群9世紀前葉
2	16	挽物　高台付皿	東西大路	SX10 北側溝 D期	3/4	径18×2		側底部外面にロクロ爪痕	9世紀前葉以降
3	17	挽物　高台付皿	北1西3区	SE660　4層　枠内	3/4	径19×1.5		底部外面に刃物	2群9世紀前半
4	18	挽物　高台付皿	西2道路	SX30 西側溝 C期	3/4	径19		底部外面に刃物痕	9世紀前葉
5	19	挽物　高台付皿	南1西2区	SE2265	1/1	径20×2		裏に「田」の墨列	Ⅳ期9世紀後葉

第124図　挽物白木高台付皿（2）



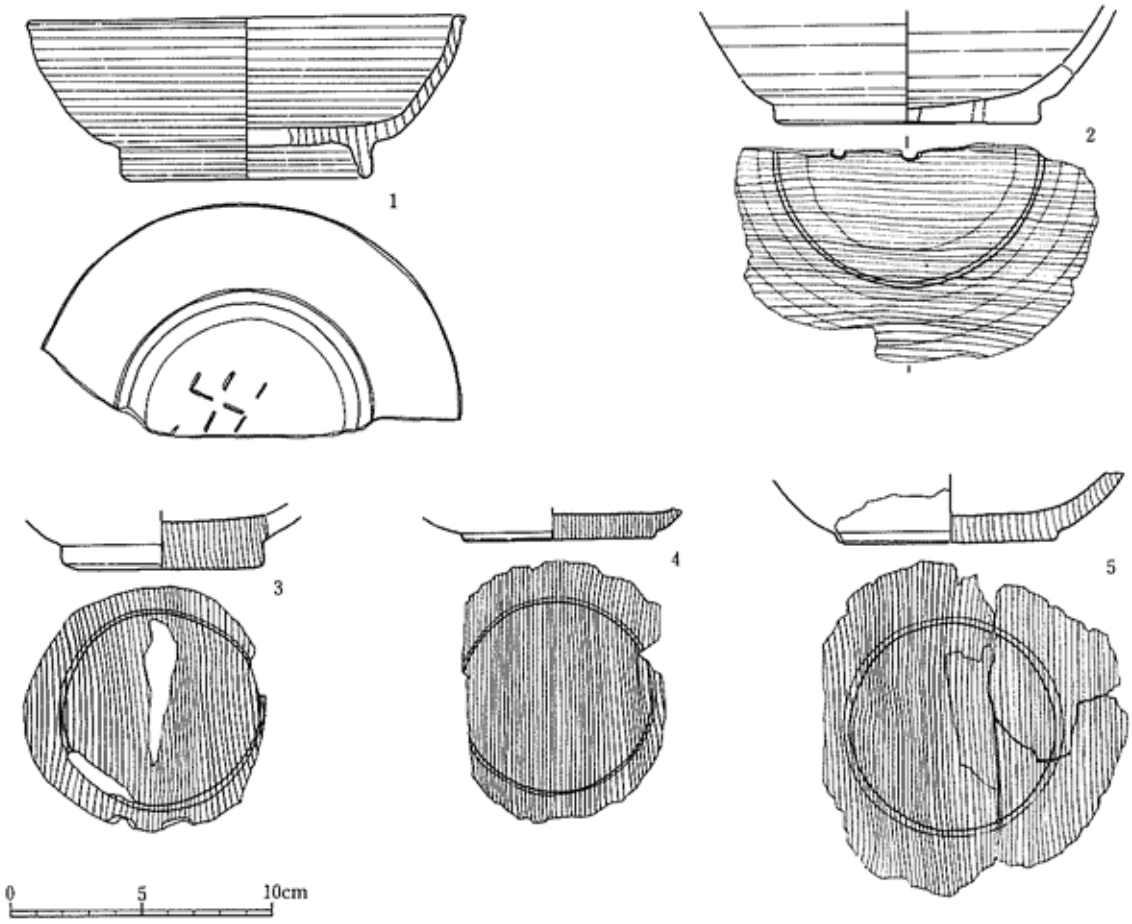
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	21	挽物 高台付皿	東西大路	SX10 北側溝 D 期	1/2	径21.5×3.5			9 世紀前葉以降
2	22	挽物 高台付皿	南 1 西 2 区	SE2265	1/2	径41×3			IV期 9 世紀後葉
3	23	挽物 高台付皿	東西大路	SX10 北側溝 D 期	1/3	径15×1.5	ケヤキ		9 世紀前葉以降
4	24	挽物 高台付皿	北 1 道路	SX4012 北側溝 B 期	1/8	(径16.5)	ケヤキ		9 世紀後半？
5	25	挽物 高台付皿	東西大路	北側溝 探堀	1/2	(径14以上)	カツラ	外面底部にロクロ爪痕	不明
6	26	挽物 高台付皿	北 1 西 3 区	SK714	3/4	(径15以上)	ケヤキ	外面底部にロクロ爪痕	不明

第125図　挽物白木高台付皿（3）



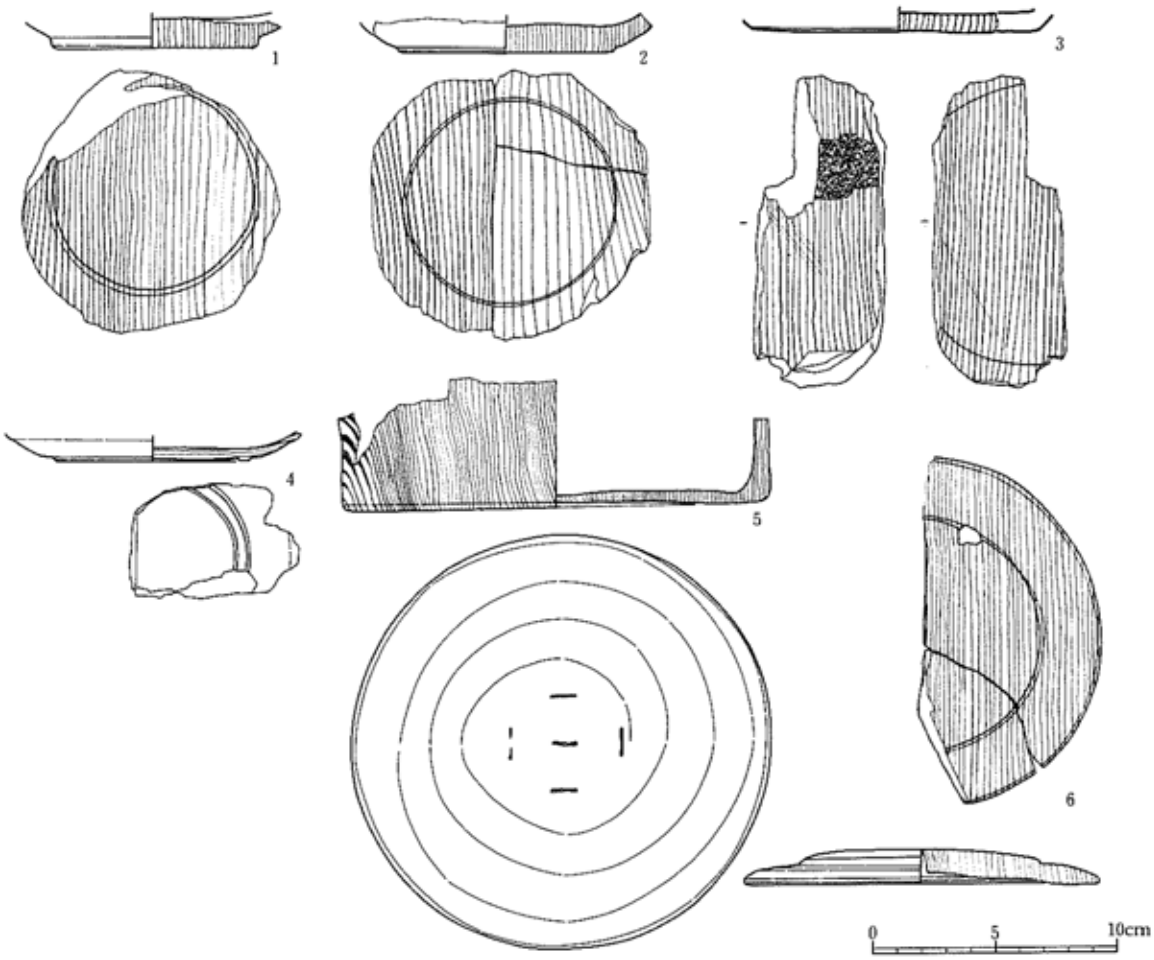
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	27	挽物　高台付皿	南3東1区	pit458	3/4	(径14×0.5)	サワラ	底部高台部、礎板に転用	不明
2	28	挽物　高台付皿	東西大路	SX10北側溝D期	1/4	(径15以上)	ケヤキ	底部高台部のみ	9世紀前葉以降
3	29	挽物　高台付皿	北1西3区	SE892　2層	1/2	(径18以上)		外面底部に「上」刻字穿孔	1期8世紀後半
4	30	挽物　高台付皿	北1西3区	SB863 N1 W1	1/3	(径45以上)		礎板として転用	9世紀後半

第126図　挽物白木高台付皿（4）



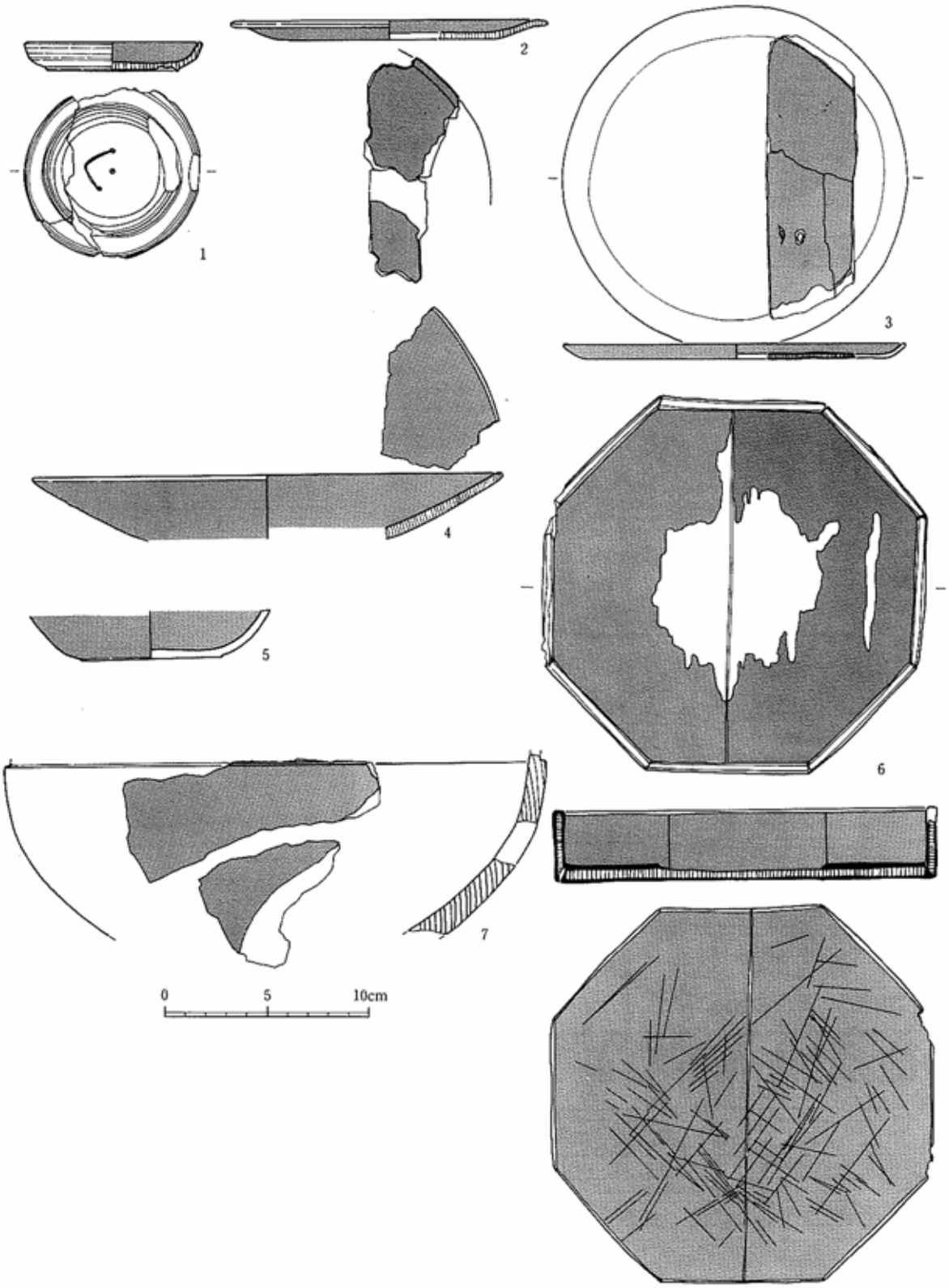
No.	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	31	挽物 白木 椀	南3東1区	SD3701 3層	1/2	径17×6.5		外面底部にロクロ爪痕	8世紀
2	32	挽物 白木 椀	N-1	SX10南側溝H期	1/2	(径15×4.5)			10世紀代
3	33	挽物 白木 椀	河川跡	SD2000	底部	(径10×1.5)	ケヤキ		不明
4	34	挽物 白木 椀	南3東1区	SD3625 シルト層	底部	(径10×1)			9世紀後半
5	35	挽物 白木 椀	南3東1区	SD3625 シルト層	底部	径14×2.5			9世紀後半

第127図　挽物白木椀



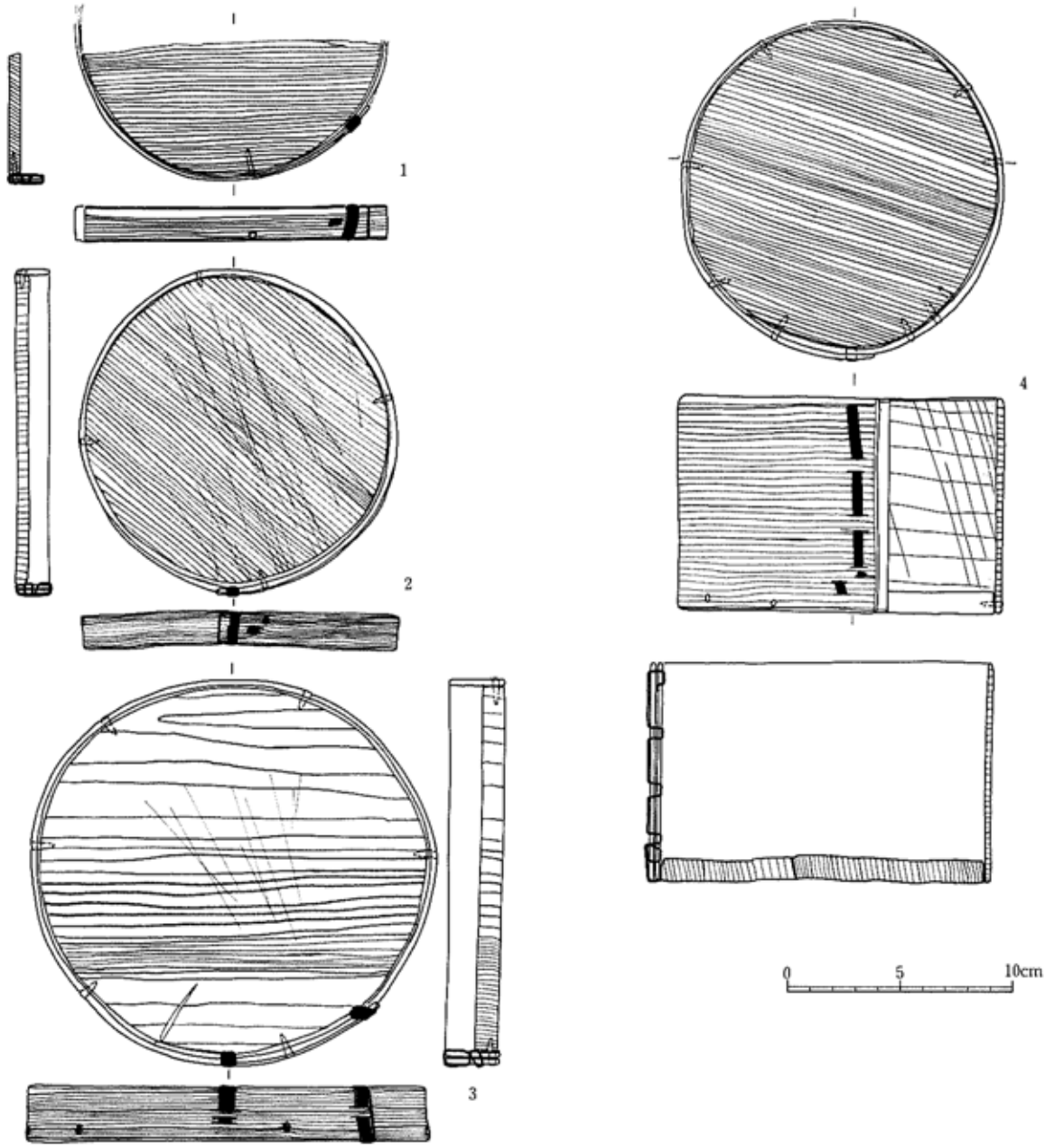
No.	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	36	挽物 白木 椀	西2道路	SX30 西側溝 C層	底部			一部焦げ	9世紀前葉
2	37	挽物 白木 椀	北1西3区	SK410 最下層	底部	(径12×1.5)			不明
3	38	挽物 白木 椀	西2道路	SX20 西側溝	底部		ケヤキ		不明
4	39	挽物 白木 椀	西1道路	SX1350 西側溝 1層	底部	(径12×1)	ケヤキ		10世紀前葉以降
5	40	挽物 白木 鉢	南1西2区	SE3026 井戸枠内 1層		径17.5×6	ケヤキ	底部外面にロクロ痕	4群10世紀前半
6	41	挽物 白木 蓋	西1道路	SX1350 西側溝 D層	1/2	径15×1.5			10世紀前葉
7	49	挽物 陶器 鉢	北1西3区	SK573 1層	1/8	径55×7以上	同定不可能		不明

第128図　挽物白木椀・鉢・蓋



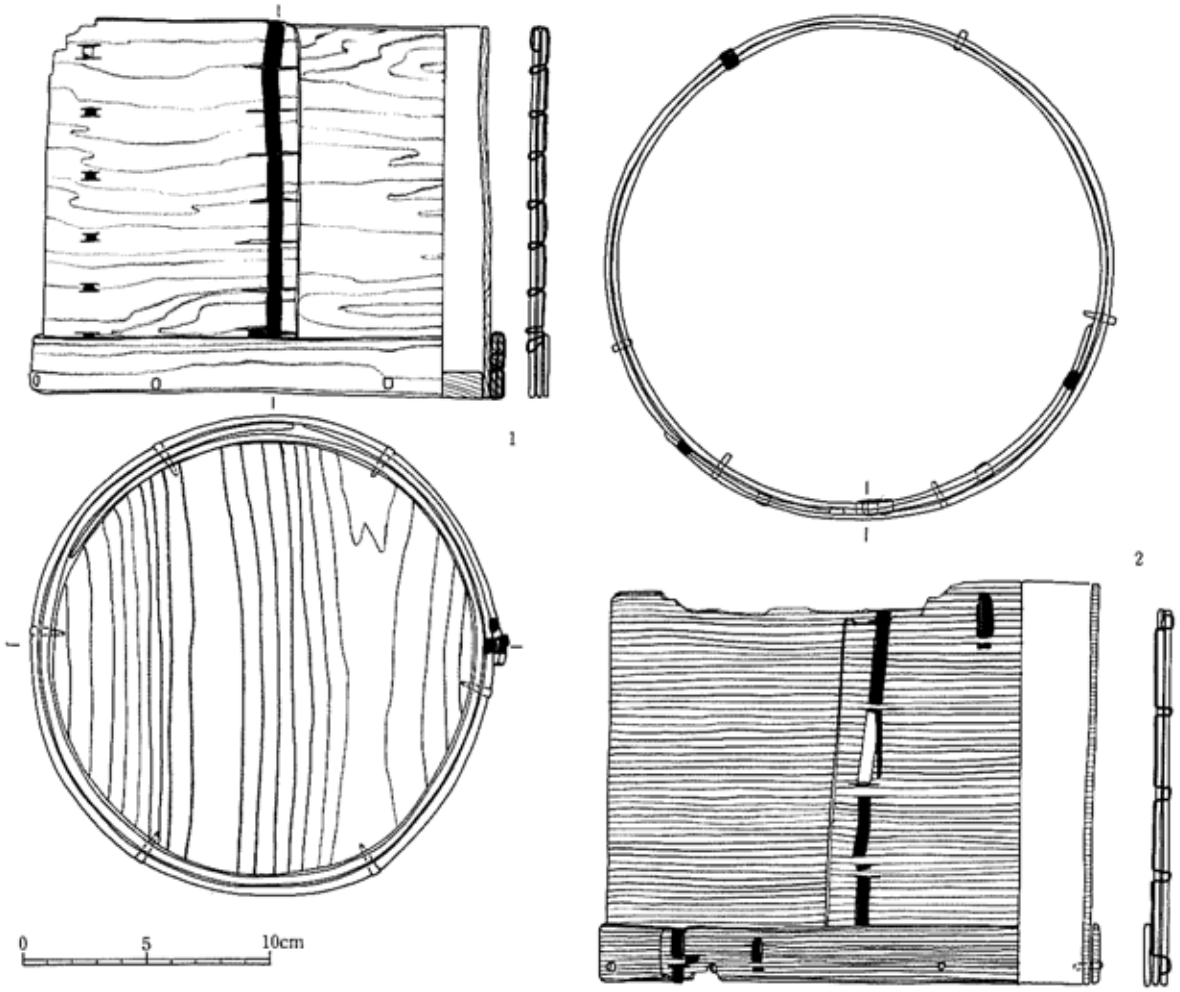
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	42	挽物 漆器 小皿	西2道路	SX20	1/1	径9×1.5	ケヤキ		不明
2	43	挽物 漆器 皿	東西大路	SX10 北側溝E期	1/4	径16×1以上	ケヤキ		10世紀前葉以前
3	44	挽物 漆器 皿	北1西3区	SI560 2層	1/4	径18×0.8	同定不可能		3群9世紀後半
4	45	挽物 漆器 皿	河川跡	SD2000 9層	1/6	径24×3以上	ニレ属		9世紀中葉
5	46	挽物 漆器 椀	南1西2区	SD1240	底部		ニレ属		5群10世紀
6	47	組物 漆器 箱	南1道路	SX1300 南側溝D期	1/1	径19.5×19.5	同定不可能	外面底部 刃物傷	10世紀前葉
7	48	挽物 漆器 鉢	北1道路	SX4013 北側溝B期	1/6	径27.5×12以	ケヤキ		9世紀後半

第129図　挽物漆器皿・椀・鉢・組物八角皿



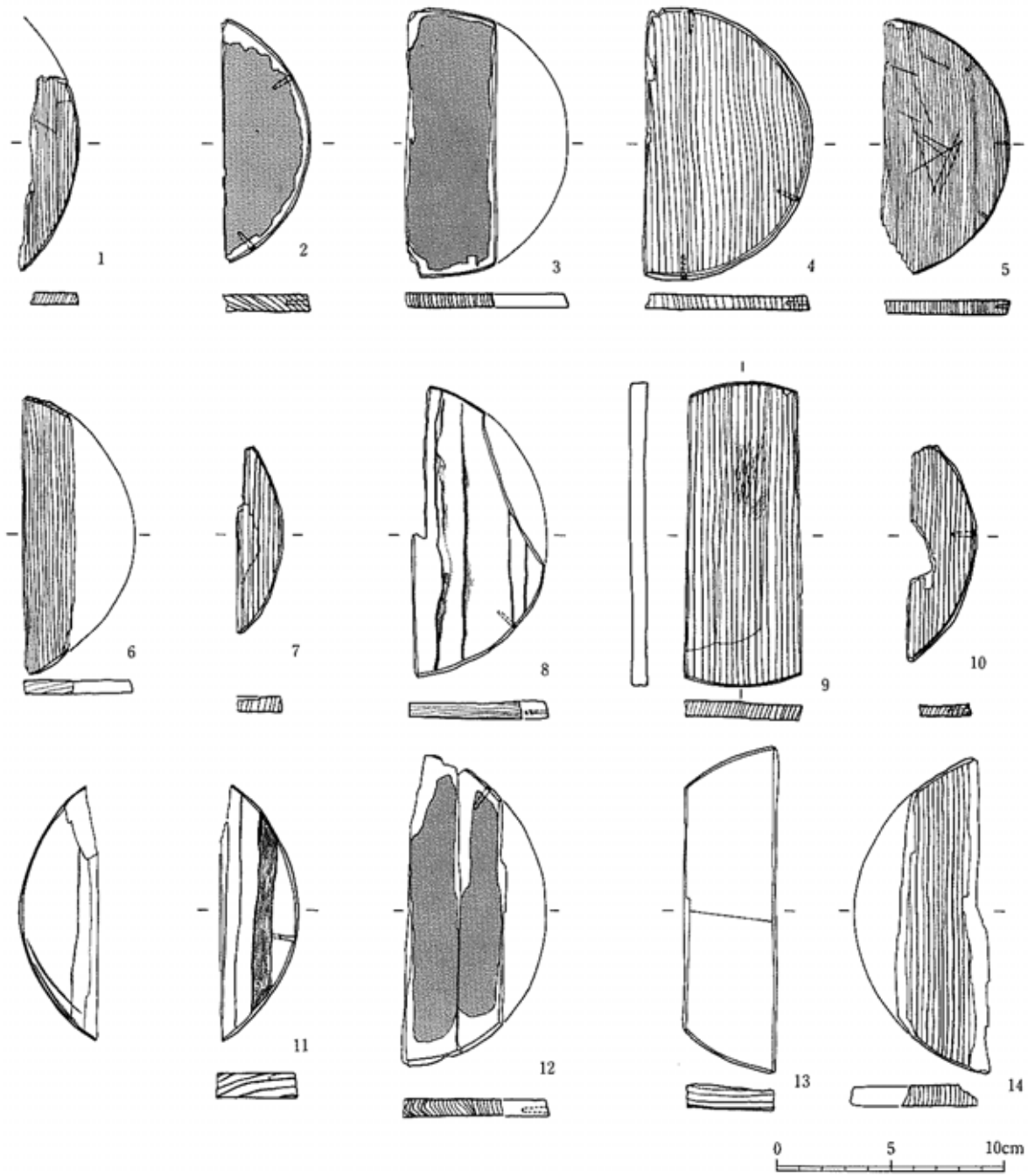
No	登録No	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計 測 値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	50	釘結合円形曲げ物	河川跡	SD2000　9層	1/2	径14.5×1.7	サワラ	木釘1本残	9世紀中葉
2	51	釘結合円形曲げ物	南1西2区	SK3023　3層	1/1	径14×1.7		木釘4本	III期9世紀中葉
3	52	釘結合円形曲げ物	南1西2区	SE2265　1層底面	1/1	径18.5×2.5		釘6本、内面底部に刃物傷	IV期9世紀後葉
4	53	釘結合円形曲げ物	北1西3区	SE502　抜取り穴	1/1	径15×1.0		釘9本、内面に樺付着	5群10世紀

第130図　釘結合円形曲げ物（1）



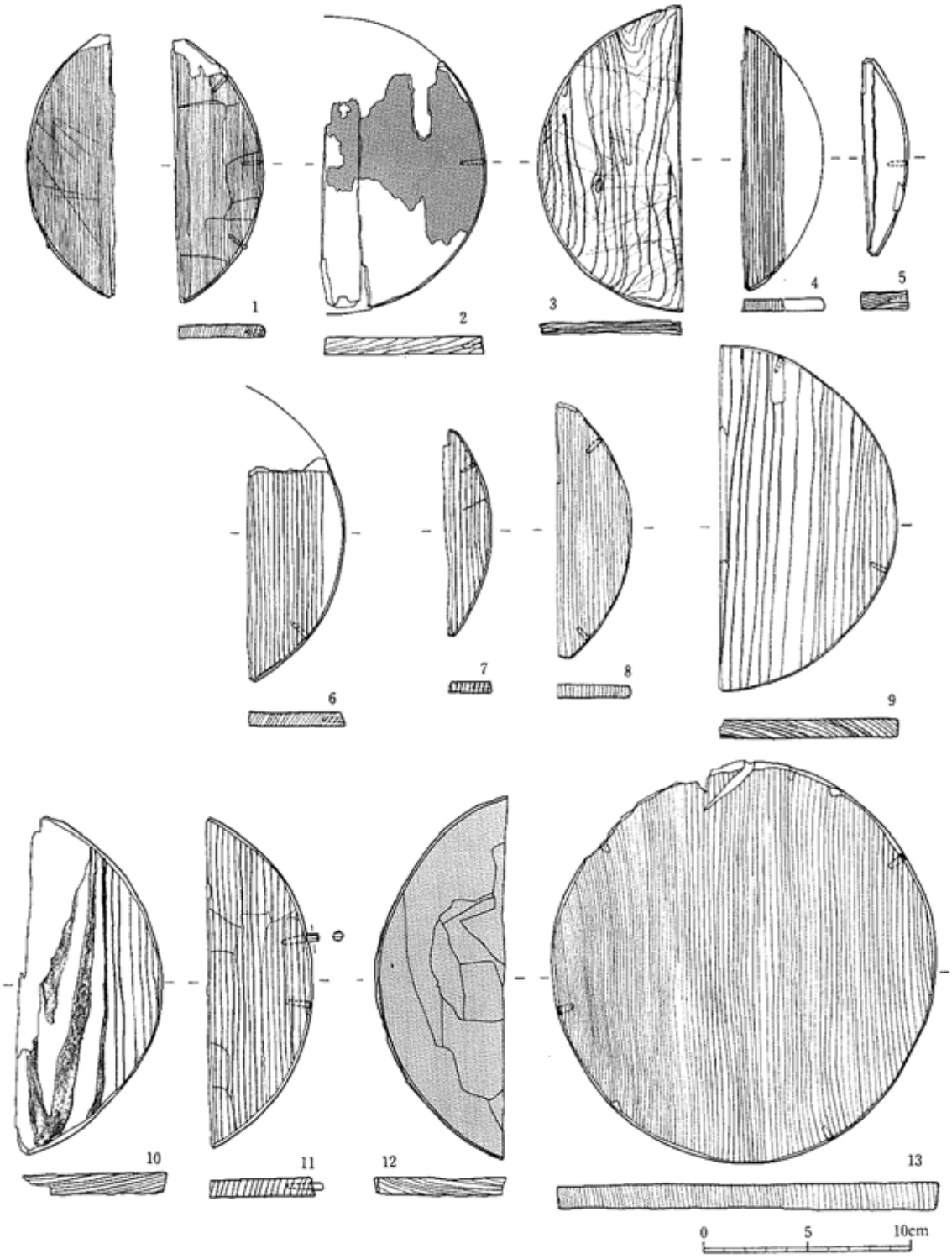
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	54	釘結合円形曲げ物	北1西3区	SE821　4層	1/1	径17.5×1.6		釘6本	II期9世紀前半
2	55	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX20西側溝C期	側板だけ	径20×1.7	サワラ	釘5本	9世紀前葉

第131図　釘結合円形曲げ物（2）



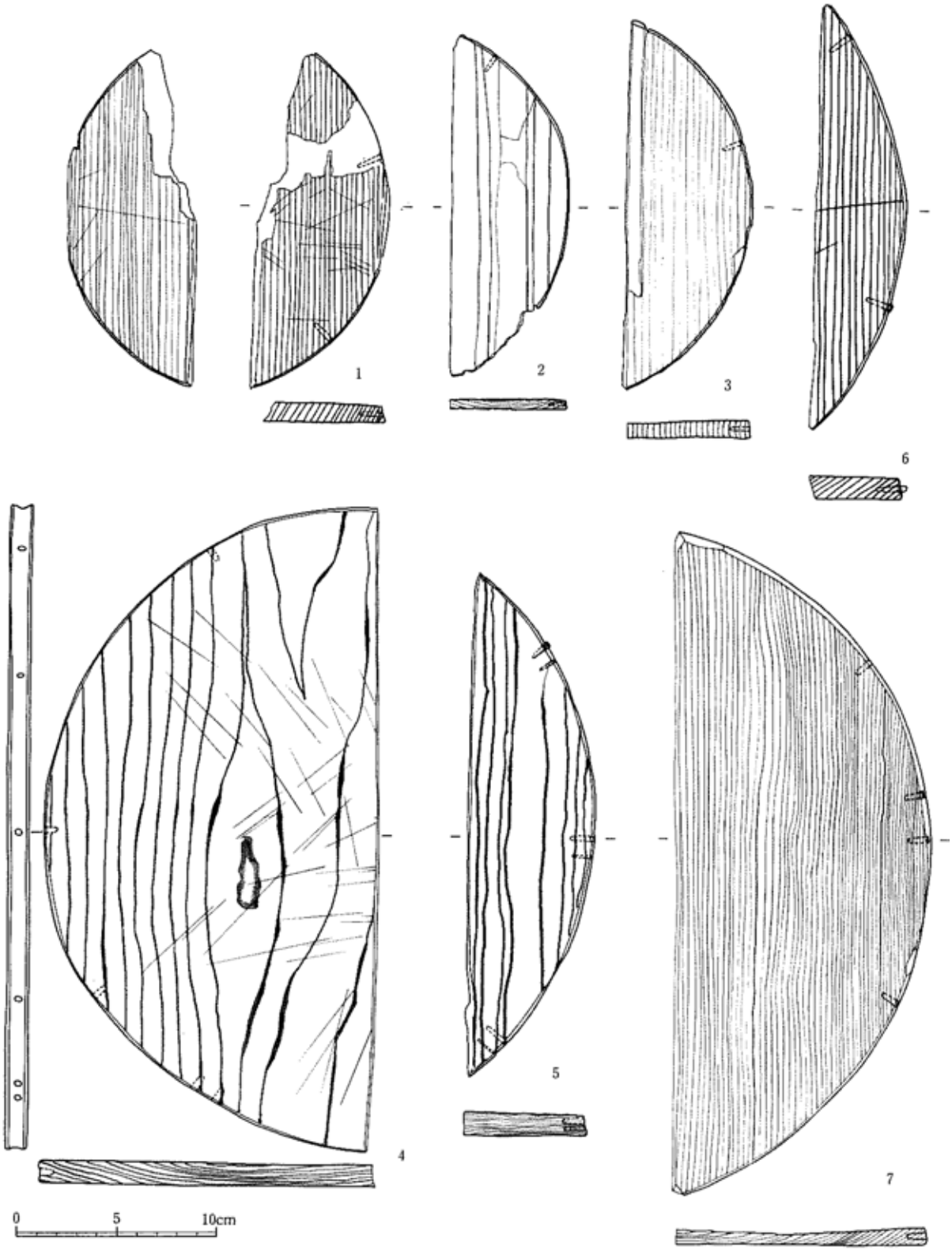
No	登録No	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計測値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	56	釘結合円形曲げ物	北1西3区	SK410　最下層	1/6底板		スギ		不明
2	57	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10路面　2層	1/2底板	径12×0.8	スギ	木釘2本残、内面に漆付着	9世紀後半
3	58	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10南側溝F期	1/3底板	径12×0.7	ヒノキ	内面に漆付着	10世紀前半
4	59	釘結合円形曲げ物	北1西3区	SE659井戸枠内	3/4底板	径12.5×0.7	モミ属	木釘3本、コンパス傷	II期9世紀前半
5	60	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10南側溝F期	1/2底板	径12.5×0.7	スギ	木釘痕4本、刃物傷	10世紀前半
6	61	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10路面　3層	1/5底板	径13.0×0.6	スギ		10世紀前葉
7	62	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10北側溝E期	1/6底板	径13×0.7	スギ		10世紀前葉以前
8	63	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX20西側溝C期	1/2底板	径13.5×0.7	スギ	木釘1本残	9世紀前半
9	64	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10北側溝E期	1/3	径13.8×0.7	モミ属	刃物傷	10世紀前葉以前
10	65	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX20西側溝G期	1/4底板	径13.7×0.6	スギ	釘1本残	10世紀前葉以後
11	66	釘結合円形曲げ物	河川跡	SD2000　9層	1/4	径13.5×1.2	ヒノキ？	釘1本残	9世紀中葉
12	67	釘結合円形曲げ物	北1道路	SX4013北側溝B期	1/4底板		スギ	面に漆付着	9世紀後半
13	68	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10北側溝E期	1/4底板	径15.0×1.1	スギ		10世紀前葉以前
14	69	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10南側溝F期	1/4底板	径15.0×1	サワラ		10世紀前半

第132図　釘結合円形曲げ物（3）



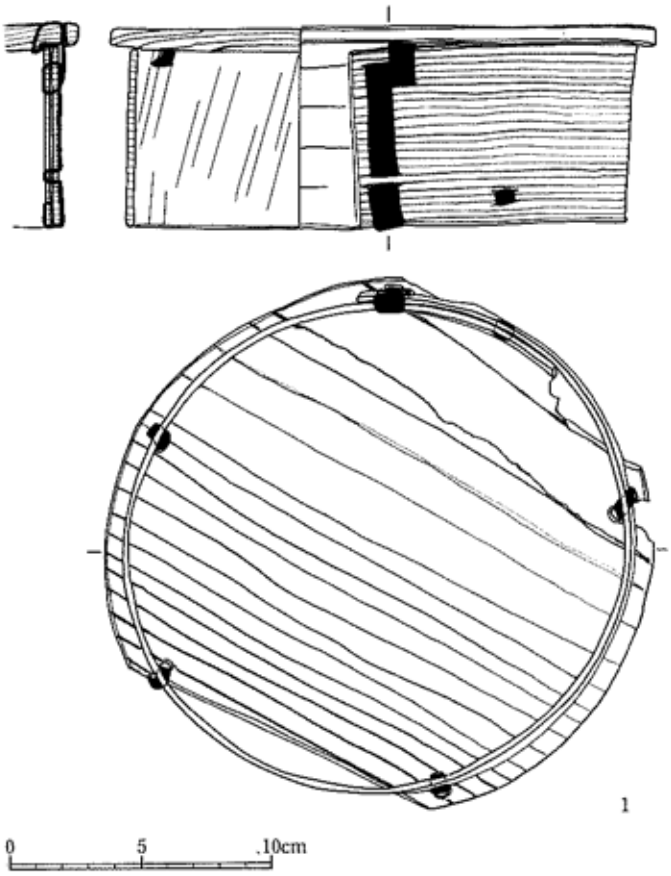
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	70	釘結合円形曲げ物	北1道路	SD4013 北側溝 B期	底板	径15×0.7	スギ	木釘3本、刃物傷	9世紀後半
2	71	釘結合円形曲げ物	河川跡	SD2000　8～10層	1/2	径15×0.9	ヒノキ	木釘1本、内面に部付着	9世紀代
3	72	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX30 西側溝 D期　杭	1/4底板	径15.5×0.6	ヒノキ	刃物傷	9世紀前葉？
4	73	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX20 西側溝 G期	1/6底板		ヒノキ		10世紀前葉以降
5	75	釘結合円形曲げ物	北1道路	SX4013 北側溝	1/2底板	径16.5×1	コウヤマキ		不明
6	76	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10 南側溝 H期	1/3底板	径17.0×0.7	ヒノキ	木釘1本	10世紀後半？
7	77	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX30 西側溝 C期	1/5	径16.5×0.6	ヒノキ	木釘1本	9世紀前葉
8	78	釘結合円形曲げ物	西2道路	SX20 東側溝 E期	1/4底板	径17×0.7	ヒノキ	木釘2本	10世紀前葉以前
9	79	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10 南側溝 E期	1/2底板	径17.5×1	スギ	木釘2本	10世紀前葉以前
10	80	釘結合円形曲げ物	北1西3区	1層	1/2底板		スギ		不明
11	81	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10 北側溝 D期	1/3底板	径18.5×1	スギ	木釘2本	9世紀前葉？
12	82	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10 北側溝 D期	1/2	径19×0.9	スギ	内面に部付着	9世紀前葉？
13	83	釘結合円形曲げ物	西1道路	SX1350 西側溝 D期	1/1底板	径20×1.2	サワラ	釘5本	10世紀前葉

第133図　釘結合円形曲げ物（4）



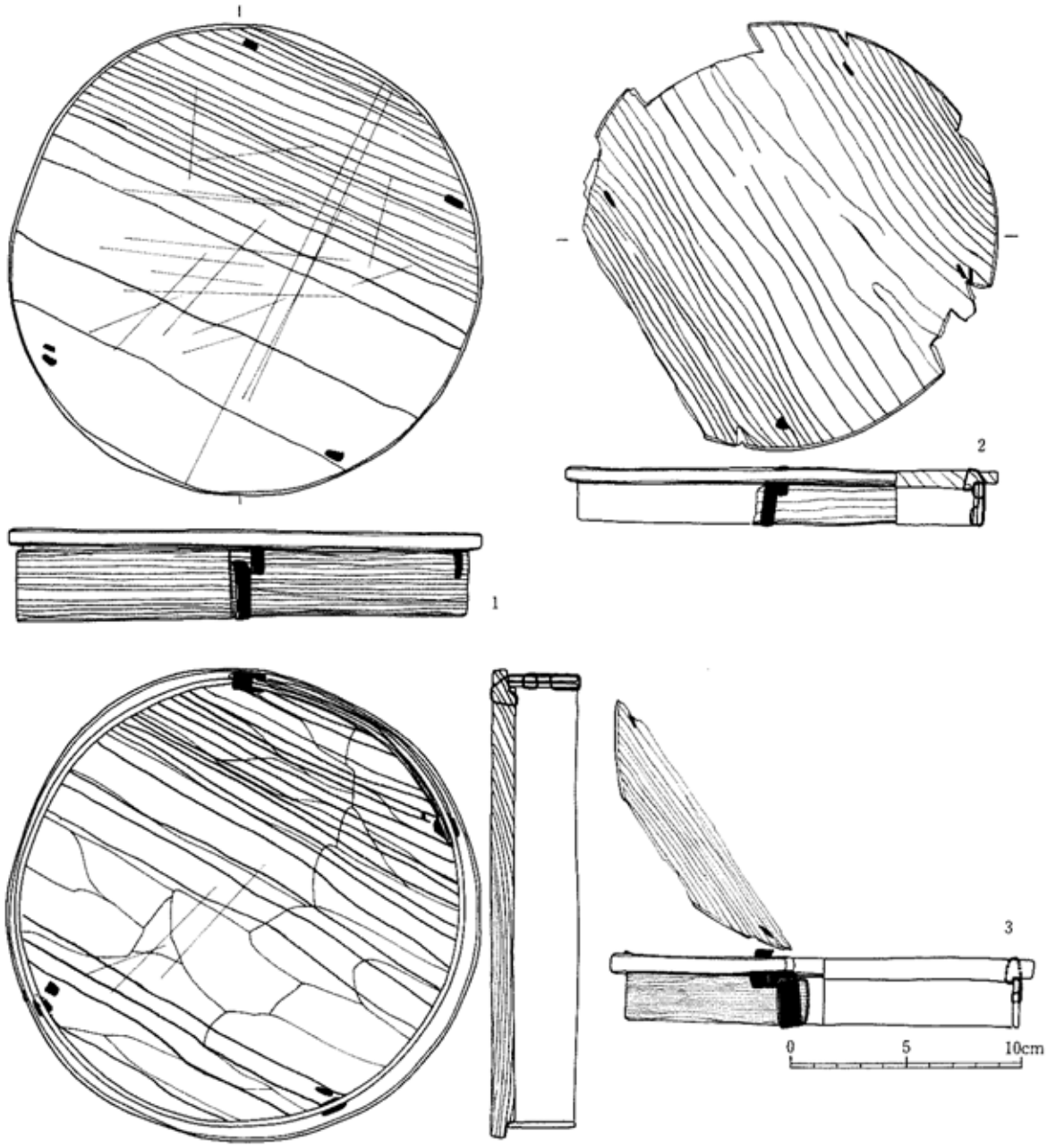
No	登録No	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計測値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	84	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10 南側溝 G 期	1/3底板	径19.5×1	ヒノキ	木釘２本、刃物傷	10世紀中頃？
2	85	釘結合円形曲げ物	東西大路	SX10 北側溝 F 期	1/2蓋板	径20×0.5	ヒノキ	木釘１本	10世紀前半
3	86	釘結合円形曲げ物	河川跡	SD2060　12 層	1/2	径21.5	スギ	木釘１本、内面に漆付着	９世紀初頭
4	87	釘結合円形曲げ物	南１西２区	SE2265　１層底面	1/2	径33×1	スギ	木釘５本、刃物傷	IV期９世紀後葉
5	88	釘結合円形曲げ物	西２道路	SX30 西側溝 B 期　柄	1/4底板	径35×1.1	ヒノキ属	作り直し、釘２本づつ計６	９世紀初頭
6	89	釘結合円形曲げ物	北１西３区	SE659　掘り方	1/4底板	径36×1.1	モミ属	木釘２本	II期９世紀前半
7	90	釘結合円形曲げ物	南１西２区	SB1086 柱穴 N1 E2	1/2 底板	径36×0.7	スギ	木釘４本磨板に転用	III期９世紀中葉

第134図　釘結合円形曲げ物（５）



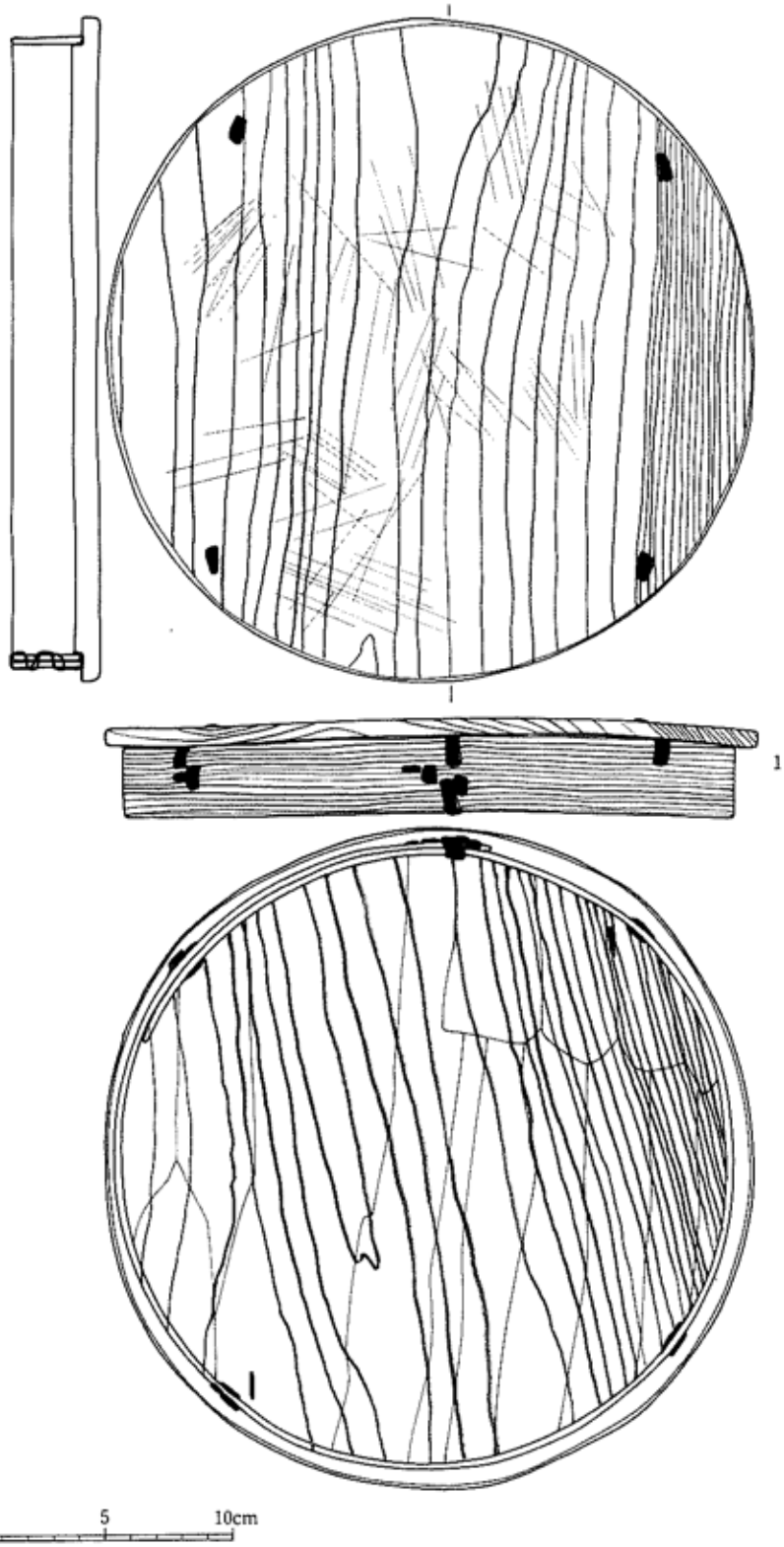
No	登録No.	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計測値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	91	樺皮結合円形曲げ物	北1道路	SX4012 北側溝 B 期	1/1	径21.5×8			9世紀後半

第135図　樺皮結合円形曲げ物（1）



No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	92	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SE2265　1層直面	1/1	径21×4	スギ	内外面に刃物傷	Ⅳ期9世紀後葉
2	93	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SE2265	1/1	径19×2.5	サワラ		Ⅳ期9世紀後葉
3	94	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SK3023　3層	1/5	径19×3	ヒノキ		Ⅲ期9世紀中葉？

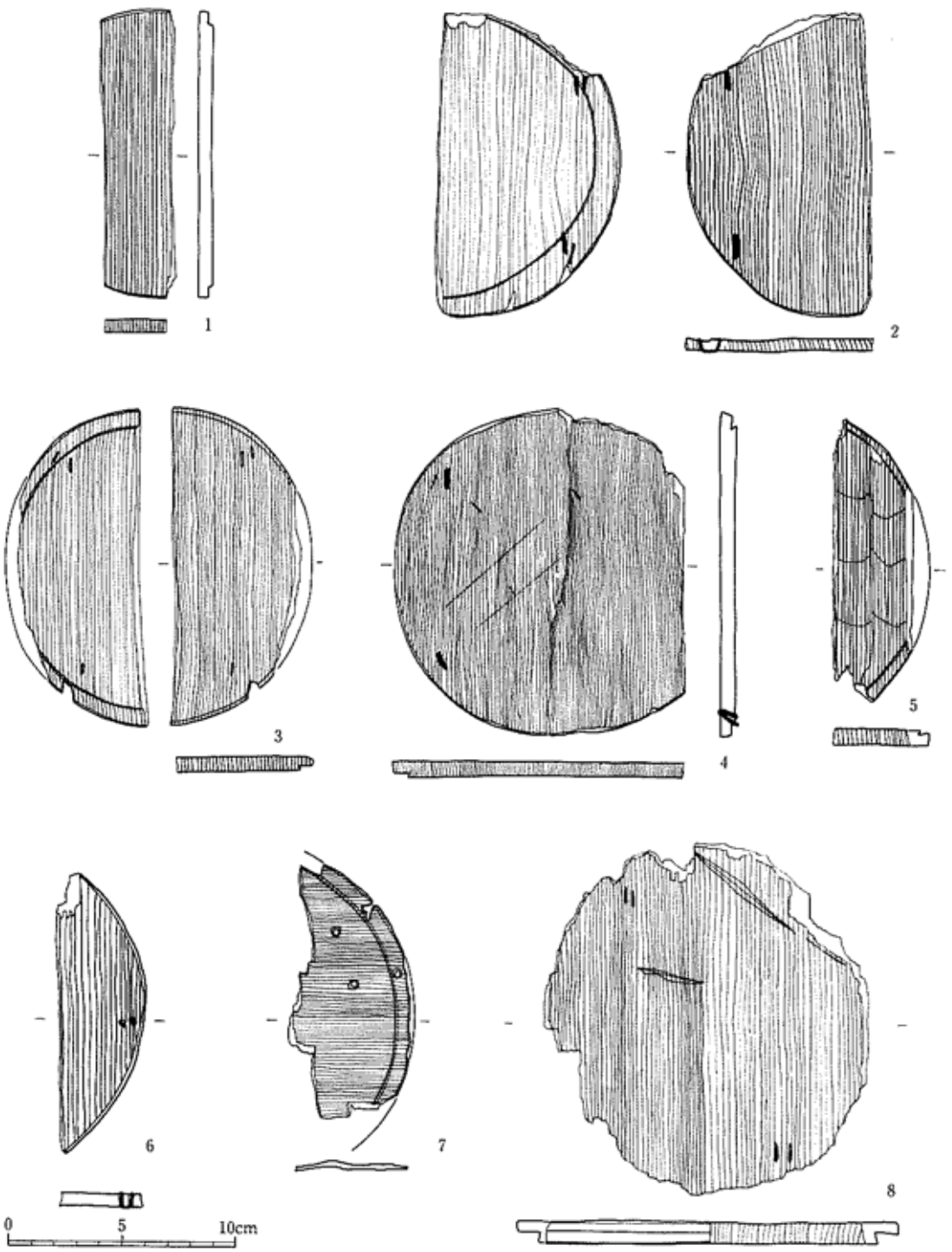
第136図　樺皮結合円形曲げ物（2）



16

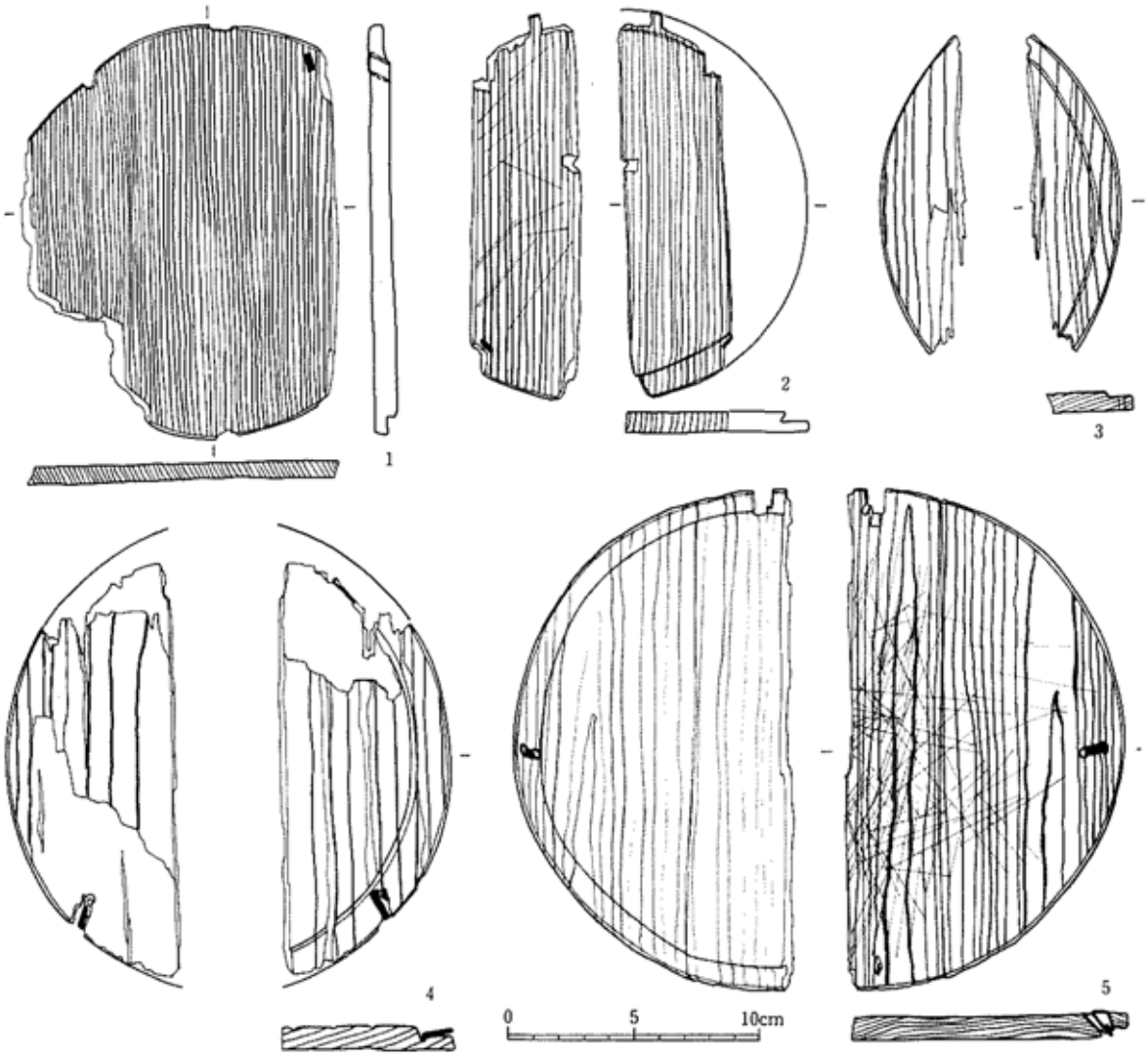
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	95	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SE2265　2層	1/1	径26×4		外面底部に刃物傷	IV期9世紀後葉

第137図　樺皮結合円形曲げ物（3）



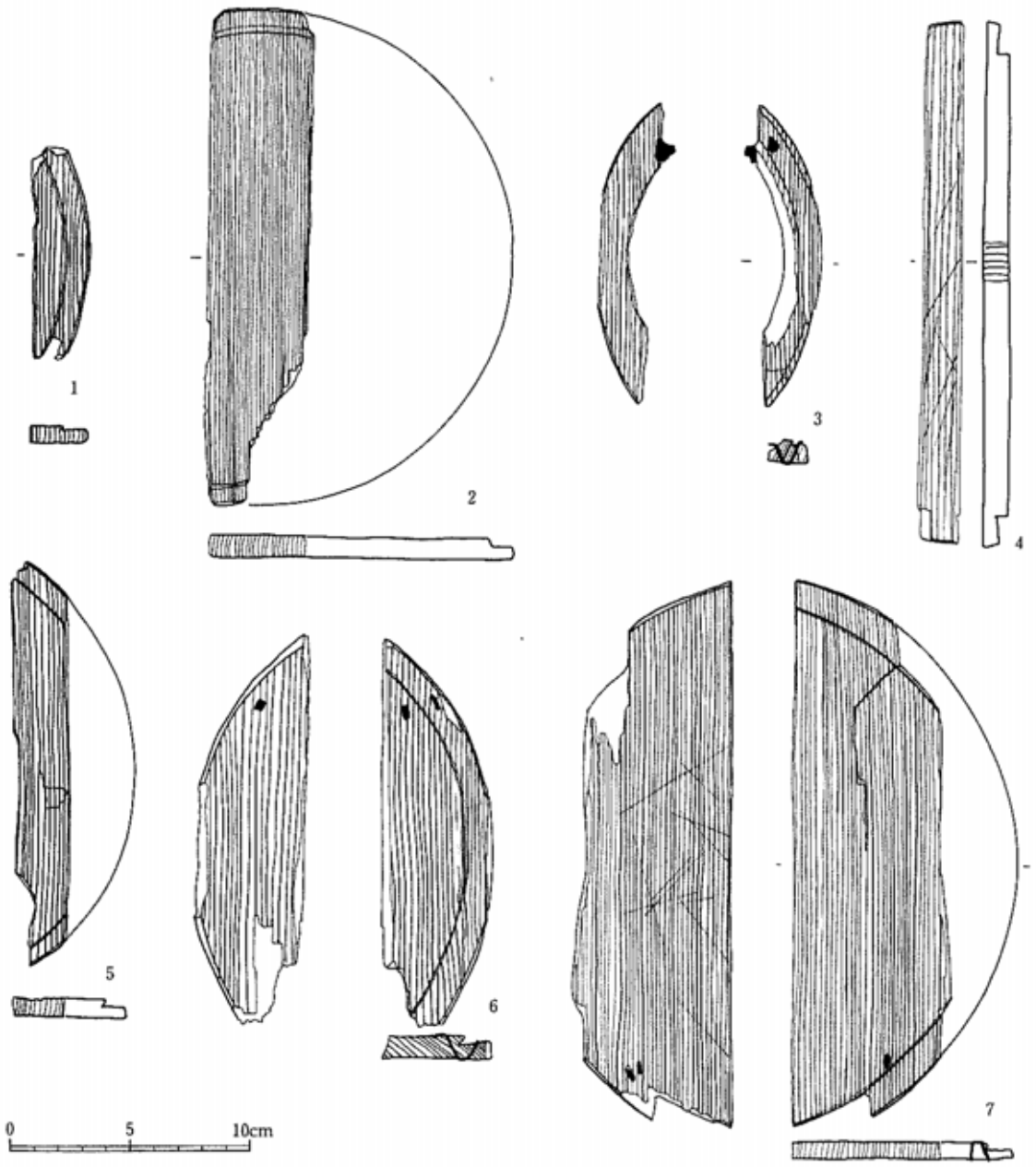
No	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	96	樺皮結合円形曲げ物	北1道路	SX4012 北側溝 B 期	1/4蓋板	径13×0.5	スギ		9世紀後葉
2	97	樺皮結合円形曲げ物	北1道路	SX4013 北側溝 B 期	2/3	径15×0.5	モミ属		9世紀後葉
3	98	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SK3023　3層	1/2蓋板	径14.5×0.7	スギ		III期9世紀中葉？
4	99	樺皮結合円形曲げ物	河川跡	SD2000　6層	4/5	径15×0.8	ヒノキ		10世紀前半
5	100	樺皮結合円形曲げ物	西2道路	SX20 西側溝 C 期	1/4蓋板	径15.5×0.7	スギ		9世紀前半
6	101	樺皮結合円形曲げ物	北1西3区	SK579　3層	1/4蓋板	径15.5×0.3	アスナロ		4群10世紀前葉
7	102	樺皮結合円形曲げ物	北1道路	SX4013 北側溝 B 期	1/4蓋板	径15.5×0.3	ヒノキ科		9世紀後葉
8	103	樺皮結合円形曲げ物	北1道路	SX4013 北側溝 B 期	8/10蓋板	径15.5×1	ヒノキ属		9世紀後葉

第138図　樺皮結合円形曲げ物（4）



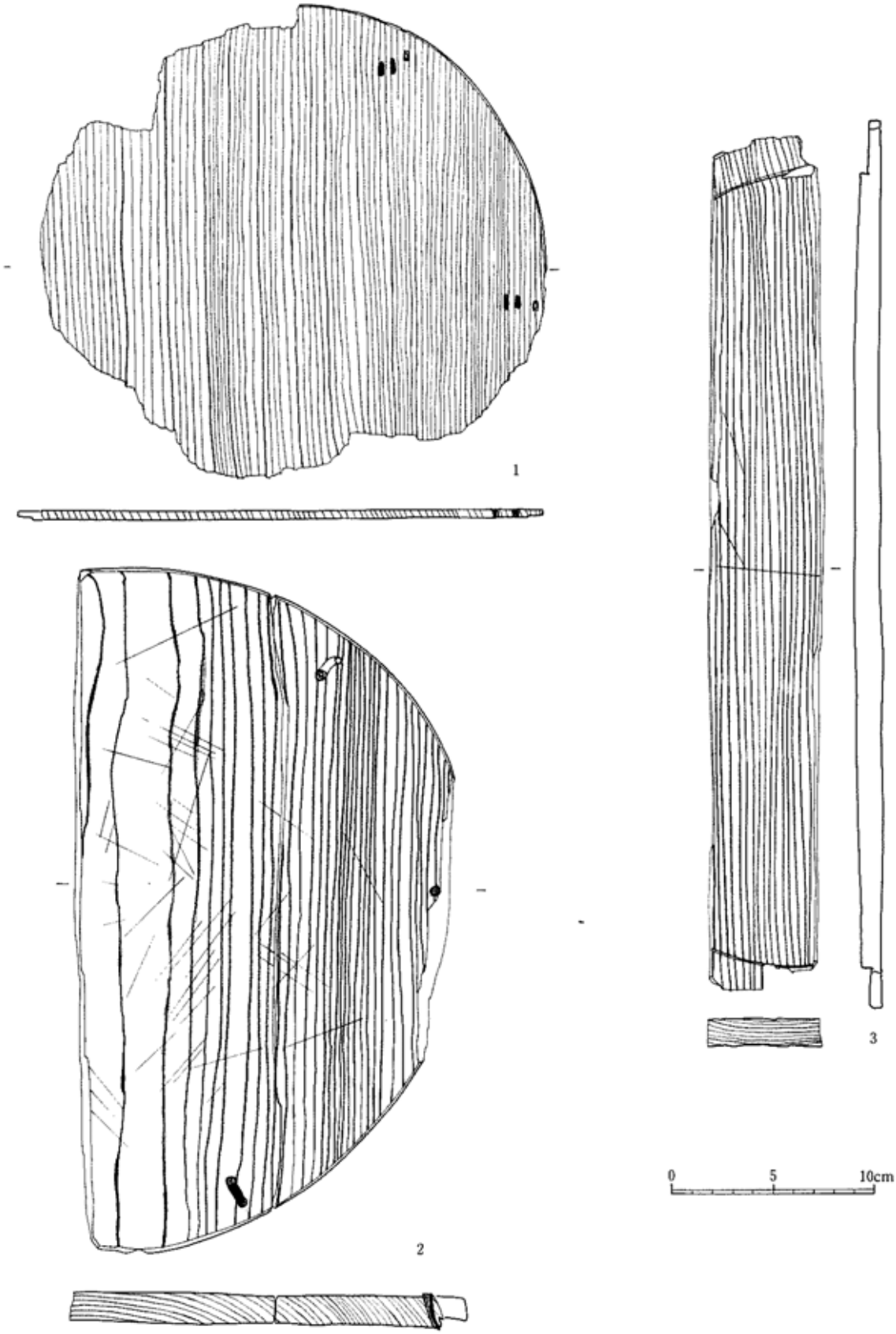
No	登録No	種　別	地 区	遺 構・層 位	残 存	計 測 値	樹 種	備　考	時期・年代
1	0104	樺皮結合円形曲げ物	東西大路	SX10 南側溝 E 期	3/4蓋板	径17×1			10世紀前葉以前
2	0105	樺皮結合円形曲げ物	河川跡	SD2000　11 層	1/5蓋板	径19.5×0.8	ヒノキ		9 世紀初頭
3	0106	樺皮結合円形曲げ物	南 3 東 1 区	SD3625　2 層	1/3蓋板	径20×1	ヒノキ		9 世紀後半
4	0107	樺皮結合円形曲げ物	東西大路	SA309　しがらみ	1/2蓋板	径21×1	ヒノキ	上面に刃物傷	
5	0118	樺皮結合円形曲げ物							不明

第139図　樺皮結合円形曲げ物（5）



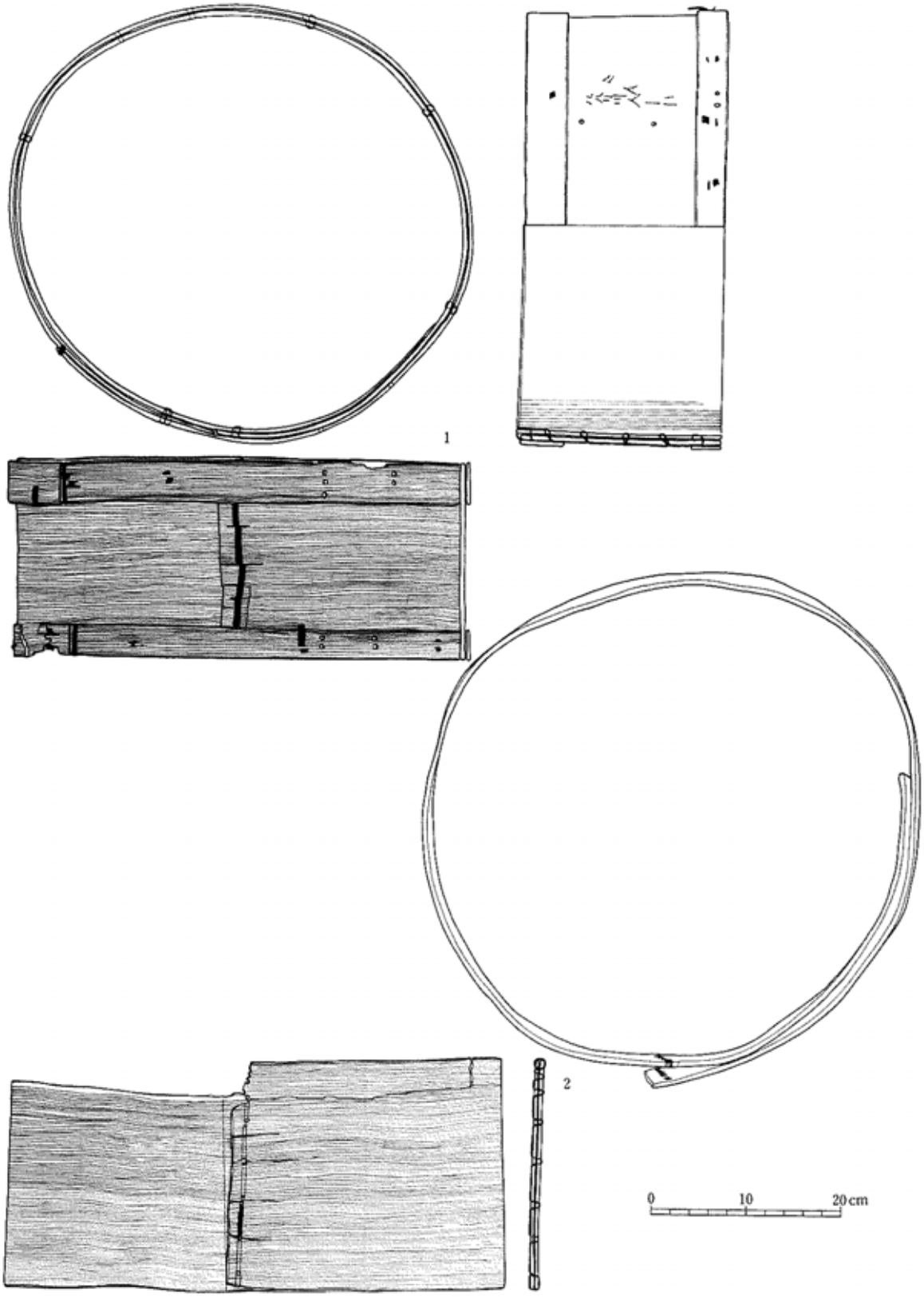
No	登録No.	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計測値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	0108	樺皮結合円形曲げ物	西２道路	SX30 西側溝 G 期	1/10蓋板	径20.5×0.7	ヒノキ		10世紀中頃？
2	0109	樺皮結合円形曲げ物	北１道路	SD4014 西側溝 B 期	1/5底板	径21.5×1	ヒノキ科		9世紀後葉
3	0110	樺皮結合円形曲げ物	北１西３区	SK410	1/10蓋板	径21.5×1.0	スギ		不明
4	0111	樺皮結合円形曲げ物	南１西２区	SD1020　深堀	1/20蓋板	径22.5×1	スギ		不明
5	0112	樺皮結合円形曲げ物	西２道路	SX30　付近	1/5底板	径21.5×0.9	アスナロ		不明
6	0113	樺皮結合円形曲げ物	北１西３区	SK410	1/4 蓋板	径25.0×1	スギ		不明
7	0114	樺皮結合円形曲げ物	東西大路	SX10 北側溝 D 期	1/3	径25×0.8	モミ属	刃物傷	9世紀前半？

第140図　樺皮結合円形曲げ物（６）



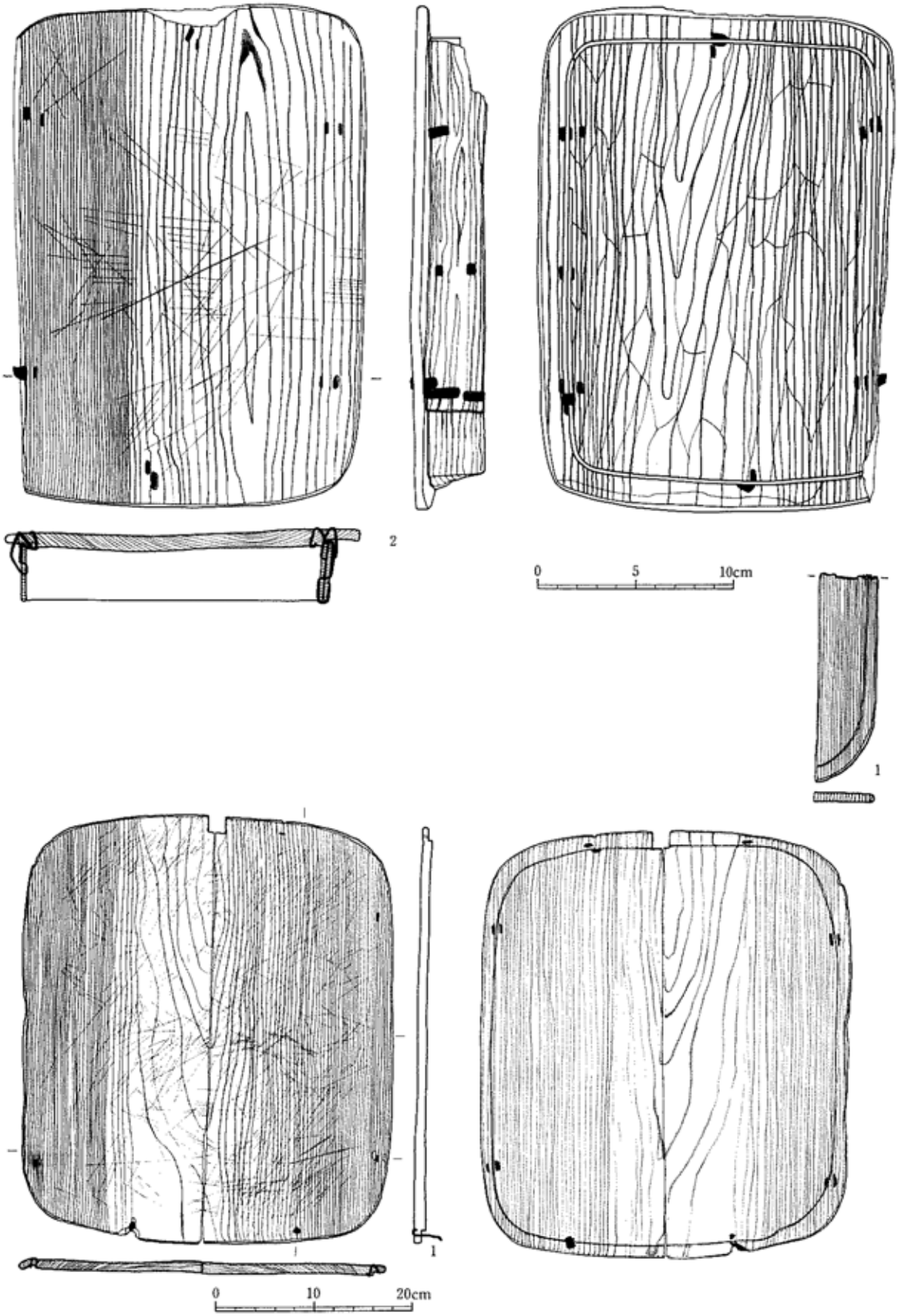
No.	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0115	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SD1020A 期	3/4蓋板	径26×0.5	切取不能		2群9世紀前半
2	0116	樺皮結合円形曲げ物	東西大路	SX10 南側溝C期	1/2蓋板	径34.5×1.5	ヒノキ	上面に刃物傷	9世紀前半
3	0117	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SD1020A 杭	1/10蓋板	径45×1	モミ属		2群9世紀前半

第141図　樺皮結合円形曲げ物（7）



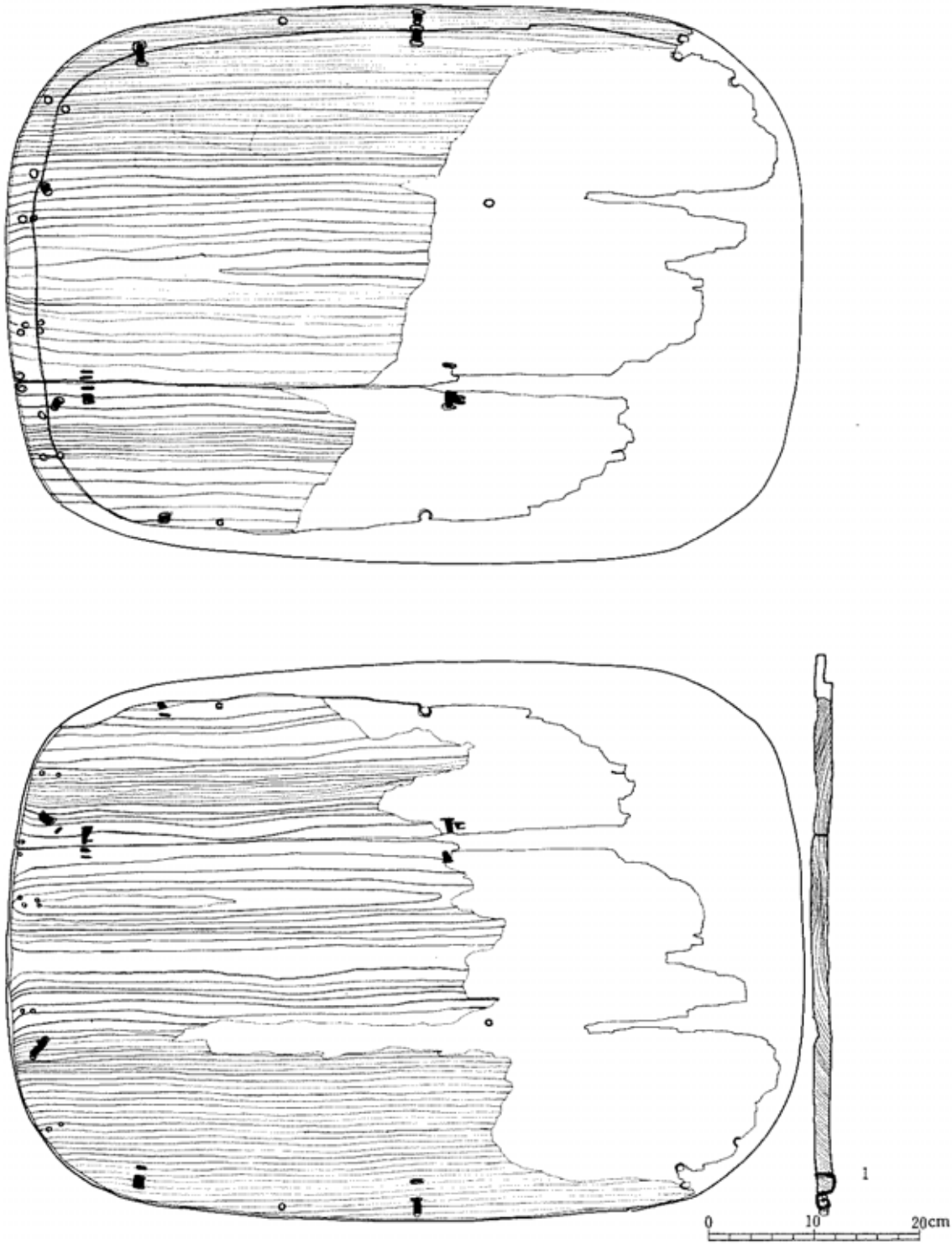
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0135	樺皮結合円形曲げ物	南1西2区	SE2265	1/1側板だ	径45×21	ヒノキ科		IV期9世紀後葉
2	0137	円形曲げ物	北1西3区	SE864b	側板だけ	径55×40	ヒノキ		

第142図　井戸枠円形曲げ物



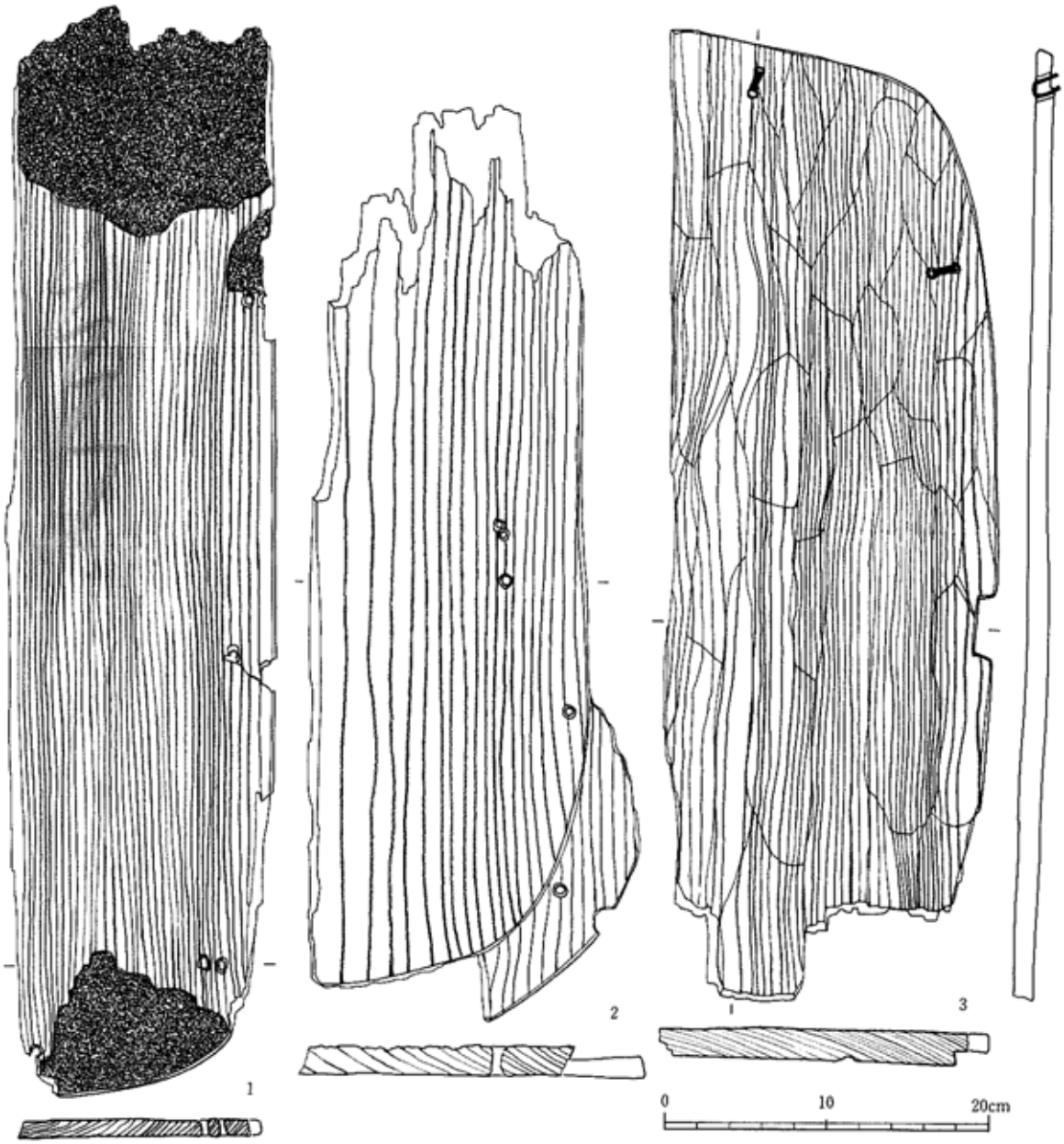
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0128	長方形曲げ物	N-2	SX10 北側溝 B 期	底板小破		ヒノキ		9世紀初頭
2	0129	長方形曲げ物	南1西2区	SE2265　1層底面	1/1	径27×18×4		刃物傷	IV期9世紀後葉
3	0130	長方形曲げ物	北1西3区	SE659	1/1 蓋板	径39×45×3	モミ属	刃物傷　井戸枠転用	II期9世紀前半

第143図　樺皮結合長方形曲げ物



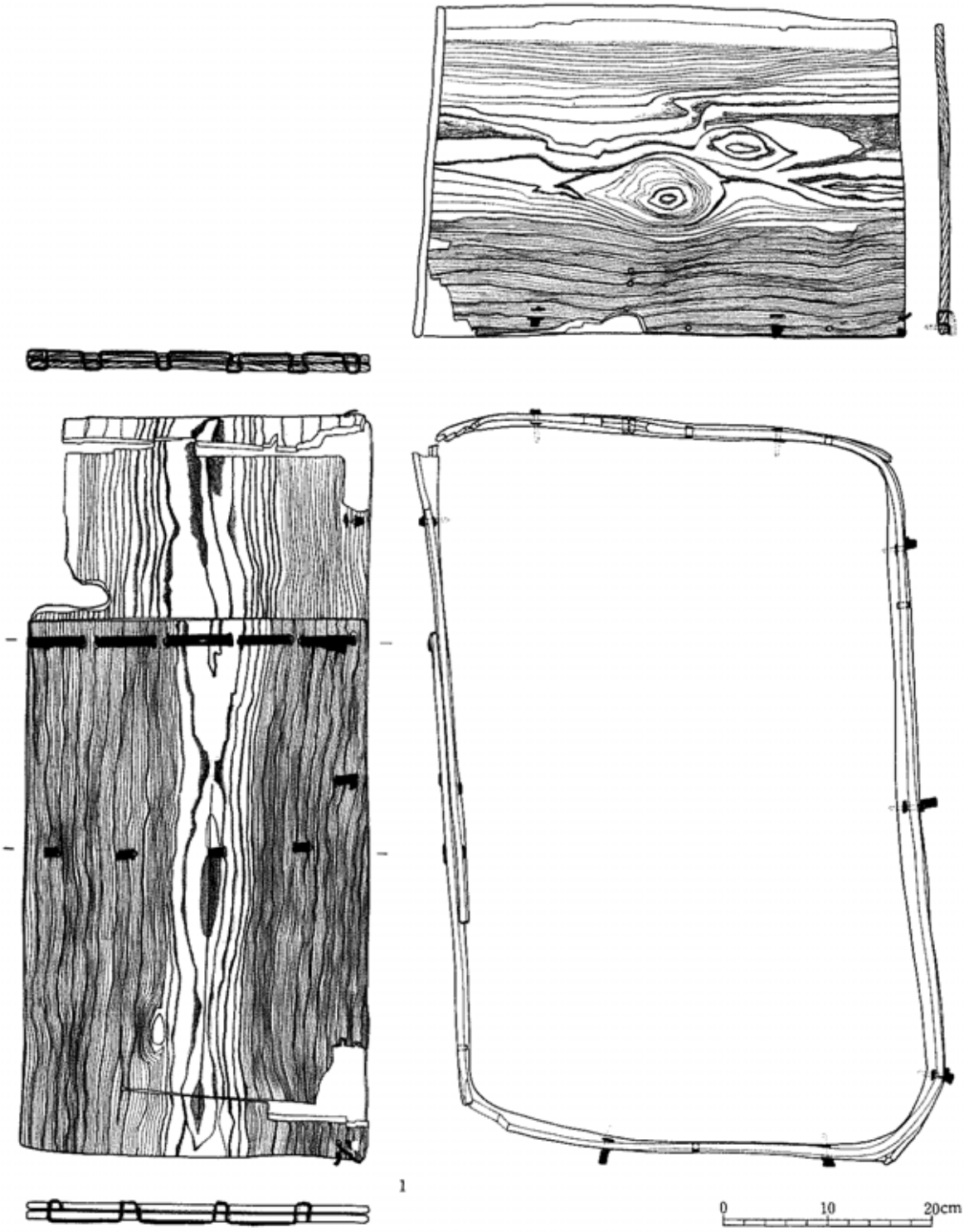
No	登録No	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計 測 値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	0131	楕円形曲げ物	北1西3区	SE659	3/4	径75×53×3	ヒノキ	補修痕　井戸枠転用	II期9世紀前半

第144図　樺皮結合楕円形曲げ物（1）



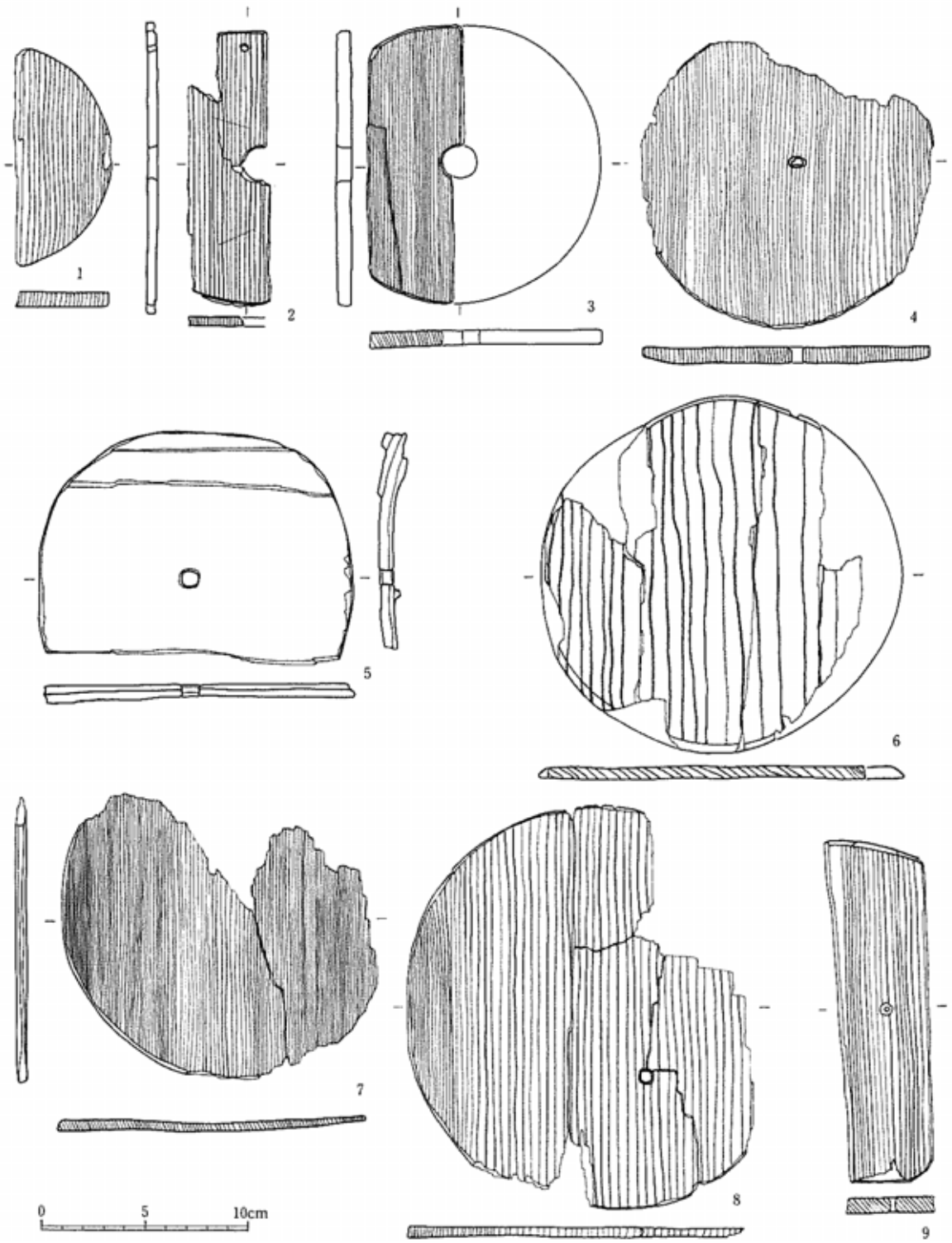
No	登録No	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計 測 値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	0132	楕円形曲げ物	南1西2区	SD1020B　土壙	1/4	径50×12×0.5	ヒノキ	両端焼け	10世紀前半
2	0133	楕円形曲げ物	北1西3区	SE502	1/4 部板	径47×17×1.5			5群10世紀
3	0134	楕円形曲げ物	北1西3区	SE892　8層	3/5蓋板	径45×16×1.5	モミ属	底面に加工痕跡	1期8世紀後半

第145図　樺皮結合楕円形曲げ物（2）



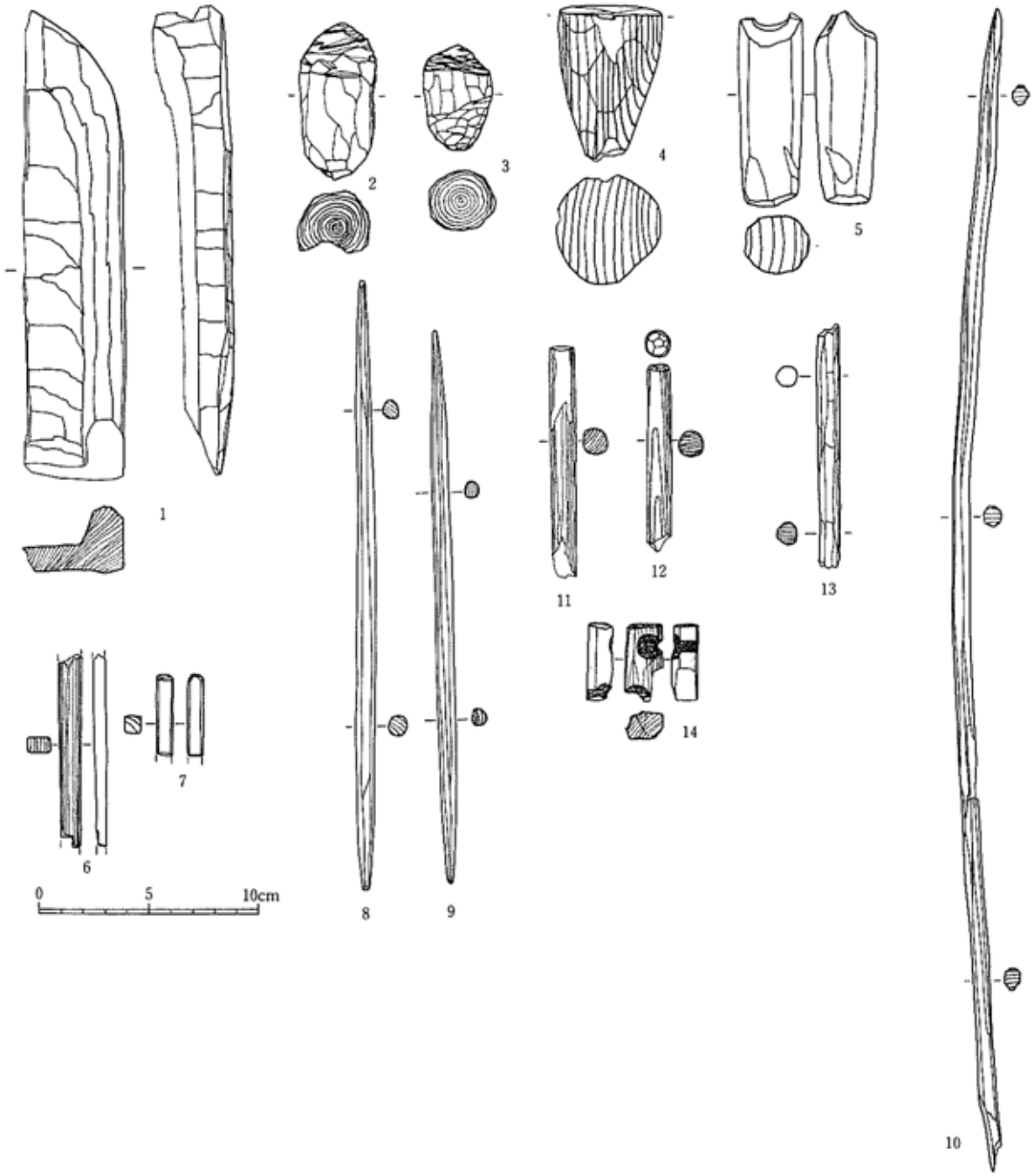
No.	登録No.	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0135	長方形曲げ物	南1西2区	SE50	側板のみ	径70×20×3		井戸枠側板に転用	4群15世紀前葉

第146図　井戸枠長方形曲げ物



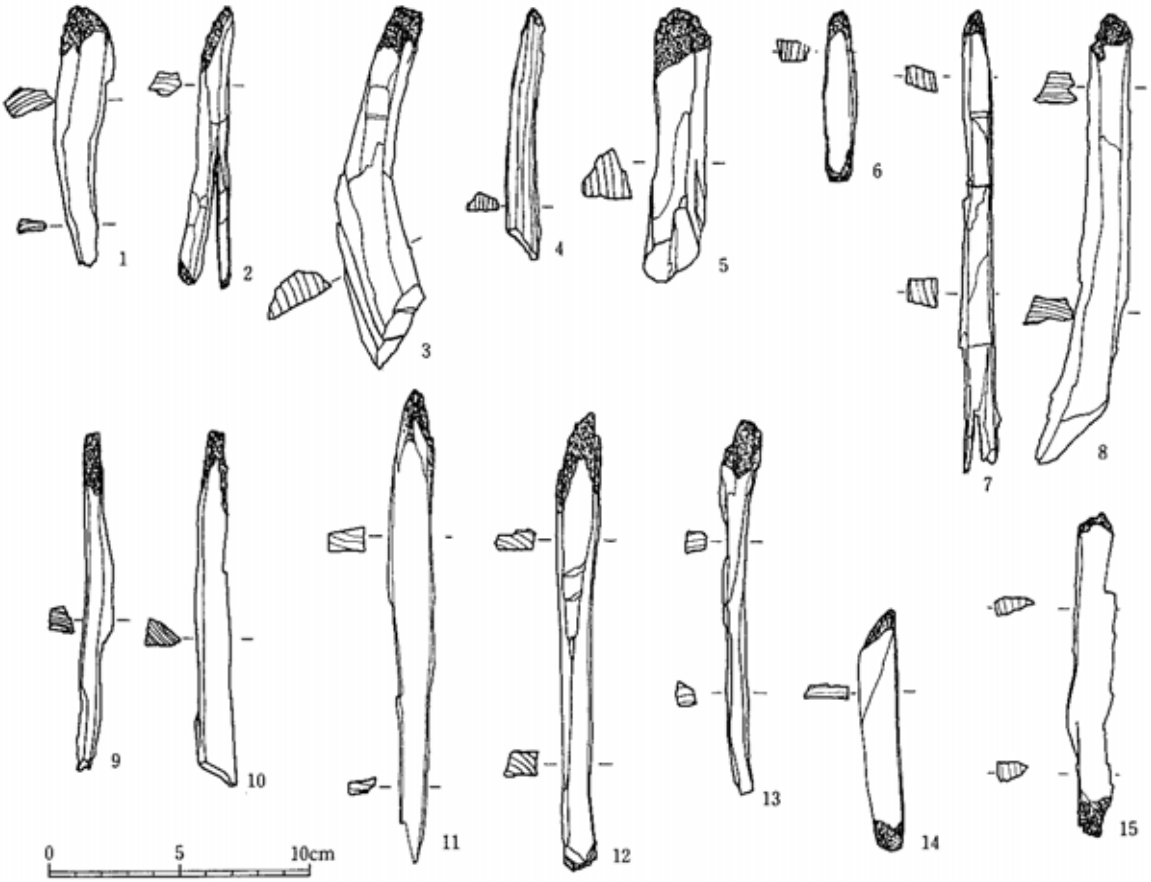
No.	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0119	蓋板	南2西1区	SK1748　7層	1/2	径11×5×0.5	サワラ		不明
2	0120	蓋板	東西大路	SX10北側溝F期	1/4		サワラ	穿孔　曲げ物転用	10世紀前葉
3	0121	蓋板	西2道路	SX20E西側溝E期	1/2	径14.5×1	サワラ？	真中に孔あり	10世紀前葉以前
4	0122	蓋板	西1道路	SX1350西側溝D期	3/4	径15×1	ケヤキ	中央に孔	10世紀前葉
5	0123	蓋板	河川跡	SD2000　4層か	2/3	径18×0.5	モミ属	中央に孔	10世紀中葉
6	0124	蓋板か	河川跡	SD2000　6層	3/4	径18×0.3	モミ属		10世紀前半？
7	0125	蓋板	南1西2区	SE50　1層井戸枠外側抜き	3/4	径18×0.5	切片給失		4群10世紀前葉
8	0126	蓋板	南1西2区	SE2267　1層井戸内抜き	3/4	径20×0.5	スギ	中央に孔	廃期9世紀中葉
9	0127	蓋板	東西大路	SX10北側溝D期	1/4		モミ属	中に孔　再加工	9世紀前葉？

第147図　蓋板



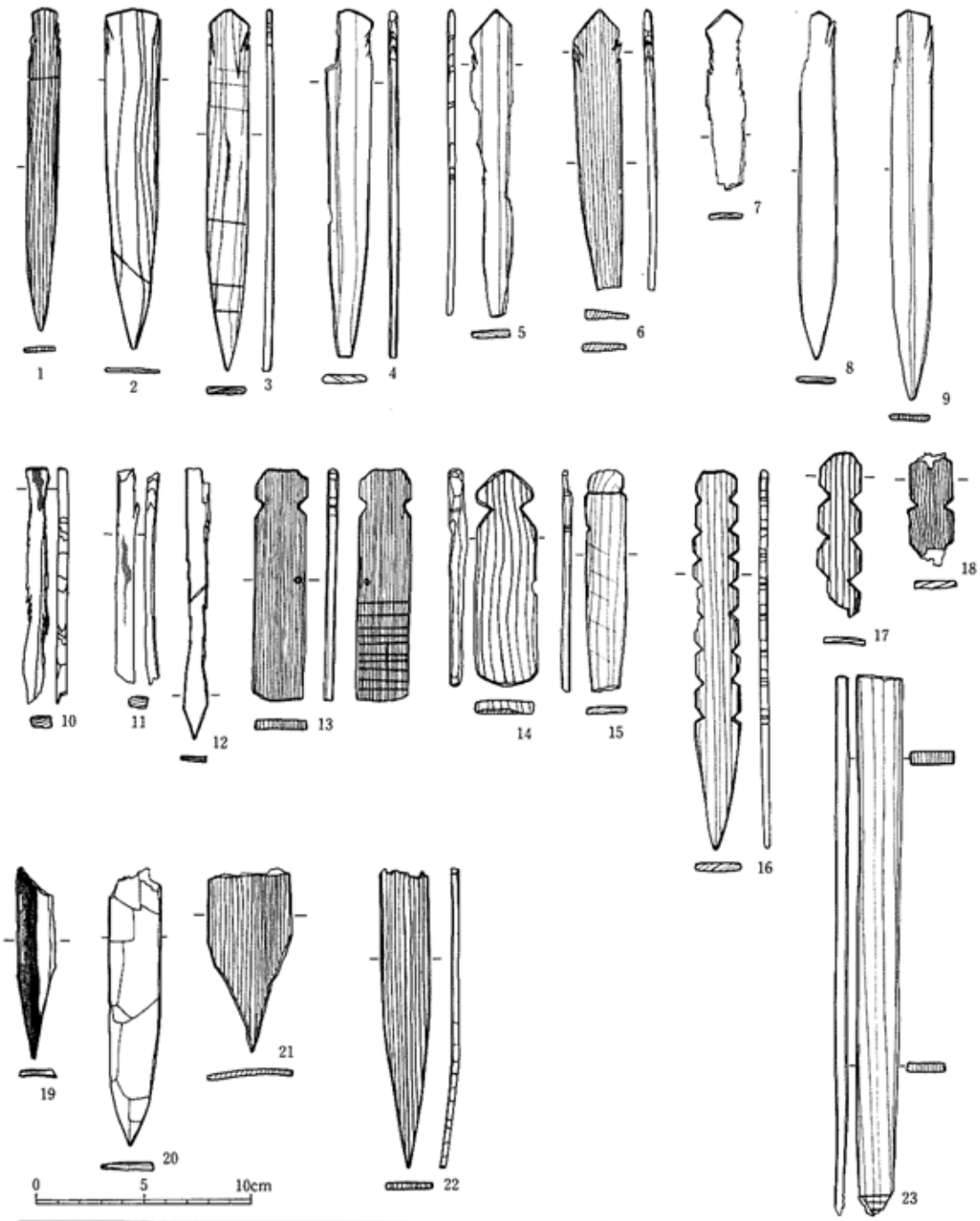
№	登録№	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	0170	くり物	南3東1	SD3702	1/2	22.5×3.5	ヒノキ		8世紀前半
2	0171	栓	北1西3	SI560　2層		7.5×3.5	コナラ属コナラ節		3群9世紀後半
3	0172	栓	北1道路	SX4012 北側溝B期		5×3	コナラ属コナラ節		9世紀後半
4	0173	栓	南1西2	SD1240　5層		5×7	コナラ属コナラ節		5群10世紀
5	0174	栓？	南1西2	SA1402		9×3	ヒノキ科		
6	0175	角箸？	河川跡	SD2600　9層		9×1×0.5	ムラサキシキブ		9世紀中葉？
7	0176	角箸？	河川跡	SD2600　7層		4×0.8×0.8	スギ		9世紀後半？
8	0178	箸	東西大路	SX10 北側溝D期		26×0.7	スギ	両端黒く変色	9世紀前葉？
9	0178	箸	東西大路	SX10 北側溝D期		29×1	サワラ	両端黒く変色	9世紀前葉？
10	0179	火鑽弓	河川跡	SD2600　11層		55×径1	スギ		9世紀初頭
11	0180	火きり杵軸棒	南3東1区	SD3625		11×1	スギ		9世紀後半
12	0181	火きり杵軸棒	南3東1	SD3625		8.5×1.1	ヒノキ		9世紀後半
13	0182	火きり杵	東西大路	SX10 北側溝D期		11×1	ヒノキ		9世紀前葉？
14	0183	火きり臼	西2道路	SX20 路面3層		3.7×1.7×1.5	サワラ	火熨内炭化	10世紀前葉

第148図　栓・箸・発火具



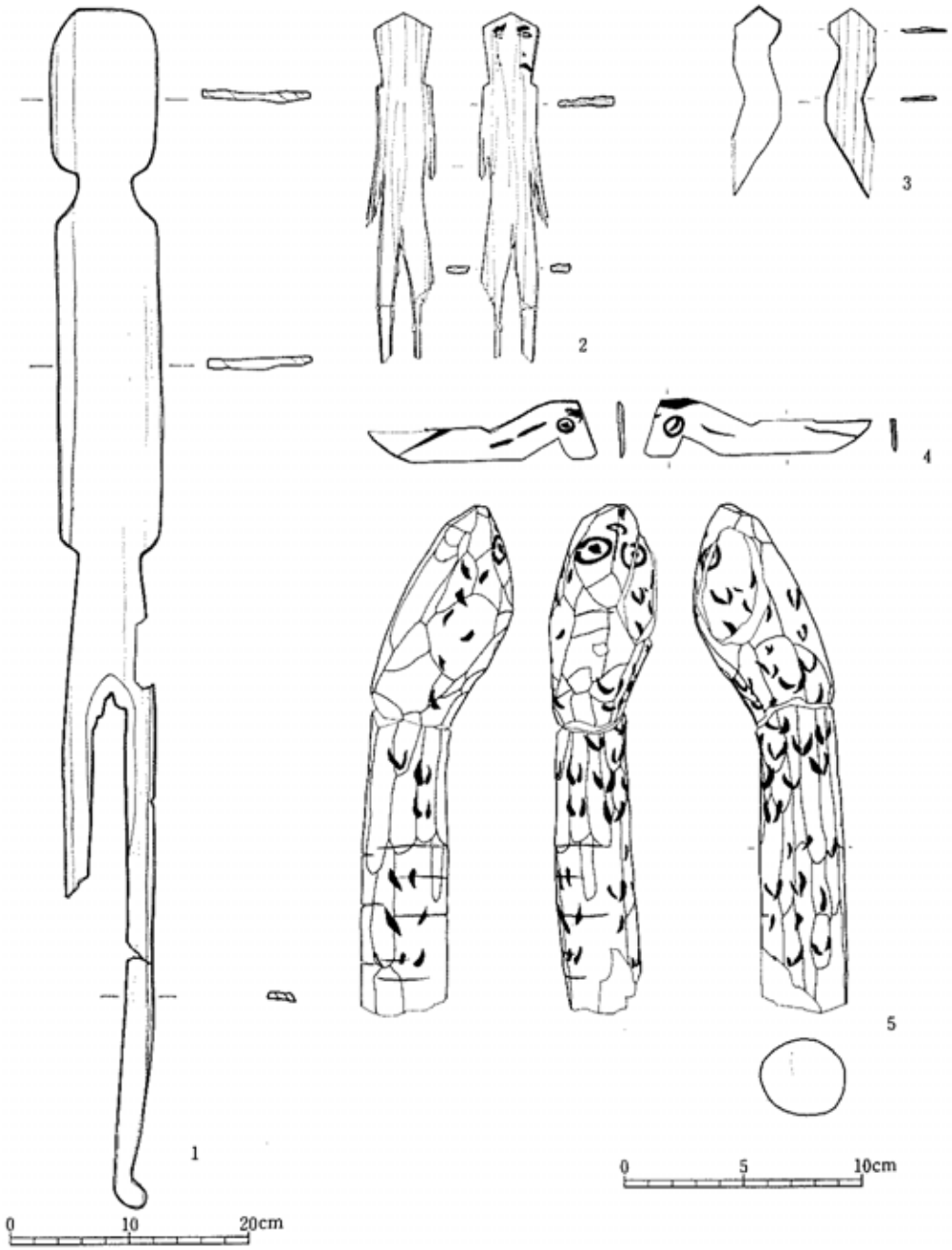
№	登録№	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	0184	手火（つけ木）	西２道路	SX20 路面3層		10.5×2×1	マツ属		10世紀前葉
2	0185	手火（つけ木）	西２道路	SX20 路面3層		11.5×1.2	クロマツ		10世紀前葉
3	0186	手火（つけ木）	西２道路	SX20 西側溝		14×3×1.5	アカマツ		不明
4	0187	手火（つけ木）	西２道路	SX20 西側溝 F 期		10×1×1	マツ属		10世紀前葉
5	0188	手火（つけ木）	東西大路	SX10 北側溝 B 期		11×2.2×2	クロマツ		９世紀初頭？
6	0189	手火（つけ木）	西２道路	SX20 西側溝 I 期		6.5×1.2	アカマツ	両端が焦げている	10世紀後半？
7	0190	手火（つけ木）	西２道路	SX20 西側溝 C 期		18.5×1.5	アカマツ		９世紀前半
8	0191	手火（つけ木）	北１西３区	SK410		18×2×1	クロマツ		不明
9	0192	手火（つけ木）	北１西３区	SE502　1層		13.5×1×1	クロマツ		５群10世紀
10	0193	手火（つけ木）	北１西３区	SE502　1層		14×1.5×1	アカマツ		５群10世紀
11	0195	手火（つけ木）	南１西２区	SK3023　3層		19×1.5×1	アカマツ	末端に焦げ目	Ⅲ期９世紀中葉？
12	0196	手火（つけ木）	河川跡	SD2000　9層			アカマツ	両端が焦げている	９世紀中葉？
13	0197	手火（つけ木）	河川跡	SD2000　11層			アカマツ		９世紀初頭
14	0198	手火（つけ木）	河川跡	SD2000　4層			マツ属	両端が焦げている	10世紀中葉
15	0199	手火（つけ木）	河川跡	SD2000　12層			アカマツ		９世紀初頭？

第149図　付け木



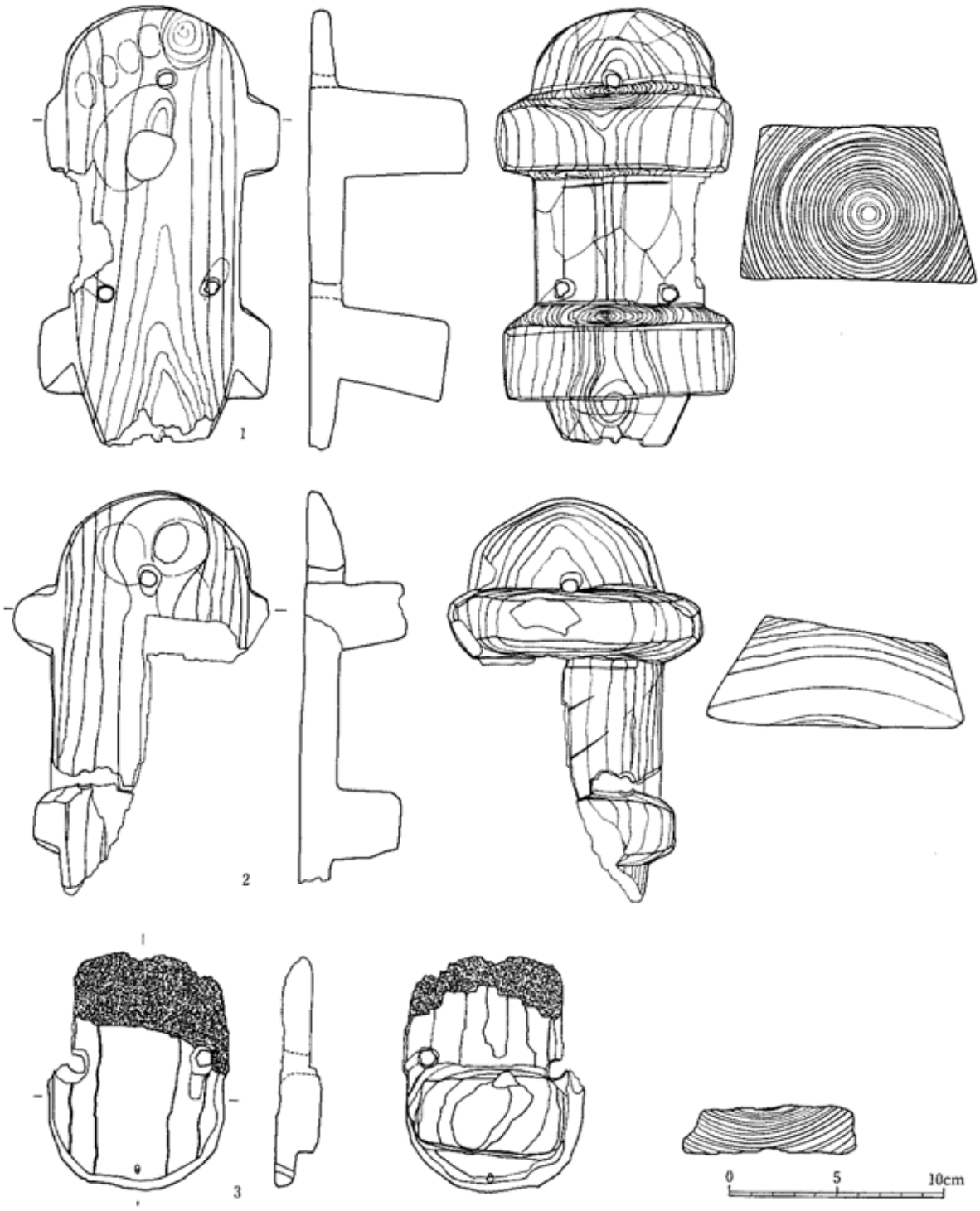
No.	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0138	斎串	東西大路	SX10 北側溝 D 層	1/1	16×1.5×0.3			9 世紀前半？
2	0139	斎串	北 1 西 3 区	SE659　掘り方	1/1	16.5×2.5×0.1	スギ		II期 9 世紀前半
3	0140	斎串	北 1 西 3 区	SE864b　2 層	1/1	17.5×2×0.3	モノキ	ケビキあり（曲げ物側板転用）	I 期 8 世紀後半
4	0141	斎串	南 1 西 2 区	SE2265　1 層	1/1	17×2×0.5	モミ属		IV期 9 世紀後半
5	0142	斎串	南 1 西 2 区	SE2265　1 層	3/4	15×2×0.3	スギ		IV期 9 世紀後半
6	0143	斎串	南 1 西 2 区	SE2265	3/4	13.5×2×0.3	サワラ	基部欠損	IV期 9 世紀後半
7	0144	斎串	南 3 東 1 区	SE1606　4 層	1/3	9×2×0.3	モミ属	基部欠損	
8	0145	斎串	河川跡	SD2000　11 層	1/1	17×2×0.3			9 世紀初頭
9	0146	斎串	河川跡	SD2000　9 層	1/1	19×2×0.3			9 世紀後半
10	0147	斎串	南 1 西 2 区	SE2265　1 層	1/1	11.5×1×0.5	サワラ	線付き（線器破片転用）	IV期 9 世紀後半
11	0148	斎串	南 1 西 2 区	SE2265　1 層		11.5×1×0.5	サワラ	線付き（線器破片転用）。頭・基部欠	IV期 9 世紀後半
12	0149	斎串	河川跡	SD2000　11 層		13×1.2×0.3	モノキ	頭部欠損	9 世紀初頭
13	0150	斎串	南 1 西 2 区	SE2265　2 層	1/2	11×2.5×0.5	スギ	木釘孔・ケビキあり（曲物側板転用）	IV期 9 世紀後半
14	0151	斎串？	河川跡	SD2000　11 層	1/1	10.5×3×0.5	クリ	木簡の可能性もある	9 世紀初頭
15	0152	斎串	北 1 西 3 区	SE864b　2 層		11×2×0.3	モノキ	基部欠損	I 期 8 世紀後半
16	0153	斎串	南 1 西 2 区	SE2265	1/1	18.5×2×0.3	モノキ	刻み目 8 列	IV期 9 世紀後半
17	0154	斎串	河川跡	SD2000　12 層		8×2.3×0.3	モノキ	基部欠損	8 世紀中～9 世紀初
18	0155	斎串	北 1 西 3 区	SE659　枠内2層	1/4	5.2×2.1×0.3	スギ		II期 9 世紀前半
19	0156	斎串	北 1 西 3 区	SK579　1 層		9.5×2.0×0.4	モミ属	頭部欠損	4 期10世紀前葉
20	0157	斎串	南 1 西 2 区	SE2267　1 層	2/3	13×2.5×0.3	モミ属	頭部欠損	III期 9 世紀中葉
21	0158	斎串	南 1 西 2 区	SK3023　3 層		8.5×4.2×0.3	モノキ科	頭部欠損。曲物側板を転用	III期 9 世紀中葉
22	0159	斎串	河川跡	SD2000　6 層		15.0×2.0×0.3	モノキ	頭部欠損。	10世紀前葉
23	0160	斎串？	南 3 東 1 区	SE1606　4 層		26.5×2.2	モノキ	頭部欠損	4 期10世紀前葉

第150図　斎串



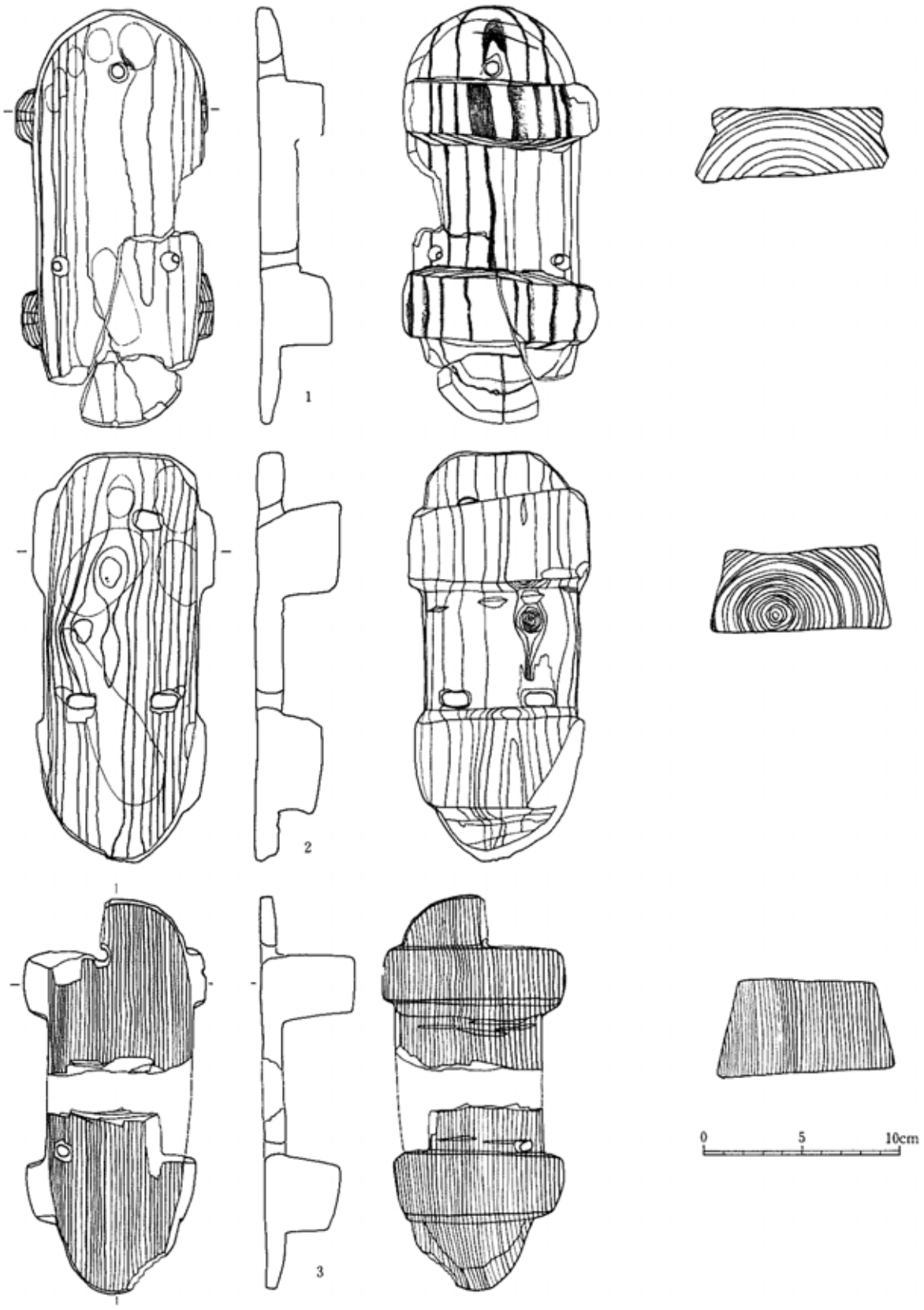
No.	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1		人形	河川跡	SD2000 層		99×9×0.8	ヒノキ	片足欠損	不明
2		人形	河川跡	SD2000 12層		14.5×2.5×0.5		墨により眉・目・髪を表現している。	8世紀中～9世紀初
3		鳥形	河川跡	SD2000 12層		8.0×2.0×0.3	ヒノキ		8世紀中～9世紀初
4		馬形	河川跡	SD2000 12層		9.5×2.4×0.2	スギ	墨により前髪・目を表現している。	8世紀中～9世紀初
5		蛇形	河川跡	SD2000 層		21.5×径3.6	ヤナギ属	尾部欠損	不明

第151図　形代



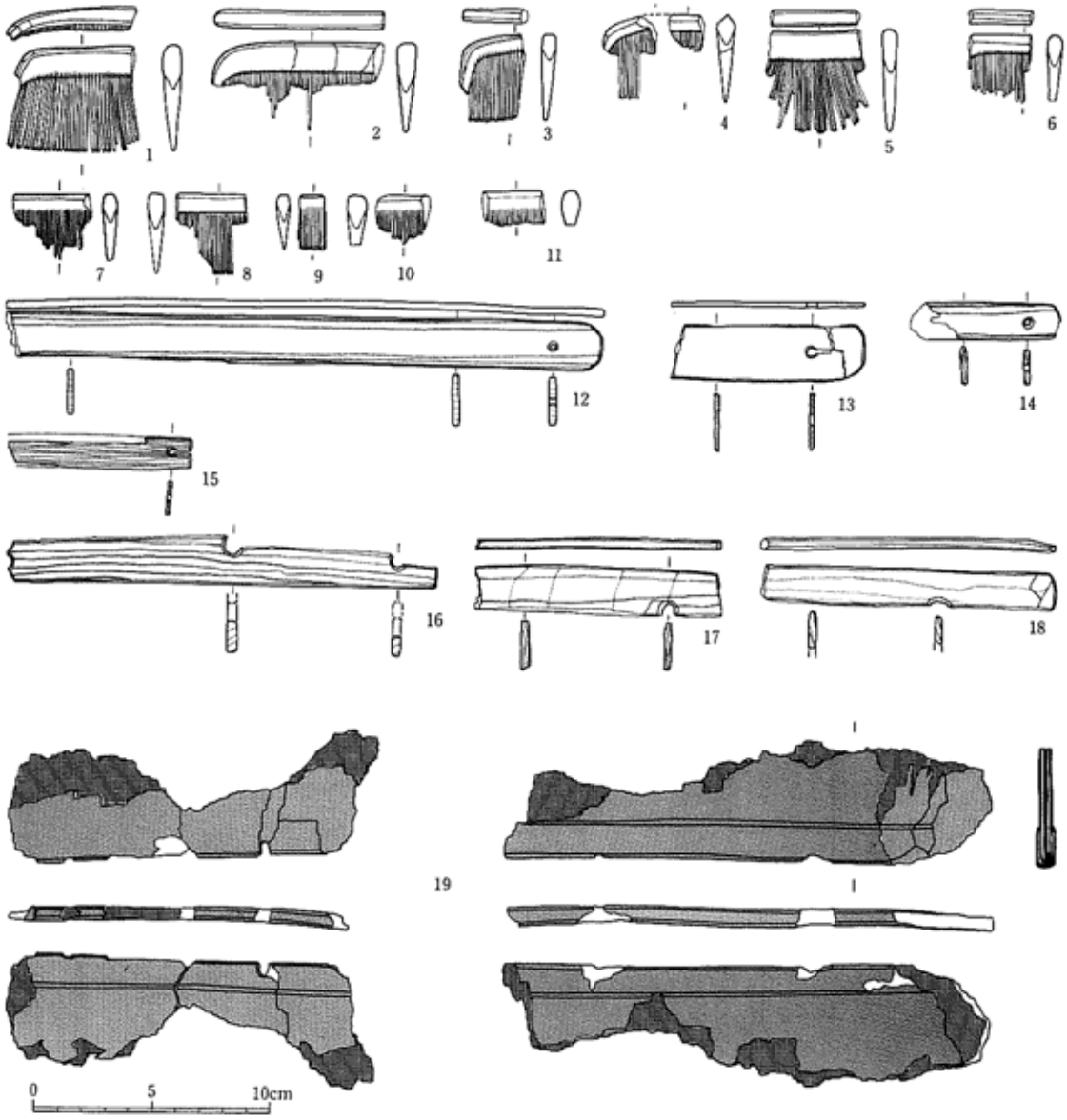
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0200	下駄（左）	東西大路	SX10 南側溝 D 期		20.5×11×6.5			9 世紀前葉？
2	0201	下駄	西 2 道路	SX20 西側溝 D 期		19.5×13×5	クリ		9 世紀前葉？
3	0202	下駄	西 2 道路	SX30 東側溝 1 期		11.5×9×2	クリ	焦げている。	10世紀後半

第152図　下駄（1）



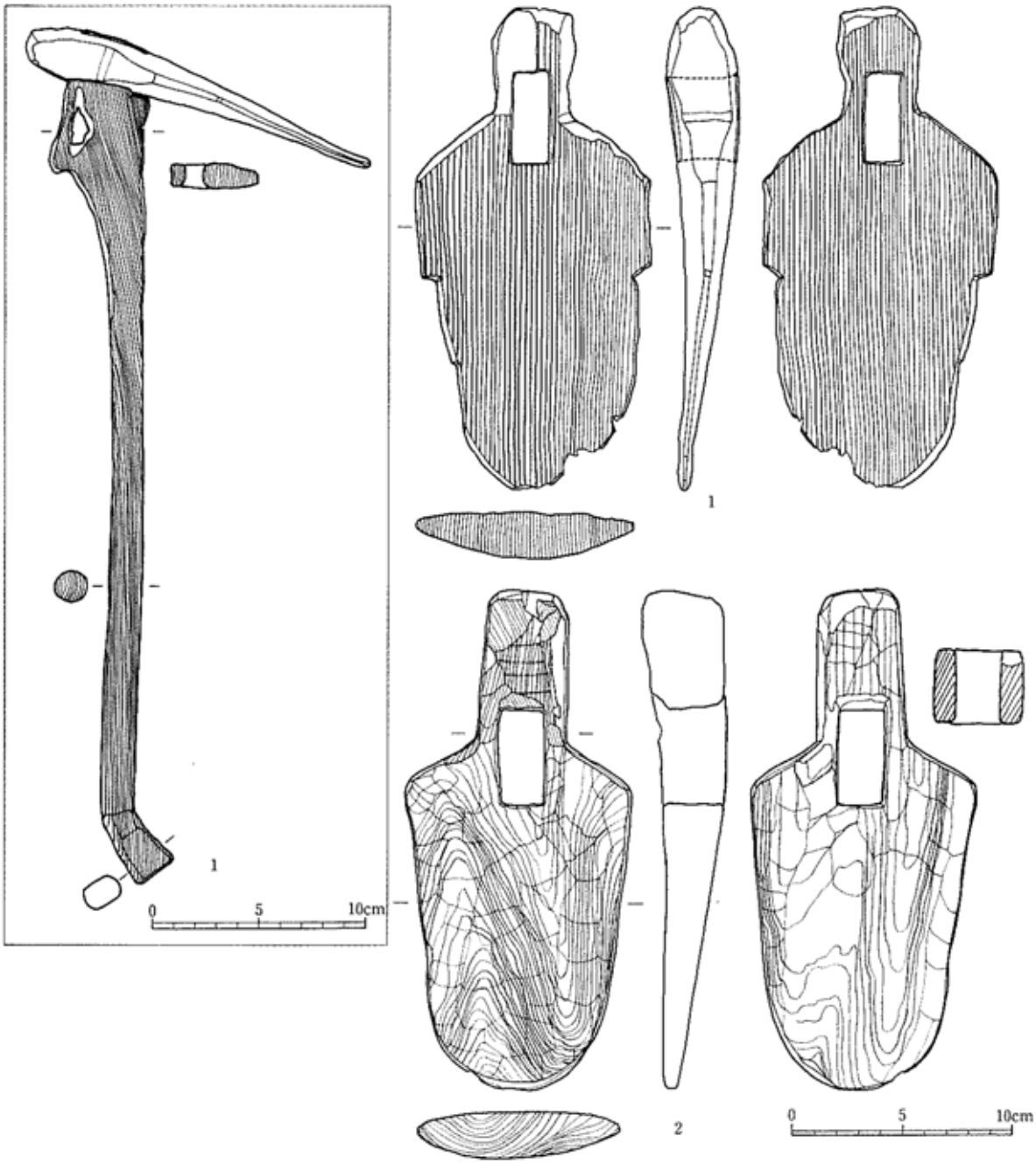
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	0203	下駄（左）	北1西3区	SE502		13×10×3.5			5群10世紀
2	0204	下駄（左）	南1西2区	SB1176　N1,E3 柱穴		20×7×5			9世紀後半
3	0205	下駄	南1西2区	SD1020B　土壙		19×7.5×5	ニレ属		10世紀前半

第153図　下駄（2）



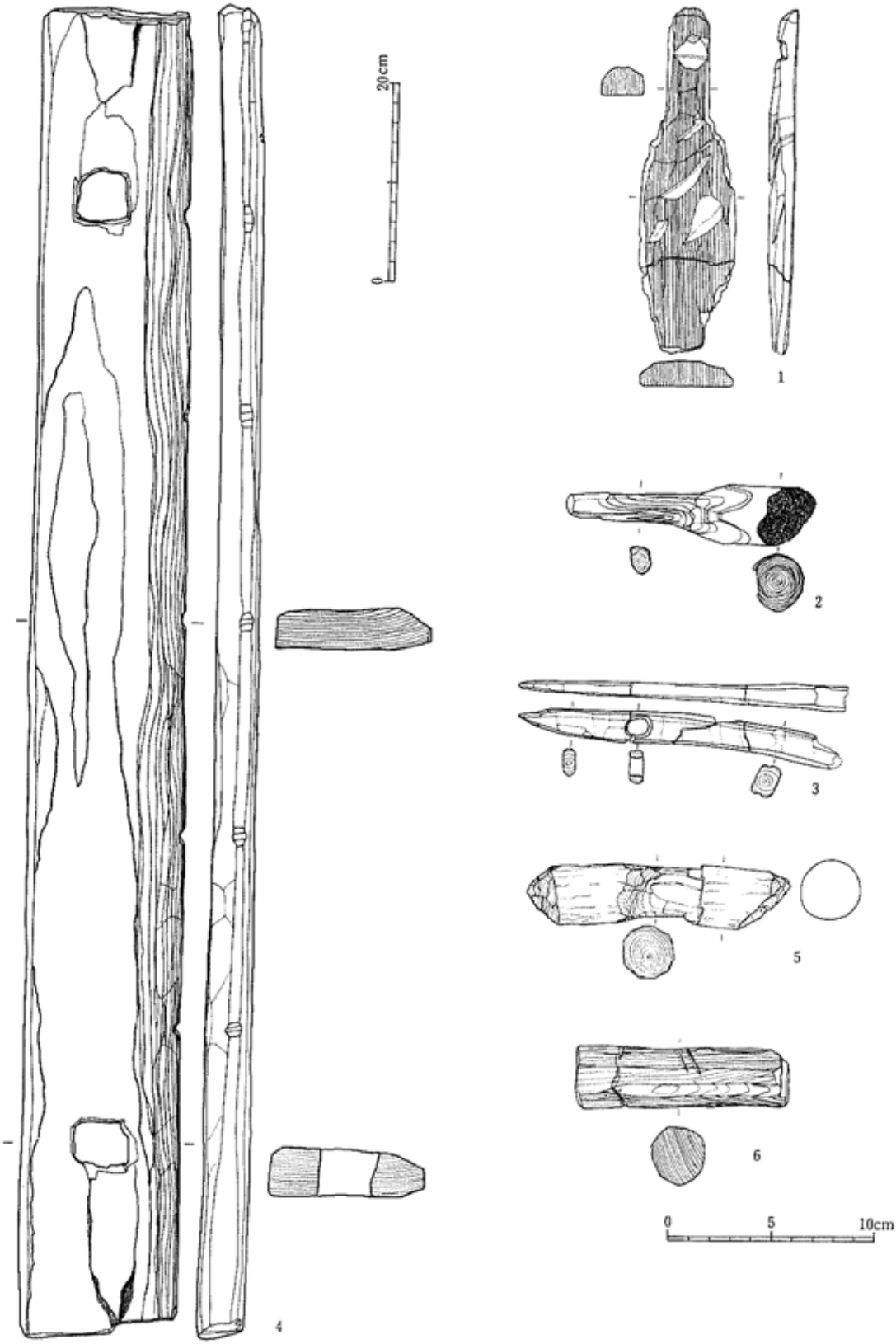
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0206	横櫛	河川跡	SD2000 10層					9世紀前半
2	0207	横櫛	河川跡	SD2000 12層			ツゲ？		9世紀初頭？
3	0208	横櫛	河川跡	SD2000 10層		4.0×3.0×0.5			9世紀前半
4	0209	横櫛	河川跡	SD2000 12層		3.5×2×1			9世紀初頭？
5	0210	横櫛	河川跡	SD2000 10～11層					9世紀前半
6	0211	横櫛	河川跡	SD2000 11層					9世紀初頭
7	0212	横櫛	河川跡	SD2000 12層		3.5×3×0.5			9世紀初頭？
8	0213	横櫛	河川跡	SD2000 11層		3.5×3×1			9世紀初頭
9	0214	横櫛	河川跡	SD2000 11層		2.5×1×0.5			9世紀初頭
10	0215	横櫛	河川跡	SD2000 9～10層		2×2×1			9世紀代
11	0216	横櫛	南1西2区	SK2045		2.5×1.5×0.7			
12	0217	檜扇	南2西1区	SE1606 4層		26×2×0.3	モミ属		4群10世紀前葉
13	0218	檜扇	東西大路	SX10北側溝D期		8.5×2.5×0.3	スギ		9世紀前葉？
14	0219	檜扇	東西大路	SX10南側溝G期		5.5×1.7×0.3	サワラ		10世紀中頃
15	0220	檜扇	河川跡	SD2000 9層			ヒノキ		9世紀中葉
16	0221	檜扇？	東西大路	SX10北側溝D期		18×2.5×0.5	ヒノキ	3ヶ所に孔	9世紀前葉？
17	0222	檜扇？	北1西3区	SK410		11×2×0.4	ヒノキ		不明
18	0223	檜扇？	南2西1区	SD1740		8×1.5×0.3	モミ属		
19	0224	鳥帽子（乾漆）	北1西3区	SI560 2層					3群9世紀後半

第154図　櫛・檜扇・鳥帽子



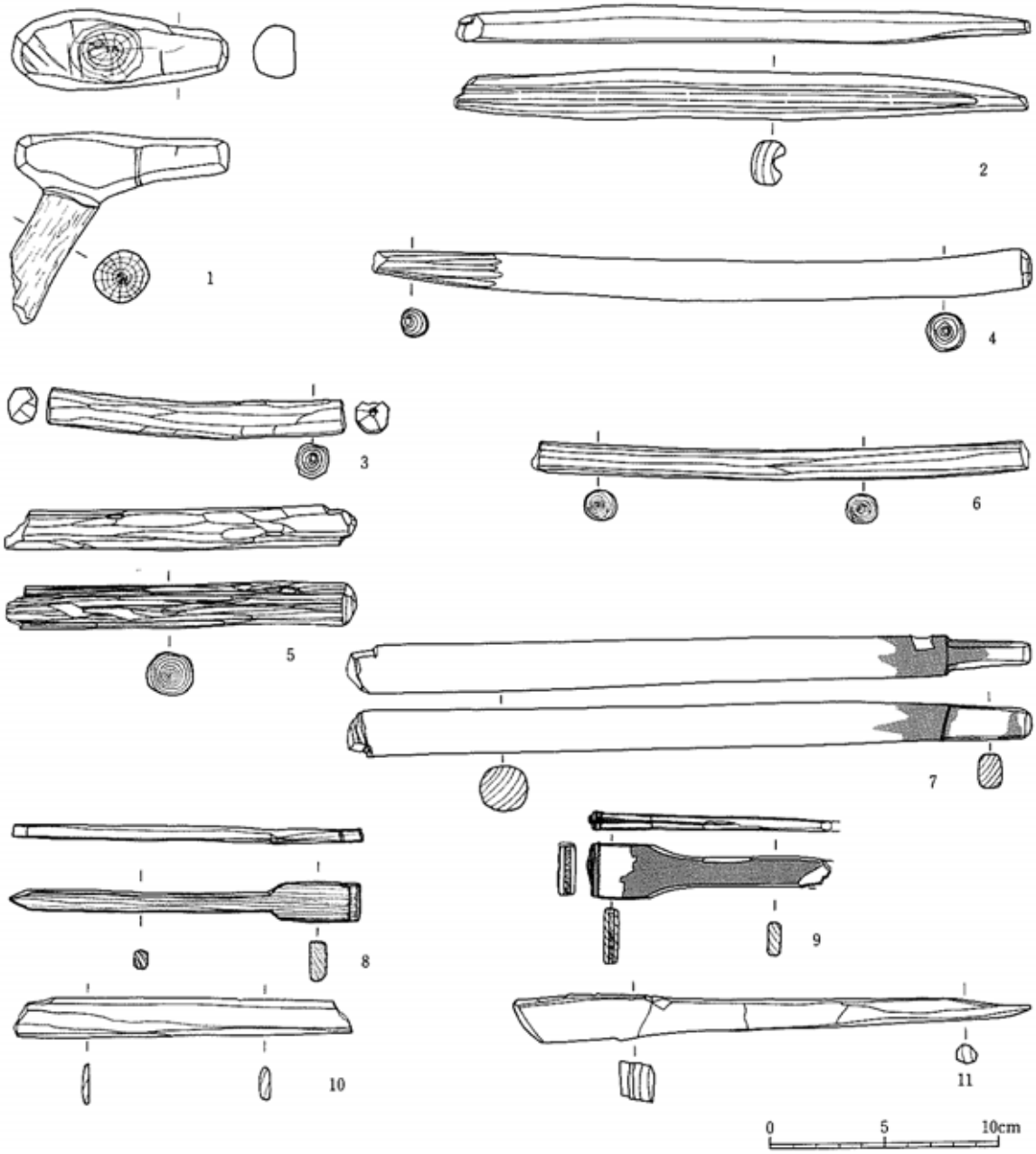
No	登録No	種　別	地　区	遺　構・層　位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0225	鍬	北1西3区	SK541　最下層	1/1	鍬柄75×8.9×2.5 鍬身 34.1×15.6×5.2			3群9世紀後半
2	0226	鍬身	北1西3区	SB862b N2 W2 柱穴		33.5×16×5.8		磨製に転用	9世紀後半

第155図　鍬



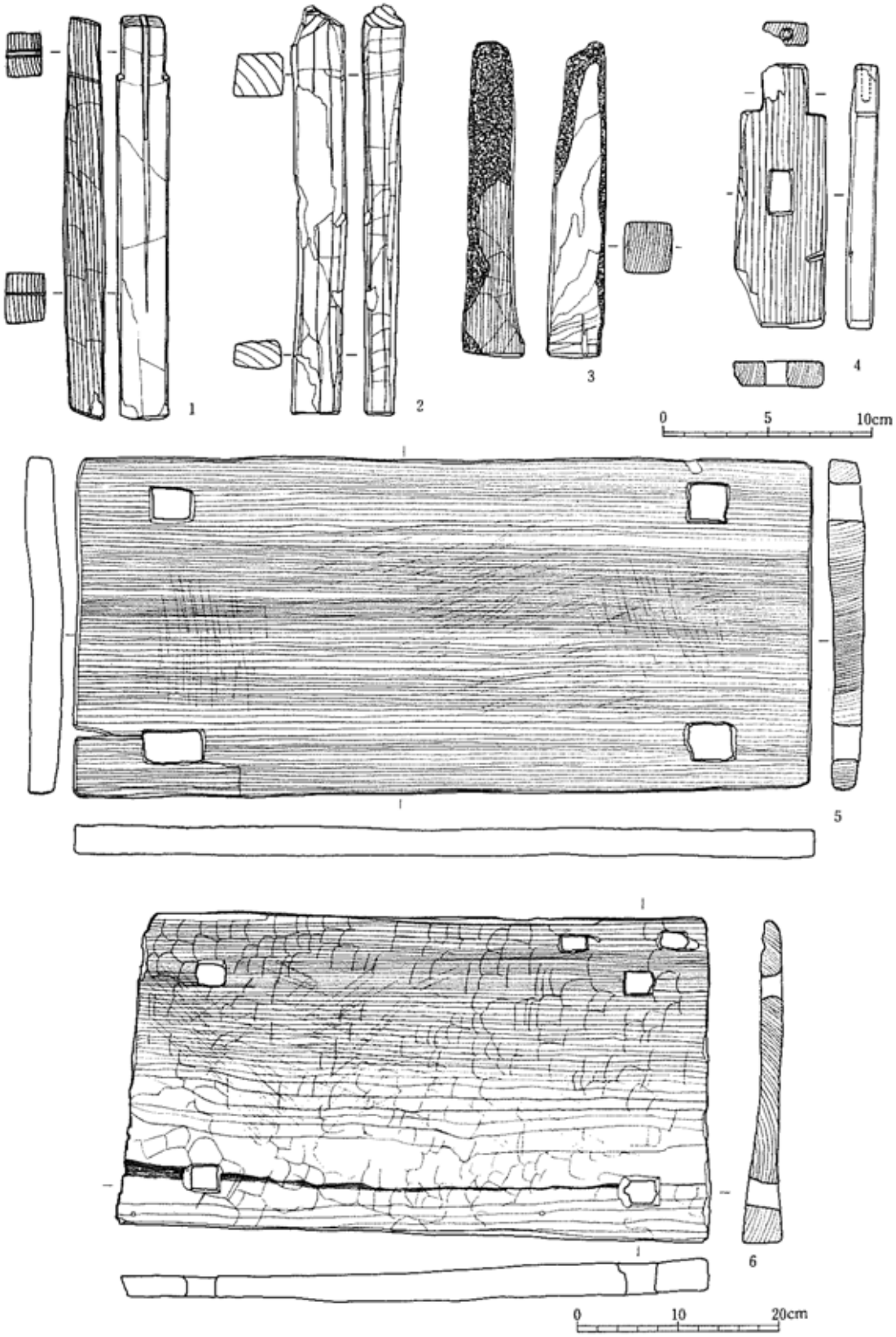
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	0227	鍬身	東西大路	SX10 南側溝 B 期		27×7.5×1.5			9世紀前葉
2	0228	横槌	東西大路	SX10 南側溝 F 期		19×4.5	モミ属	頭部焼失	10世紀前葉
3	0229	屋根針	南1西2区	不明		2×34	クリ	先端中央に穴	不明
4	0230	編み台	北1西3区	SE660 井戸枠上面		160×20×5		側片に刻み目。両端に孔（井戸枠転用）	2群9世紀前半
5	0231	木錘	北1西3区	SD1020A　杭		20×5	クロマツ		2群9世紀前半
6	0232	木錘？	北1西3区	SB756 N1 E1 柱穴		16.5×4.5	クリ	礎板として転用	9世紀前半

第156図　鍬・木槌・編台・木錘・屋根針



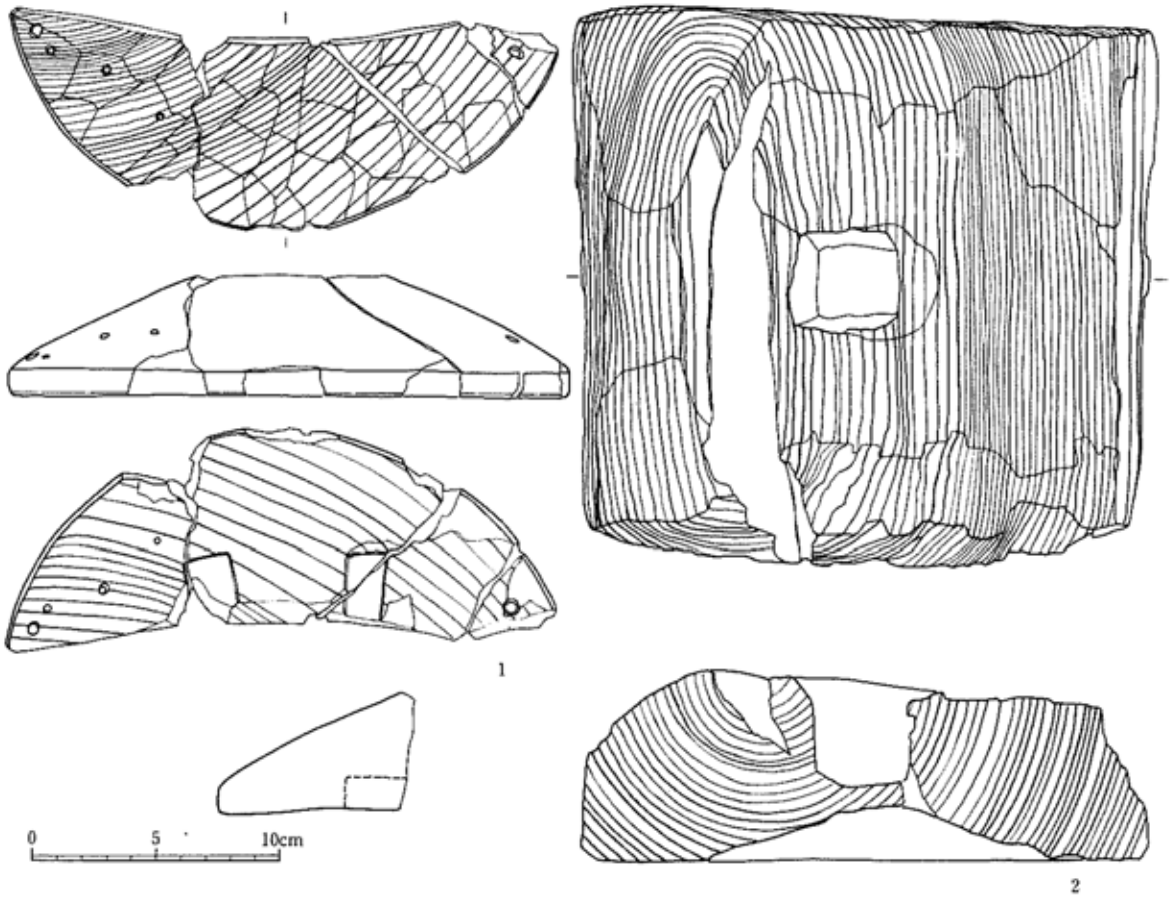
№	登録№	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0233	斧柄柄？	南1西2区	SE50　井戸枠内2層		10×3×2			4群10世紀前葉
2	0234	工具の柄	北1西3区	SE660　4層		26×2.5×1.5	ウコギ属	両端摩滅。組い溝あり	2群9世紀前半
3	0235	工具の柄	北1西3区	SE660		13.5×1.7	シラキ		2群9世紀前半
4	0236	工具の柄	南1西2区	SE2267　1層		30×1.5	ムラサキシキブ		III期9世紀中葉
5	0237	工具の柄	南1西2区	SE50　1層　ヌキ		16×2	コナラ属クヌギ節		4群10世紀前葉
6	0238	工具の柄	南3東1区	SD3625		22.5×1.5	アカマツ		9世紀後半
7	0239	弓	北1西3区	SE659　枠内		31×2.5		漆塗り。切断	II期9世紀前半
8	0240	刷毛	南1西2区	SE2265　抜取ウ穴		16×2×0.5		端部に漆付着。（漆塗用）	IV期9世紀後葉
9	0241	刷毛	東西大路	SX10北側溝C期		11×2.5×0.7	ヒノキ	漆付着。（漆塗用）毛残存	9世紀前葉
10	0242	簪	南2道路	SX1900北側溝E期		(14)×1.5×0.3	スギ	漆付着）	10世紀
11	0194	木釘？	南1西2区	SK3023　3層		23.5×1.5×1.5			III期9世紀中葉

第157図　工具類



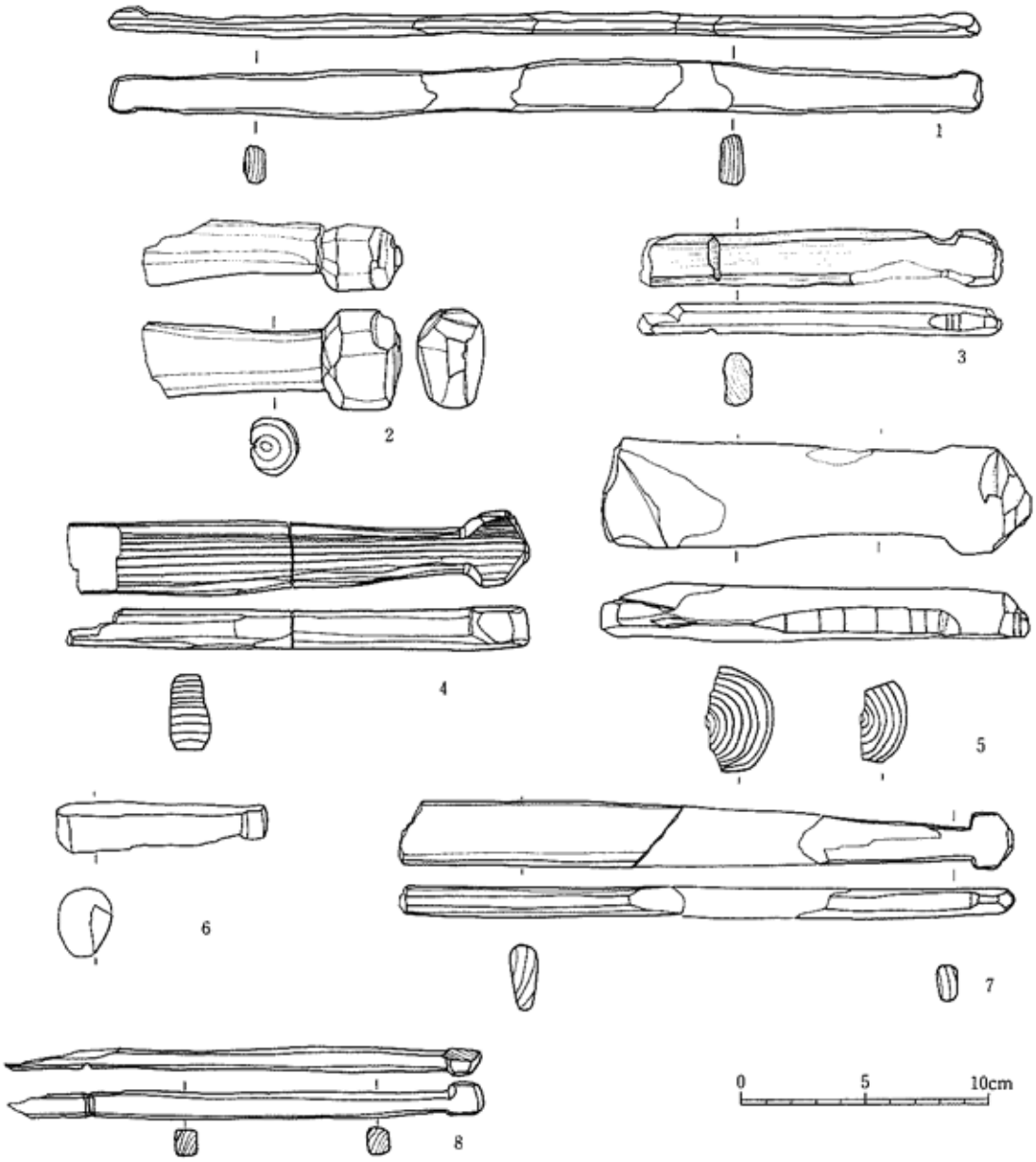
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0243	机脚	北1西3区	SK410		20×2.5×2	スギ	頭部にくさびを打ち込む	不明
2	0244	机脚？	東西大路	SX10 北側溝 D 期		20.5×2.5×1.7	クマシデ属イヌシデ節	上部は切断されている	9世紀前葉？
3	0245	机脚？	南1西2区	SD1020A 堀		15×3×2.5	モクレン属	上部が抜けている	2群9世紀前半
4	0246	机脚？	北1道路	SX4013 北側溝 B 期		13×4.5×1	カエデ属	中央に柄穴 上部に釘痕	9世紀後半
5	0269	机天板	南1西2区	SE3026		72×32×4		刃物傷 井戸枠材に転用	4群10世紀前半
6	0270	机天板	南1西2区	SE3026		55×30×4		刃物傷。手斧痕。井戸枠	4群10世紀前半

第158図　脚・天板



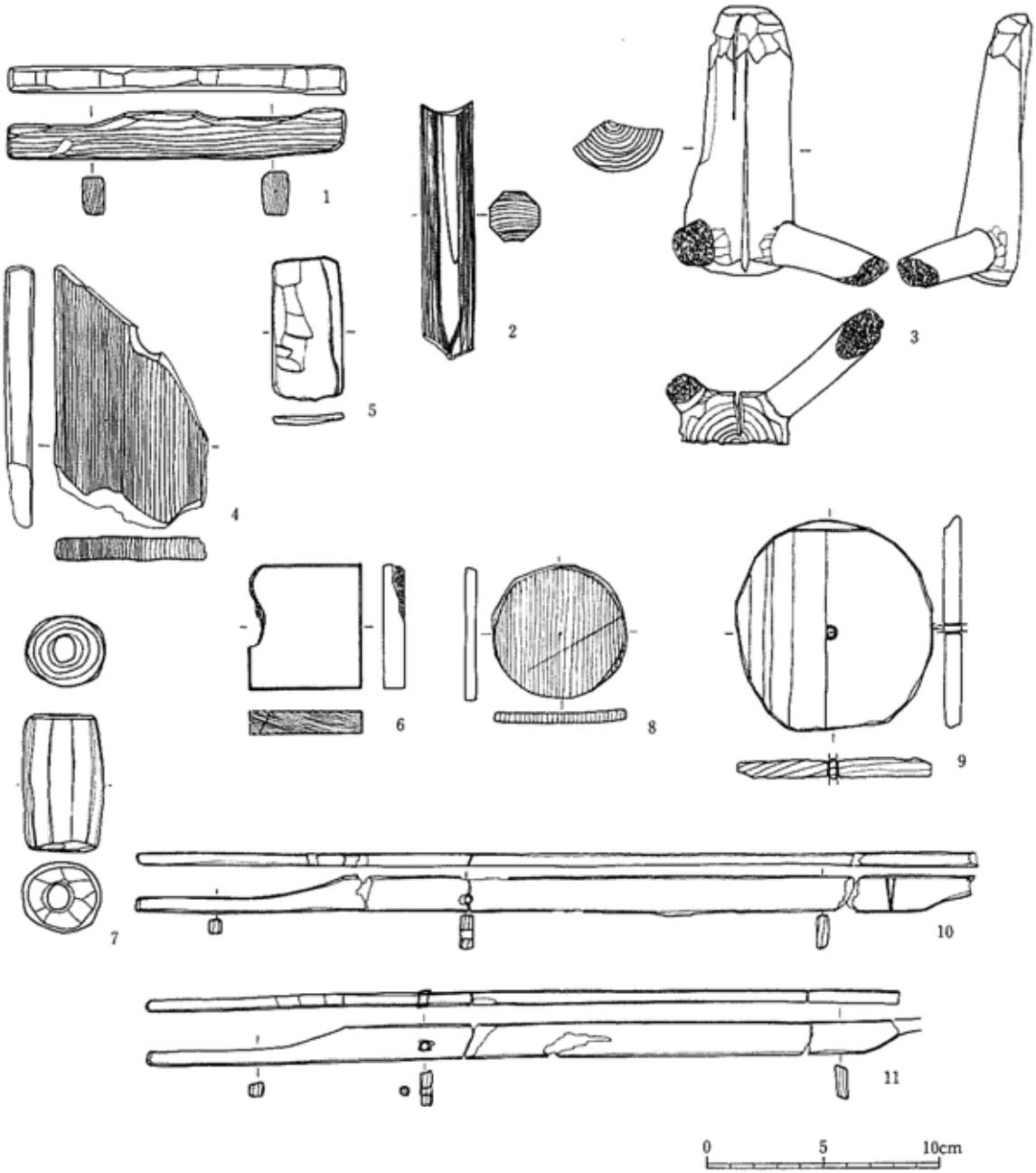
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	0247	燈台？	南3東1区	SD1606　4層	1/2	23×5		長方形の彫込み2　両端に補修孔	4群10世紀前葉
2	0248	台木	東西大路	SX10南側溝C層　土壙		23×24×6	モミ属	方形のほぞ孔　底面にえぐり	9世紀前葉

第159図　台



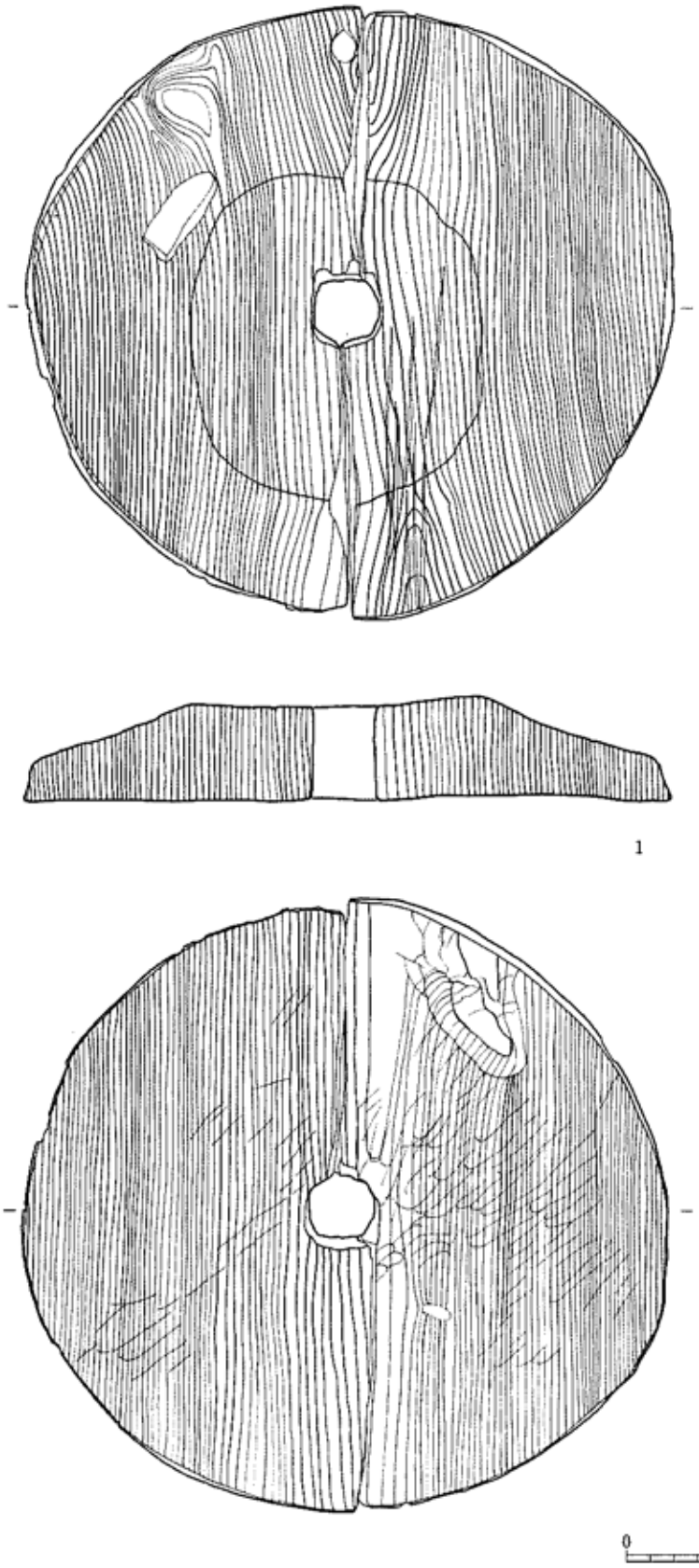
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0249	部材	北1西4区	SD4031	1/1	36×2×0.7	ウコギ属	布巻具か	
2	0250	部材	東西大路	SX10 北側溝C期		11×4×2.7	クマノミズキ	農工具の柄の頭部か	9世紀前葉
3	0251	部材	西2道路	SX20 東側溝F期		15×2×1	モミ属	布巻具か	10世紀前葉
4	0252	部材	南2道路	SX1900　灰白直上		19×3×1.5	コナラ属コナラ節		10世紀前葉
5	0253	部材	河川跡	SD2000　9層		18×4.5×2.5	クリ		9世紀中葉？
6	0254	部材	西1道路	SX1250 東側溝F期		9×2×1.5			10世紀後半？
7	0255	部材	河川跡	SD2000　8～10層		9×2×1.512×3×1	コナラ属コナラ節	2片	9世紀代
8	0256	部材	南3東1区	SD3625		20×1×1	コナラ属クヌギ節		9世紀後半

第160図　組合せ部材



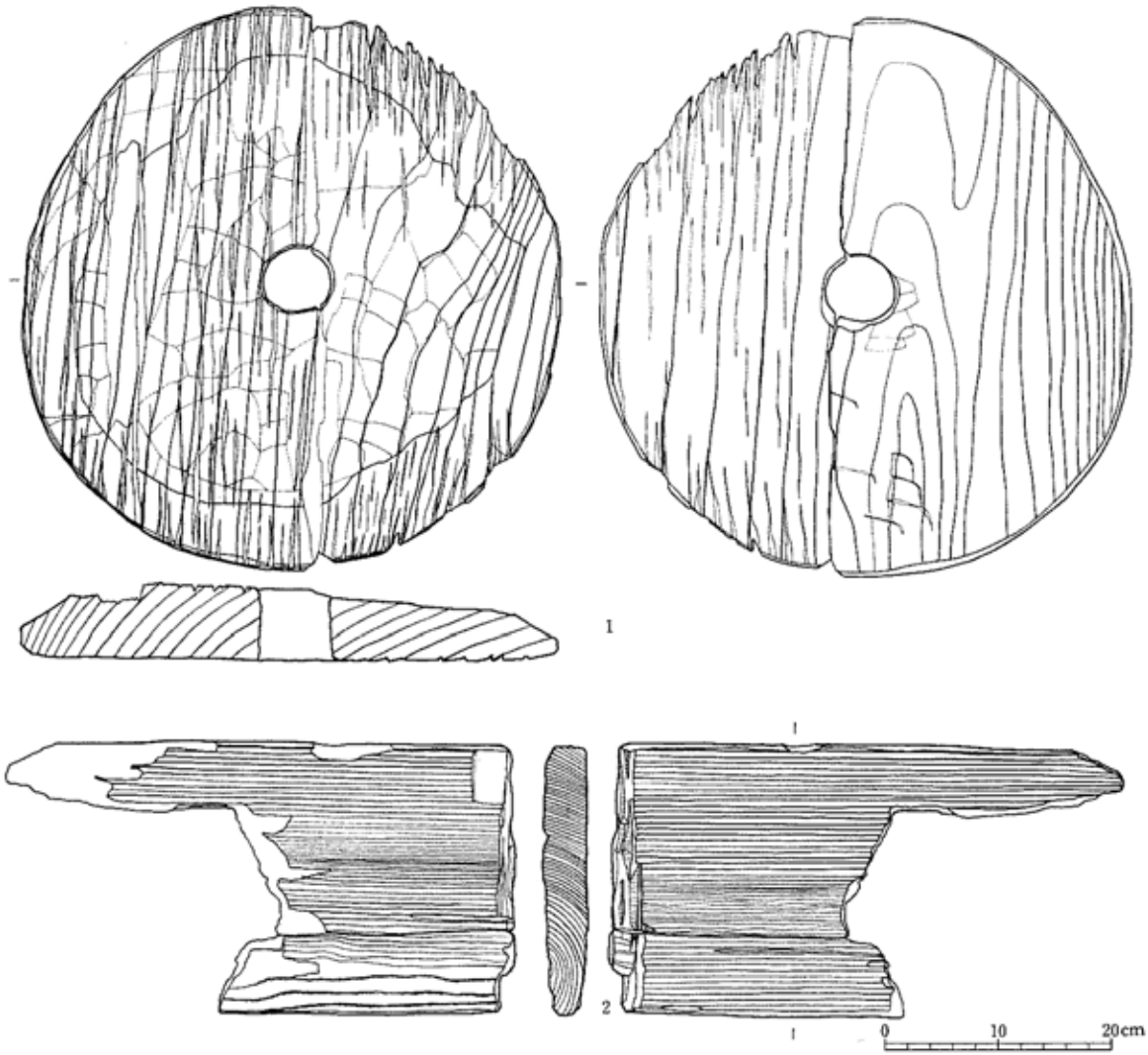
№	登録№	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　　考	時期・年代
1	0258	不明品	河川	SD2000　4層		15×2×1	サワラ		10世紀中葉
2	0259	不明品	河川	SD2000　5～7層		11.5×径2		八角形の棒	10世紀前葉
3	0260	不明品	河川	SD2000　9層		12×5	モミ属	一部焼け焦げている	9世紀中葉
4	0261	不明品	東西大路	SX10 南側溝 E期		11.5×7×1	クリ		10世紀前葉
5	0262	不明品	南1西2区	SD1240A　掘り方		6.5×3×0.3	モミ属	鞦韆軸頭部か？	5群10世紀
6	0263	不明品	東西大路	SX10 南側溝 D期		5.5×5	ムクノキ	一部焼け焦げている	9世紀前葉？
7	0264	不明品	東西大路	SX10 北側溝 D期		6×3.5	ニワトコ	浮子か？	9世紀前葉？
8	0265	不明品	東西大路	SX10 北側溝 D期		6×0.5	スギ	コンパスの釘傷	9世紀前葉？
9	0266	不明品	河川跡	SD2000　12層		9.5×0.7	モミ属	曲げ物の底板状の物中央に竹釘あり	9世紀初頭
10	0267	不明品	河川跡	SD2000　12層		42×2×1	モミ属	0266.0268と組合せる部材か、竹釘あり	9世紀初頭
11	0268	不明品	河川跡	SD2000　12層		38×2×1	モミ属	0266.0267と組合せる部材か、竹釘あり	9世紀初頭

第161図　不明木製品



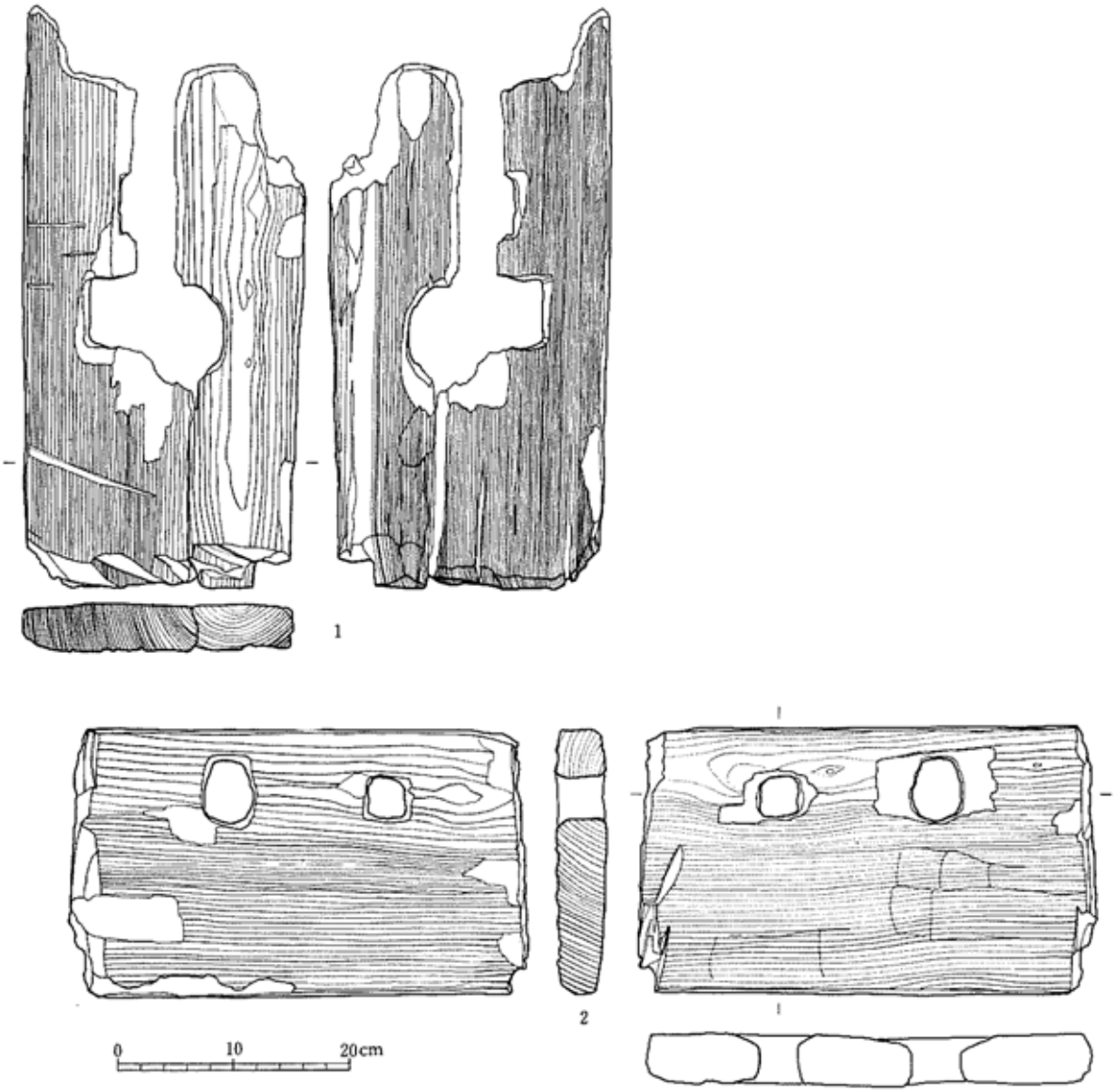
No	登録No	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0271	鼠返し	北1西3区	SB585 N2 E3 柱穴		54.2×8.6		礎板として転用柱の痕跡がみえる	9世紀後半

第162図　建築部材（1）鼠返し



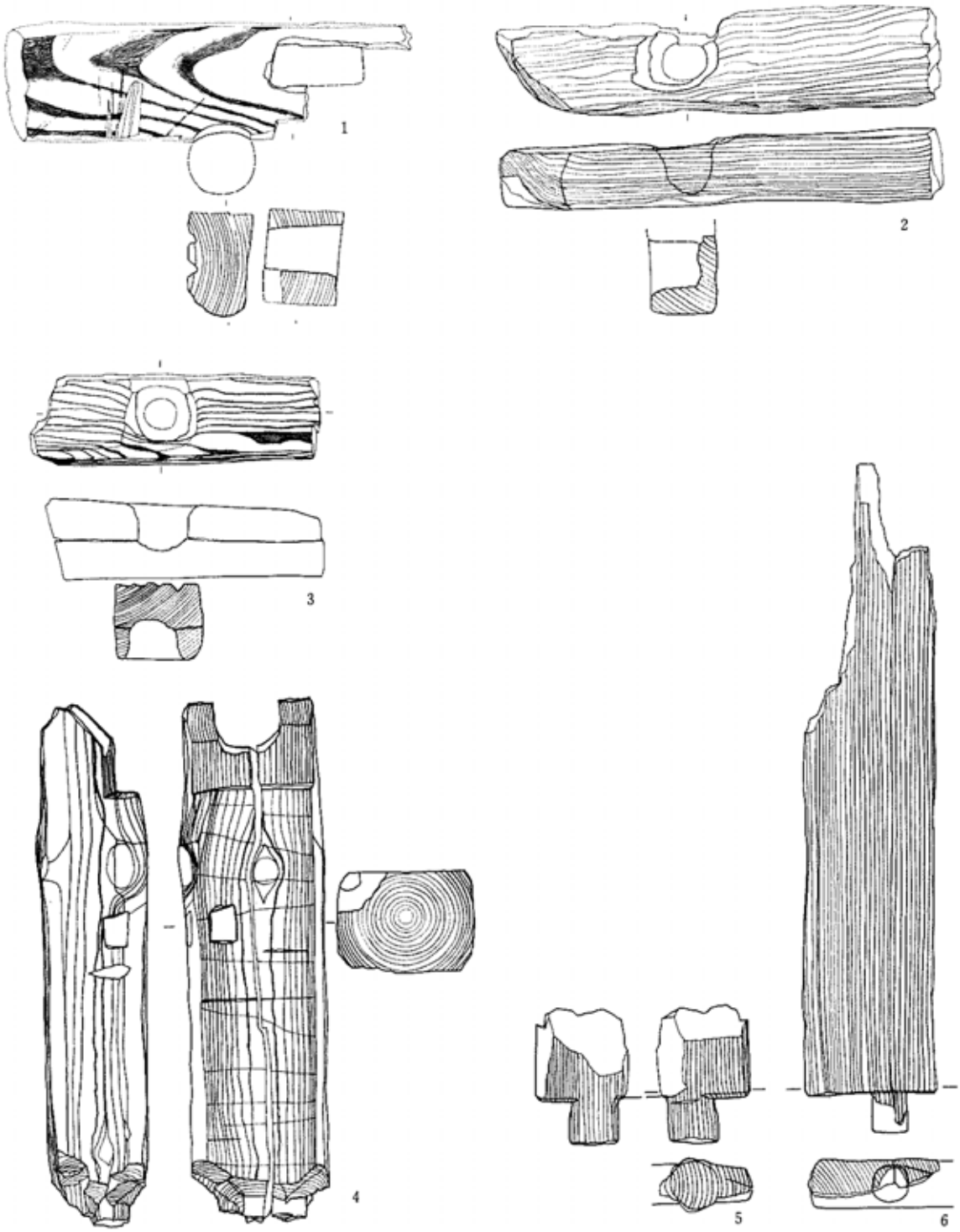
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0272	鼠返し	北1西3区	SB863 N3 E3+N1 E3 柱穴		49.9×6.8		半裁し礎板として転用	9世紀後半
2	0273	雨垂板？	北1西3区	SB863b N3 W3+N2 W3 柱穴		45.4×24.1	クリ	方形・円形の孔あり	9世紀後半

第163図　建築部材（2）鼠返し・雨垂



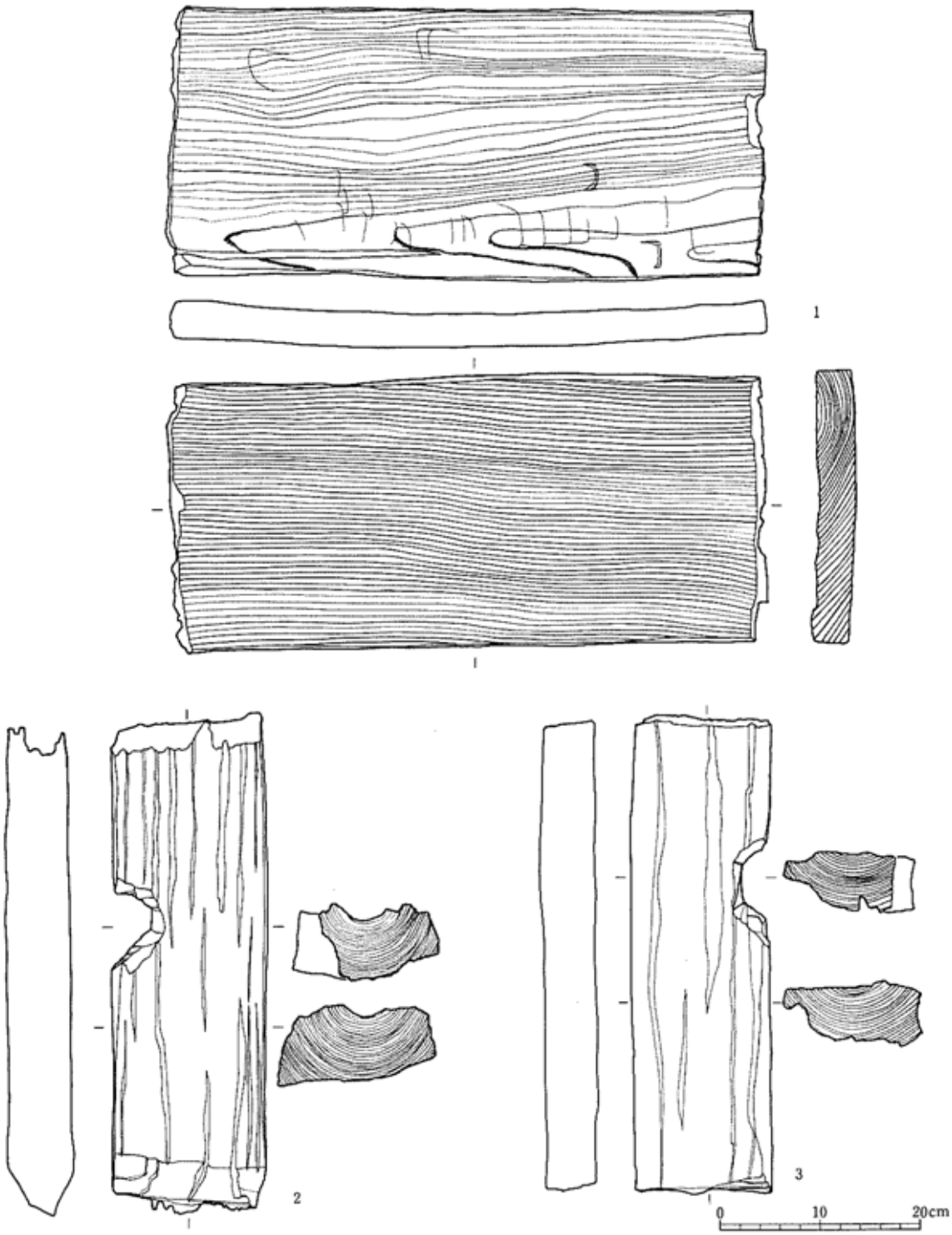
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	0274	扉柱板？	北1西3区	SB862b N1 W3 柱穴		48.4×24.3×5		方形・円形の孔あり	9世紀後半
2	0275	扉柱板？	北1西3区	SB862b N3 W2 柱穴		39.5×23.4×4.7	クリ	0274と同一材。二孔ある	9世紀後半

第164図　建築部材（3）扉庇



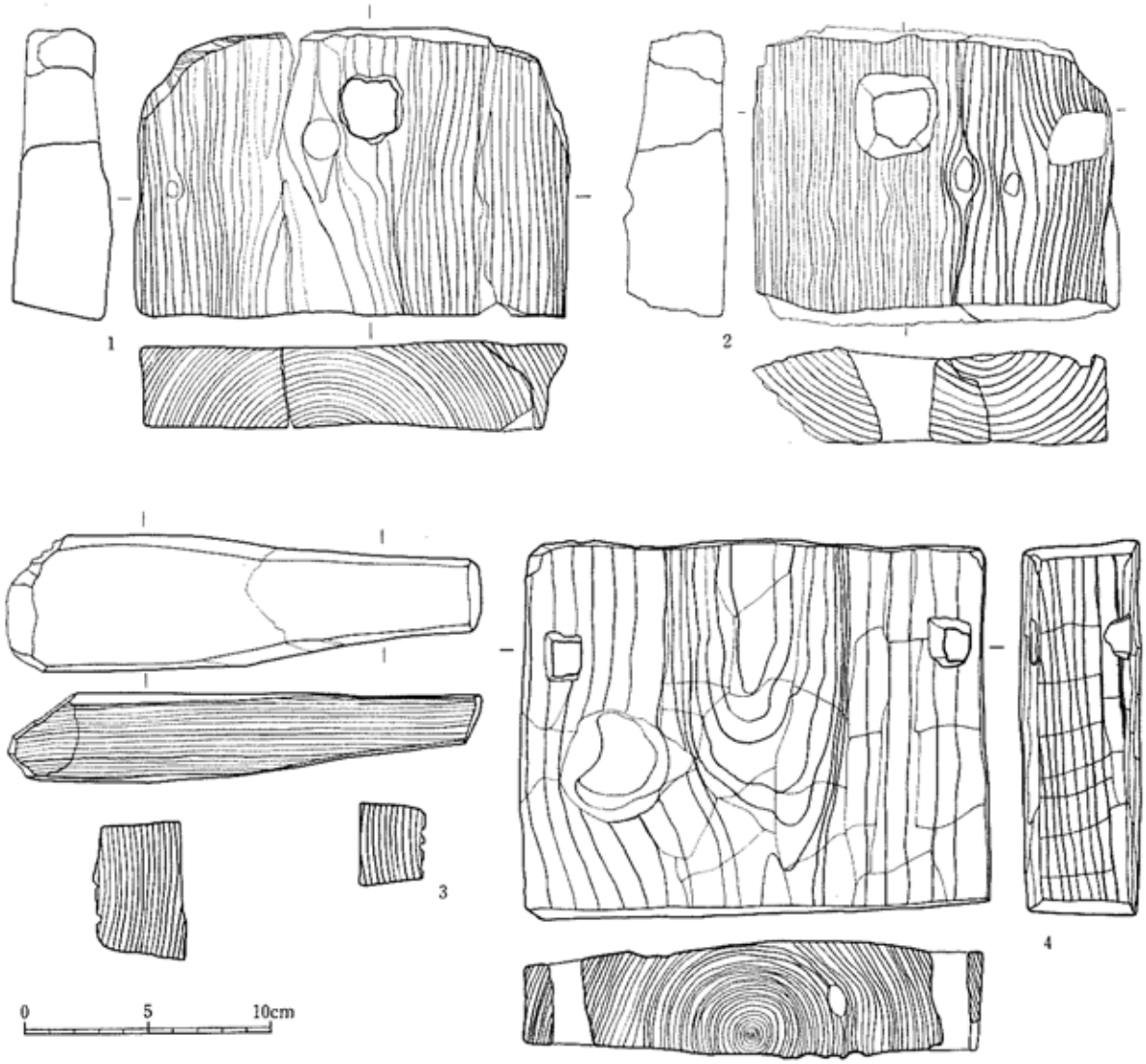
No.	登録No.	種別	地区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備考	時期・年代
1	0279	蹴放し？	北1西3区	SB756 N2 E3 柱穴		30×8.5×5		円形・方形の孔。切断し転用	9世紀前半
2	0280	蹴放し？	北1西3区	SB756 N2 E3 柱穴		33×7.5×5		扉軸受け穴。切断し転用	9世紀前半
3	0281	蹴放し？	北1西3区	SB756 N2 E2 柱穴		21.5×6×5.5		扉軸受け穴。切断し転用	9世紀前半
4	0282	建築部材	北1西3区	SB749 N3 E4 柱穴		53×12×11		切り組、穴。礎板として転用	9世紀前半
5		扉板？	北1西3区	SB750 N4 E2 柱穴		59.5×14×4	クリ		10世紀前葉以前
6	2071	扉板	北1西3区	SB750 N5 E3 柱穴		14×9×5.5	クリ	軸棒は多角柱	10世紀前葉以前

第165図　建築部材（4）蹴放し・扉板



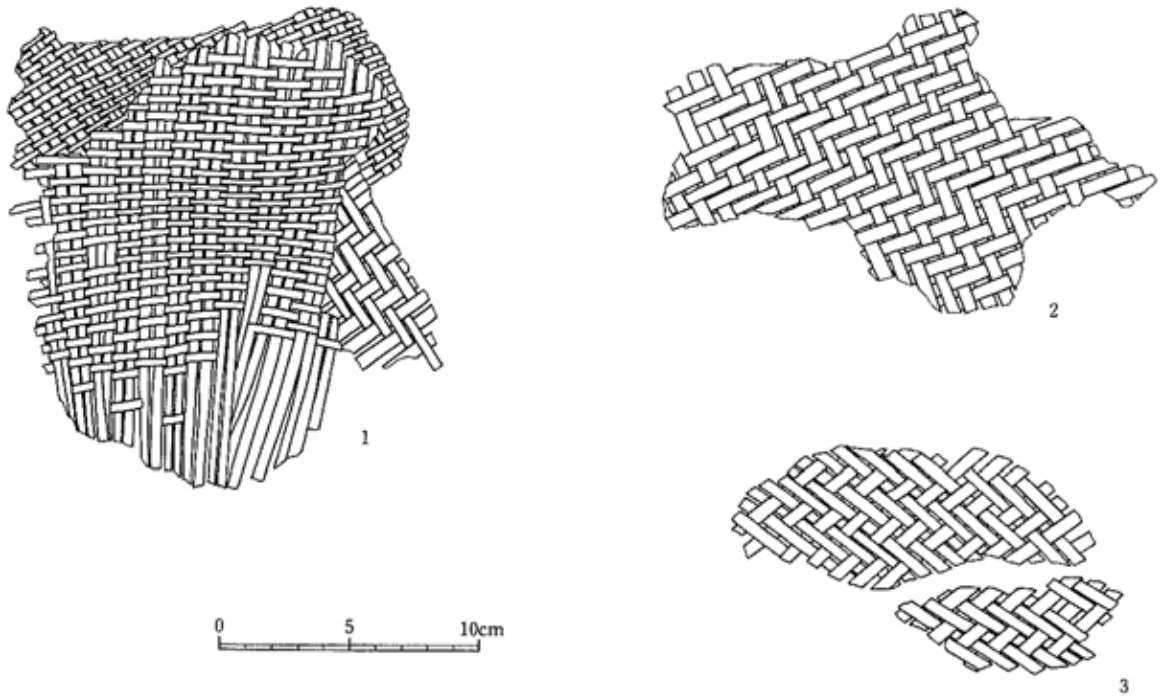
No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1	0276	建築部材	北1西3区	SB857 N4 E3 柱穴		59.7×27.8×3.9	モミ属	板状の部材	9世紀後半
2	0277	建築部材	北1西3区	SB857 N3 E1 柱穴		50×15.3×5.5	モミ属	切込みのある板材	9世紀後半
3	0278	建築部材	北1西3区	SB857 N2 E3 柱穴		42.8×14.3×5.6	モミ属	切込みのある板材	9世紀後半

第166図　建築部材（5）板材



No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残　存	計測値	樹　種	備　考	時期・年代
1	0283	建築部材	南1西2区	SB3122 N3 E1 柱穴		27×18.5×5.5	ケヤキ		9世紀後半
2	0284	建築部材	南1西2区	SB3122 N3 E1 柱穴		23×17.5×6	ケヤキ		9世紀後半
3	0285	建築部材	南1西2区	SB3122 N3 E1 柱穴		30×6×8	クロマツ		9世紀後半
4	0286	建築部材	南1西2区	SB3122 N3 W1 柱穴		30×25×15	コナラ属クヌギ節		9世紀後半

第167図　建築部材（6）



No	登録No	種　別	地　区	遺構・層位	残存	計測値	樹種	備　考	時期・年代
1		ざる	河川跡	SD2000　11層					9世紀初頭
2		ざる	北1西3区	SK952　1層					
3		ざる	北1西3区	SE659　枠内					II期9世紀前半

第168図　籠